

(表紙)

前 編 舊 記 雜 錄 卷十二	忠 宗 公 貞 久 公 自 文 保 元 年 至 元 亨 二 年
-----------------------------------	--

1194

〔國史〕

文保元年丁巳、是年二月改元文保、正月猶是正和六年、春二月三日改元、日本大

史、冬十二月二十一日、政所下文、使公領日向高知

尾・肥前早湊村・福萬名地頭職及副田三郎次郎種信舊

邑、以代菊池莊領家職、拋道義公旧譜

二年戊午春二月二十六日、

花園天皇傳位於
後醍醐天皇、拋大日本史三月十五日、公傳薩摩國守護職、十

二島地頭職、薩摩郡地頭職、山門院・市來院・鹿兒島郡・永吉、讚岐國榎無保上村・下村、信濃國太田莊南

1195

『臺明寺文書』

大隅國正八幡宮修理事、去年十月廿一日關東御教書同御事書今月十四日到來、案文如此、早任被仰下之旨、三月

鄉、下總國相馬郡符河村・下黒崎、發戶、日向國高知尾

莊、豊前國副田莊於世子、世子立、是爲道鑑公、拋道鑑公

譜、公善和歌、所作載新後撰集・續千載集、生七男、

長爲道鑑公、次忠氏、次忠光、次時久、次資久、次資

忠、次久泰、忠氏稱下野守、是爲和泉氏祖、忠光稱三

郎左衛門尉、是爲佐多氏祖、時久稱近江守、是爲新納氏

祖、資久稱安藝守、是爲樺山氏祖、資忠稱尾張守、是

爲北郷氏祖、久泰號石坂九郎左衛門尉、無嗣、拋島津

按忠氏以下五人、當時仍稱島津氏、至於子孫、各稱其氏、惟久泰無

嗣、則當身原稱石坂氏耳、姑書於此、以俟後考、又按道義公歌二首、

見新後撰集、其一載恋部、曰、奈美已由留、曾天乃美奈止乃、于幾未

久良、于幾天曾止利、弥波奈加札計留、其一載雜部、曰、奈加奈加

仁、于幾毛津良幾毛、之良札寸波、己己呂乃未未仁、与遠也寸久左

牟、一首載統千載集雜部、曰、加世和太留、奈津美乃加和乃、由不久

礼仁、也未加計寸寸、道鑑公生於文永六年己巳、母三池氏、

木工助入道道智之女、四月八日、拋相馬氏古系圖是歲年五十三襲封同、二十三日、

幕府命相模守・武藏守、與道鑑公書、使領守護職、如

道義公狀、拋道鑑公旧譜、按大日本史、正和四年七月、以北条基

中可被終其功候、仍執達如件、

【当文保元年】
正和六年二月十五日

大宰少貳(盛經)
(花押)

臺明寺院主御房

【右ノ原書ハ、旧御番所御文書ニ番箱中ニ一巻アリ】

1196

『肝付兼藤傳』

文保元年丁巳、初尊阿爲地頭名越尾張守高家疑即此幸被奪

職田、訴之探題、既而北條師時承幕府命、使探題實政察

其情實、歸我侵地、實政猶且不能裁許、是歲北條遠江守

隨時來爲探題、館在博多尊阿乃又聞隨時、隨時以告鎌倉、

至是三月廿日、幕府守邦使北條相模守高時・北條武藏守

貞顯命隨時、復察情實、歸我侵地、如正和元年下知狀、

1197

『古本末吉檢見崎氏家藏』

大隅國肝付郡弁濟使尊阿申所職并名田島等事、背度々下

知狀、地頭尾張守高家押領云々、而不實之旨、地頭代章

重陳之、於下地者、不日差遣使者、可沙汰付于尊阿、次

押領事、爲實事者、可行罪科也、且糺明眞僞、急速可注

進、且向後猶致違乱者、嚴蜜可被尋沙汰之狀、依仰執達

如件、

文保元年三月廿日

【探題北条隨時】
遠江守殿

【執權高時】
相模守御判
【全貞顯】
武藏守御判

1198

『比志嶋氏文書』

正八幡宮御造營、薩摩國滿家院役□□廊二間内、比志嶋

・西侯・河田三ヶ名分役□□檜皮作事、被勤仕候早、舟

壁金物連子□□未勤、而如役人問答者、所當院相當造營田

□□比志嶋名十分一、西侯名同前、河田名十六分一、皆

濟(用カ)途於番匠大工檜皮工早、仍兩大工請取先□□、然者

於舟壁金物縁青等用途者、所此□□、若當院郡司彼三ヶ

名分役多少論申□□雖爲何ヶ度、可致其明之由、去々年

正和(所カ)三ヶ□□名主等、被入置押書狀候畢、且役人訴狀□□

押書狀、番匠檜皮工等請取案等相副、目錄□□封付目、爲

御不審進覽之、以此旨、可有御(被カ)露候、恐惶謹言、

正和六年四月廿五日 沙弥了惠(裏花押)

進上 山田次郎入道殿

1199

『臺明寺文書』

大隅國臺明寺衆徒等申當國目代甲斐阿闍梨盛範致狼籍由

事、去三月廿五日御教書并御施行、謹下預候畢、

〔口裏〕
(花押)

抑爲彼衆徒等、今年正月廿八日、企夜討令刃傷國衙公人
六郎檢校以下數輩之由、盛範依捧訴狀、去三月十九日、

1201
『岸良氏文書』

被尋下衆徒等候畢、隨而件刃傷事、具官加治木郡司入道
覺譽所令注申候也、而如被副下候衆徒等解狀者、盛範當
年正月廿八日、追捕寺領止上村百姓住宅、乱入當寺一和
尚榮範坊内、与耻辱於兒童云、緯若同篇候者、盛範既爲

大隅國肝付弁濟使入道殿尊阿申、當郷飯熊別當并同扶持
人彦兵衛尉兼村、得布施大夫源盛語、令海賊岸良村御米
船間事、訴狀如此、爲糺明、早可被催進論人等之狀如
件、

訴人、令申子細候之間、可令參決之由、先日相觸衆徒等
候畢、可爲何様候乎、以此旨、可有御披露候、恐惶謹言、

文保元年五月廿二日
前上野介(花押)
(北条時惠)

文保元年五月七日

左衛門尉藤原景綱(裏花押)
請文

〔口裏〕
〔守護代景綱請文〕

1202
「肝付氏六代兼藤傳」

〔此二通ノ原書ハ、旧御番所御文書ニ番箱中ニ一巻アリ〕

文保元年六月九日、弟宗兼算其領田、出見參料用途參賈
文、尊阿(イ)檢檢收裁書界之、

1200
『臺明寺文書』

大隅國臺明寺衆徒等申當國目代盛範致狼籍由事、如今年
三月廿五日御教書者、可注申子細云々、仍致沙汰候之處、
守護代景綱令進上請文候、以此旨、可有御披露候哉、恐
惶謹言、

1203
鹿屋院預所方見參析用途事

合參賈文也

右、用途自宗兼手、所請取如件、

文保元年六月九日
尊阿(花押)

文保元年五月八日

前上野介平時直請文

〔口裏〕
〔上野前司請文〕

〔前上野介平時
直ノ裏ニアリ〕(裏花押)

1204

「伊作家文書在文庫」 「伊作久長譜中正文在卷本トアリ」

和与

嶋津庄内薩摩方伊作庄同日置北郷雜掌法橋信宗与地頭下野彦三郎左衛門尉久長代沙弥道慶、相論年貢以下所務條々、

一宮内・今田・伊与倉三箇名御年貢課役事、

右、御年貢課役、於庄家兩方沙汰人等寄合天遂結解、定員數相分均等、參箇年中可令究弁矣、

一檢見檢注事、

右、檢見檢注、任嶋津庄例、兩方寄合遂其節、守取帳之旨、可定損得、但、檢注使人數者、可爲領家方上下拾人、地頭方上下伍人也、次沙汰人等、或号他行、或稱指合、閣檢見之時者、當日雜事無用之条、爲百姓等煩費之間、向後者收納使并地頭代、令現在者、不願闕如之輩、可遂其節也矣、

一加徵米收納事、

右、收納、止高納之儀、可用斗桶也、更不可有異儀矣、

一牧野事、

右、牧野、依爲無要之山野、馬少々雖放置、以和与之儀、向後永令停止畢矣、

一本百姓逃亡跡地頭方課役事、

右、百姓跡、以和与之儀、地頭方課役等、招居百姓之

程者、名主可令勤仕也、但、向後地頭不可致非法矣、

一木庭山等下地事、

右、木庭山等、相互雖及相論、爲田尻・中里兩名内否、

爲伊与倉名内否、於庄家糺明本跡、有實證者、可避渡

領家御方也焉、

一 地頭方入物坊士等事、(仕也)

右、入物坊士、止新儀、可任先例也、更不可有異儀矣、

一 蘭牟田事、

右、蘭牟田、雖及相論、以和与之儀、地頭不可相綺之

上者、不可有子細矣、

一 地頭狩事、

右、狩者、相互雖及相論、爲百姓安堵、以和与之儀、

每月定四箇日之上者、不可有違犯矣、

一 濱寄物支配事、

右、寄物、雖及相論、以和与之儀、可爲領家拾分柒、

地頭拾分參矣、

一 枯木燒桑々代并芋代事、

右、芋代桑代者、不謂逃死亡并現在、每年遂檢見、可

收納之上者、不可有異儀矣、

一 逃亡死亡跡作毛事、

右、作毛、領家參分貳、地頭參分壹、可分取之由、被載先御下知畢、然而、向後爲撫民之儀、相分年貢加徵分限於兩方、於所殘者、可給与名主、且牛馬鳥鹿未漁失以前、可令支配者也矣、

一 田尻名領家米事、

右、名内田島、兼一家字有傳、耕作分所當米、正安元年以來分、於庄家名主沙汰人相共遂結解、於未進者、自當年至明年貳箇年中、可令究弁、至下地者、可去出領家方者也矣、

一 上家分地頭召仕由事、

右、上家分、自元不召仕之上者、相互不可有新儀矣、
一 今田名内若王子敷地事、

右、敷地、奉爲 公家關東御祈禱、地頭以荒野之地、雖寄進若王子、於領家御得分者、不可有違乱矣、
一 宮内名市庭事、

右、市庭、可取領家御年貢之由、雜掌雖訴申之、以和与之儀、永止訴訟之上者、不可有領家方之綺矣、

以前條々、雖番訴陳、以和与之儀、止訴訟畢、所務條々、兩方共、且任度々御下知和与狀之旨、且守今度和与狀之

趣、可致沙汰也、条々内、雖一事、地頭令違犯者、任先

和与狀之旨、可被悔返宮内・今田・伊与倉三箇名下地、所詮、雖一事、背和与狀者、相互可被申行御下知違背之罪科也、仍和与狀如件、

文保元年六月十七日

地頭代沙弥道慶(花押)

雜掌法橋信宗(花押)

1205

「在御文庫二番箱他家文書中」

(繪書)本弘 (吉) 峯
「ほんふつ同あま并よしみねらかそのゝ状ともニ」

牧野事和与狀要段

右、牧野、依爲無要之山野、馬少々雖放置、以和与之儀、

向後永令停止畢矣、

文保元年六月十七日

1206

「伊作家文書在文庫」 「伊作家久長譜中正文在手鏡トアリ」

檢納 嶋津庄内薩摩方伊作庄同日置北郷、正和元二兩年

和与領家御年貢以下色々濟物代錢事、

合參佰貫文者、

右、御年貢以下色々濟物、就和与之儀、所出皆納返抄也、仍狀如件、

文保元年六月十九日 雜掌信宗(花押)

1207 『比志島氏文書』

依出舉并預米事、道助与比志嶋孫太郎忠範、番訴陳、雖及上裁、以和与之儀、止訴訟畢、但、訴陳出舉以下請文等者、博多代官大隅七郎忠幸帶持之間、於博多相互取替和与狀、可被申賜御下知候、如此於國乍令和与、一方指違背和与之儀、令子細申時者、可被申行別罪科候、仍和与之狀如件、

文保元年六月廿三日

『大隅大依助久國法名アリ』
沙弥道助(花押)

1208 『公』

但、他人ニこきやくの時ハ、ほんりやう主のさたゝるへぎ也、

(ゆか) □つりわたす、しやていせうはうの所ニ、さつまのくに満家のぬんの内、ひしゝま □ひらかくらいやたらう入道かいやしき一所の事、

右のやしきハ、忠範重代さうてんの所りやう内也、しかるを同きやうたいたりといへとも、ほうこうのちうをいたすあひた、ゆつりあたうる所也、此上ハ、すゑくニ

いたるまで、ほん主ときやうはいの心なく、一ミ同心のきを存て、ゐやうたいさういなくちきやうせらるへぎ也、但、かのやしきハ、ほりの内たる間、方々の御公事等、あひいろハさる所也、よてこうせうのためニ、ゆつり狀如件、

ふんほうくわんねん六月廿三日 源忠範(花押)

(北志島) ちやくし義範(花押)

1209

『比志島氏文書』

(編覽書) □孫大□重□文保元八五

薩摩國比志嶋孫太郎忠範重言上

下野前司入道義代津性問答難澁間、先御代於石垣五郎音輔奉行、雖被成數ケ度御書下、遂不叙用、于今無音上者、被經嚴蜜御沙汰、欲蒙御裁許城前田間事、副進

一通御書下案 數通略之、

件条、本訴陳狀等具也、而津性恐自科、問答難澁之間、(難カ) □被立奉行入使者、于今無音之上者、被經急速御沙汰、爲蒙御成敗、重言上如件、

文保元年七月 日

『新田宮觀樹院文書』

薩摩國御家人交名注文

谷 山 式部孫五郎入道 鹿兒島 矢上又五郎左衛門尉舍弟彦
同彦七 谷山五郎入道 領主荒田庄弁濟使取納使

滿家院 比志嶋孫太郎 西侯孫太郎 大丸大丸
川田右衛門太郎 山口入道 厚地座主取納使
中侯弥四郎入道跡

牛屎院 地頭御代官 牛屎二郎左衛門入道
羽月右衛門入道 牛糞五郎左衛門
同兵衛入道 篠原孫三郎入道
永竹二郎入道 同又太郎 同弥三郎入道跡
敦浦入道跡 首木入道弁濟使 郡山名主
下司図書入道 兵衛五郎入道跡

和泉庄 同杉左衛門二郎入道 孫五郎入道
井口入道 知色入道 鱧淵名主弁濟使

山門院 郡司敷島孫二郎 市來崎兵衛五郎入道
郡山名主

莫祢院 郡司彦太郎 飯嶋 小川小太郎入道跡
遠矢入道 同太郎三郎

右、太略注文如此、此外相漏人々者、可致注進之狀如斯、
文保元年七月晦日

「河上次郎左衛門家藏」

大藏氏申、薩摩國市來院河上名内田蘭事、訴狀副具如此、

爲有其沙汰、早可令參對也、仍執達如件、

文保元年八月廿日
『鎮西探題北条道江守顯時』
遠江守(花押)

河上平次郎殿

「正文在文庫伊作家文書」「伊作久長譜中正文在卷本トアリ」

〔端裏書〕
「きやうにてのわよの御もんしよら、又同御もんしよのもく六」

又いさく・へきのちとう御しよむてうく、わよの
御きよ狀のあん、又正わくわん二兩年のいさくのし
やうりやうけねんくの代三百くわん文のをくりふミ
のあん、

進上仕候御もんしよの事たし京都にて

一つ いさくのしやう并へきのほかうのちとう御しよむ
いけてうく、わよ狀の正文 文保元年 六月十七日

一つ あつか所ちくこ房かのしよむいけてうく、の事き
よ狀正文 同年同月 十九日

一つ 同あつか所ないく、の御返事正文 同年同月 同日

一つ 同いさく・へき、正わくわん二兩年のりやうけね
んくいけ、いろく、のせいもつらの代、せに三百

くわんもんかうけとり、同あつか所のさしやうの
狀也、正文 同年 同月同日

一つ 同あつか所かさねて進する狀正文 同年 七月廿日

一つ 同あつか所たうけいにたふ狀正文 同年 同月同日

一つ 同あつか所のさしやうの返狀正文 十貫の御心さし給由
同年六月九日

以上七つ

文保元年八月廿五日 とうけい(花押)

1213 (端裏書) 「はんのしたいをのちのためにかきをく也」

せんくより正わ五年八月までハ

この御はんをせさせ給候、もとの御なのりハ、たくなかと候しハ、ひさなかと御あらため候也、を、このとしすわの御まへにて、御

くしなまかせて、八月一日よりハ、ひさなかと御あらため候也、

正和五年の八月一日よりハ、この

御はんをあそハしかへさせ給候、この時御なのりを、ひさなかと御あらため候

ふんほうくわんねん十月一日よりハ

この御はんを御さため候てあそハし候、

のちの御ふしんのために、かきしるしておかると

ころ也、

文保元年十月一日

一元應貳年閏四月十四日よりハ、御いたわりによて、御

はんなし、

一正中貳年卯月十一日より、この御はんを

せさせおハしまし候、

1214 『臺明寺文書』

(端裏書) 「大明寺雜堂」 [文保元年]

関東御祈禱所大隅國臺明寺雜掌長慶重言上

欲早被經嚴蜜御沙汰、且被鎮當國守護御代官安東四郎

左衛門尉景綱代惟村以下在廳御家人等狼籍、且停止盛

範悪行、被札返損物、寺領止上村百姓等住宅、致追捕

狼籍事、

副進

一通 御教書案

右、於巨細者、具載本解狀畢、但、如守護御代官景綱請

文者、盛範依捧訴狀、去三月十九日、被尋下衆徒等候畢

云、此條國衙正稅物之濟否、更非守護方御沙汰、何可

捧訴狀哉、而尋下衆徒等之由、被申之条、無謂次第也、

就中、申成公方御教書、付進守護御方時、曾不及異儀、

乍被請取之、景綱令引汲敵方盛範、捧訴狀之由、載請文

之条、今案參差之沙汰、尤可足賢察哉、同狀云、綺若同

篇候者、盛範既爲訴人、令申子細候云、此條當山雜掌

守護使惟村狼籍事、捧訴狀於守護御代官之時、盛範爲訴

人之由、敢不支申之、乍請取彼狀、無其沙汰、送日數之

後、盛範爲訴人、令申子細之旨、載請文之条、眼前引汲

也、且盛範惟村等致狼籍之間、就于訴申、被成御教書之

處、以彼阿黨、爲扶代官惟村、不尋下在國、贊于盛範

等、捧非據請文之条、希代珍事也、彼狼藉事、根源起自正稅物之上、訴申在國守護御代官惟村於之間、所務狼籍共以不能守護方御沙汰哉、然早重被成下御教書、被召上盛範以下与力人等、被行所當罪科、至損物者、任員數、不日可糺返之旨、爲蒙御成敗、重言上如件、

文保元年九月 日 【裏ニアリ】(花押)

〔付札〕
〔此原書ハ、旧御番所御文書ニ番箱中ニ一卷アリ〕

1215

〔伊作家久長譜中〕

〔正文在手鏡〕

嶋津庄薩摩方伊作庄・日置北郷正和元貳兩季年貢事

右、正和元年止領家所務、雖被付地頭、就同貳季閑東御教書、可致弁之旨、成施行之刻、如所執進地頭下野三郎左衛門尉久長之今年六月十九日雜掌信宗請取者、檢納嶋津庄薩摩方伊作庄・日置北郷正和元貳兩季領家与御季貢色色濟物代錢事、合參佰貫文者、右御季貢以下色色濟物、就和与之儀、所出皆納返抄也云云、被尋問實否於在津雜掌阿淨之處、如同八月廿一日請文者、當給主方雜掌信宗、以和与之儀、於京都請取之由、去六月十九日、出皆濟返抄候欵、委細旨見彼狀云々者、皆濟返抄無異論、

然者、任請取狀、不可有相違焉者、依仰下知如件、

文保元季九月二日

遠江守平朝臣〔隨時〕(花押)

1216

〔比志嶋氏文書〕

薩摩國比志嶋太郎入道道願女子源氏与同□孫太郎忠範相論當嶋太丸田壹町貳段屋敷壹箇所事

右、相番訴陳之處、兩方令和与畢、如氏女代頼念□十

六日狀者、源氏女帶故比志嶋太郎入道道願〔氏女〕亡父、弘安八

年四月廿八日讓狀令知行之處、忠範爲惣領、應長貳季正

月日經上訴雖加、難破於彼狀、實證勿論之上、爲叔姪依

不可有確執、被出和与狀訖、如此相互令和平之後、及違

乱濫訴之儀者、可被申行別罪科云云、如忠範同日狀者、

子細同前者、此上不及異儀、互守彼狀、不可有相違者、

依仰下知如件、

文保元年九月二日

遠江守平朝臣〔隨時〕(花押)

1217

〔比志嶋氏文書〕

請取 滿家院内比志嶋名分子佐弥勒寺用途并米事

合 錢陸實肆拾伍文
米參斗捌升捌合七夕 代錢四百文

右、請取如件、

文保元年九月十四日

本性(花押)

「ウラカキ」(本基)
「皆濟勘定早(花押)」

1218

『比志嶋氏文書』

大隅大炊助三郎久國法師法名道助代忠幸与薩摩國比志嶋孫

太郎忠範相論出舉米并預米等事

右、就訴陳狀、擬有其沙汰之處、兩方出和与狀畢、爰如

去八月十六日忠幸狀者、件米等道助爲訴人雖訴申、以承

諾之儀、所令和与也、仍彼請文正文不殘一通返与忠範畢、

若存變改、及濫訴者、可被行別罪科云々、此上者、向後

相互可守彼狀也者、依仰下知如件、

文保元年九月十九日

遠江守平朝臣(隨時)(花押)

1219

『伊作久長譜中』

「正文在手鏡」

嶋津庄薩摩方伊作庄同日置郷雜掌信宗与地頭下野彦三

郎左衛門尉久長代忠國相論年貢以下所務條條事

右、就雜掌訴訟、有其沙汰之處、兩方令和与畢、仍帶今

季七月廿三日日本所狀并久長舉狀、可預裁許之由、所申也、

此上不及異儀、早守彼狀、相互可致沙汰矣者、依仰下知

如件、

文保元年九月廿四日

遠江守平朝臣(隨時)(花押)

1220

『權執印文書』

讓与 子息道海所仁

在薩摩國那答院內中津河村次第證文等并宮里郷田園四至

界本券等事

右、所領證文等、先年仁雖讓与道海、臨最後之間、重讓

与早、然者、守先度讓狀、無他妨可知行也、仍爲向後、

讓狀如件、

文保元年十月十一日

沙弥円佛(花押)

1221

『岸良氏文書』

肝付郡岸良弁濟使兼村代兼義申、被申付海賊不實由事、

訴狀如此、爲訴人乍爲當參難滋云々、子細何様事哉、不

日可被明申候由候也、仍執達如件、

文保元年十月十七日

教忍(花押)

時光(花押)

肝付西方弁濟使殿

1222

〔在文庫伊作家文書中〕「伊作家二代宗久譜中ニ正文在卷本トアリ」

ゆつりわたすちやくし左京進に、
(宗久)

一しなのゝ國大田しやうの内

神代かう

一さつまの國の内

いさくのしやう 日置しやうたしへきのしやうハ
うハ一このうち

一六条ほりかハのち三へぬし、
(戸主)ほりかハおもてミなミの

ハし也、

右、そりやうハ、くんこうのち也、しそむさまたけある

へからす、たといなんしおほしといふとも、おもはんこ

一人よりほかハ、ゆつるへからす、又もしなんしなくハ、

二なん次郎三郎にゆつるへし、又ミくうしにをいてハ、

せんれいニまかせてつとむへし、もし又ふりよのほかに、

左京かところめされハ、二郎三郎申給るへし、のちのわ

つらいあらしかために、しひちにかきをくところくたん

のことし、

文保元年十月廿二日

久長(花押)

〔右裏書〕「任此狀、可令領掌之由、依仰下知如件、

元亨四年八月四日

相模守(花押)
(當時)

修理權大夫(花押)
(貞顯)

伊作久長
二代左京進宗久
三代親忠下野守

津野二郎三郎領信濃太田庄

1223

〔伊作宗久譜中〕

〔正文在手鑑〕

嶋津庄内薩摩方伊作庄同日置北郷中分事、以雜掌左衛門

尉憲俊、致沙汰候早、於御下知者、本雜掌承信在津之

間、可令申沙汰候、可令得其御意給候哉、恐々謹言、
(文保元年)

行壹(花押)

謹上 伊作庄地頭殿
(宗久)

1224

〔入來臣武光氏文書〕

門四郎太郎當住屋敷事、爲吉枝名牧崎内之處、爲權執印

妙慶被押領之由、領家御雜掌阿淨雖被及訴訟、於彼園者、

爲 八幡新田宮御領八講田今者四至内、爲往古御神領之

由、被申之上、八講園四至、當時垣根之外、畠地荒野等者、本非八講園内之上者、不可有違乱之由、自社家依被出狀、阿淨永被止訴訟之上者、經兼同不可有違乱之儀、仍爲後日狀如件、

文保元年十一月十七日
(武光)
伴經兼

1225 「伊作家文書在文庫」 「伊作久長譜中ニ正文在卷本トアリ」

請取 功錢事

合柒十貫文者

右、下野三郎左衛門殿功錢、所請取之狀如件、

文保元年十一月廿八日
唯寂(花押)

1226 『臺明寺文書』
(編纂書)
「宗春檢校寄進狀案」

奉寄進 衆集院阿弥陀如來

水田伍反 須之口田

副進

本證文五通

右、意趣者、故宗春檢校貞光爲往生極樂、可奉寄進之由、令遺言之間、任其旨、所令奉寄也、然者、云縁者、云親

類、更不可申違乱、仍爲後日寄進之狀如件、
文保元年十二月三日
久重在判

阿弥陀仏在判

僧增慶在判

1227 『藤野氏文書』 「古写ニハ全文アリ」

將軍家政所下

可令早嶋津下野前司入道(忠亮)義、領知日向國高知尾庄・

肥前國松浦庄内早湊村・同國福万名地頭職江田忍阿副

田三郎次郎種信跡事、

右、爲菊池庄領家職替、所被宛行也者、早守先例、可致

沙汰之狀、所仰如件、以下、

文保元年十二月廿一日
案主菅野

令左衛門少尉藤原 知家事

別當武藏守平朝臣(花押)
(貞顯)

左馬權頭兼相模守平朝臣(花押)
(高時)

1228 「忠宗公御譜中」

文保元年丁巳十二月廿一日、拜領日向國高知尾庄・肥前國松浦庄内早湊村・同國福万名、

伊地知考按云、此御文書者、忠宗公此諸所の地頭職御拜

領爲被遊政所御下文之眞本と相見得、格別成御文書なり、

公御傳記ニ者、寫有之と肩書ニテ、奥ニ平朝臣トアル、

下ニモ在判と計見得候、左候へハ、平田純正此御正文ヲ

未見ニ而、寫ニテ載置爲申ニハ無御座哉、如此御正統様

地頭職なと屹与御拜領被遊候御文書共ハ、官庫ニ御傳藏

可相成筈之物共ニハ無御座哉、外御文書之内ニ此口ノ方

有之事茂難計、御糺被成度、可成ハ正文ニ而此口も寫補

申度奉存候、

1229 「伊作家二代宗久譜中」

「正文在志布志衆阿多飛彈忠縣」

嶋津下野彦(久長)三郎左衛門尉殿御子息(宗久)德壽御前与琳慶、自幼

少依申師弟契約、奉讓薩摩國阿多郡五大院内田地拾町貳

段、同池邊園壹ヶ所坪付 在別紙者、

右、彼田園等、依不淺德壽御前御志、相副河邊弥平太入

道後家自筆讓狀并次第證文等、限永代奉讓畢、守證文等

之旨、可有御知行候、但社役者、任先例、可有其沙汰候、

更不可有後日違乱煩變改之儀候、仍爲後代龜鏡、讓狀如

件、

文保貳年二月廿日 僧琳慶(花押)

1230 「在御文庫二番箱他家文書中」

上神殿次郎太郎祐繼法師法名与(伊集院カ)郡司法名繼法師

迎念、相論薩摩國伊集院カ内山下上神殿土橋以下田畠屋

敷荒野等事

右、就訴陳狀、擬有其沙汰之處、兩方出和与狀訖、爰

如嘉元四年三月十二日迎念狀者、和与、薩摩國伊集院内

買地所所田園荒野等事、迎念与次郎太郎入道殿、雖番訴

陳、所詮、以穩便之儀、所令和与也、於田園并荒野等員

數者、別注文明白也、仍任彼注文之旨、相互至子孫々、

無違乱可被領知、將又上神殿事、雖申子細、如此和与上

者、向後止之畢云、(云脱カ)如同日注文者、注進田園等事、一所

山下田町四段、一所五段下神殿 土橋内、一所六段内平田 田平田、一所參

段下神殿 内追田、一所貳段得軍内原田 字六段田、一所參段冊同名内繩脇、一段作二段不廿、

一所邊保木壹段廿中、一所園荒野等事、一所山下三箇、

在荒、一所薩摩迫園在荒、一所常念居園、四至、限東堀、

限西常住中垣根、限南道、限北本垣根云云、爰迎祐捧彼

狀等、可被裁許之由依令申、被尋尋下迎念之處、如正和

二年十月廿八日迎念請文者、迎祐申薩摩國伊集院内買得

地和与有無事、去七月十二日御教書案并催促狀、謹下給畢、迎念所帶當院郡司職以下所領等者、先年之比讓与子息弥五郎宗繼之間、宗繼代官長賢適合在津之上者、可申子細云云、如同十二月日長賢狀者、迎祐号祖父迎佛祖母法阿及母堂紀氏等狀、構出謀書、致非訴之間、迎念備進関東御下文以下證跡、相番三問答訴陳畢、而迎祐稱和与之由、雖望申御下知、如所進注文案者、國郡之名字不載之上、常念居園事、不番訴陳之處、注載之間、疑殆不少、迎祐謀書罪科顯然之上者、和与有無事、非信用之限、早續正本訴陳具書等、可預裁許云云、於和与之篇者、迎念不及異論、寄事於子息宗繼、擬令改變之条、非(無脱之)奸曲(一カ)、是、次不載國郡名字於注文之由、長賢雖申之、書載和与狀之上者、不能繆難、是二、次常念園事、不番訴陳之處、載和与注文之条、有疑殆之由、同令申之處、止相論及和与之時、相加彼園之条、迎念狀文炳焉之上者、不及其難之旨、迎祐所申不乖理致歟、是三、所詮、就迎祐申狀、迎念捧請文之上者、稱私和与、輒難改變之間、宗繼申狀非沙汰之限、然則、於彼田畠荒野等者、守迎念和与狀、迎祐可令領知也者、依仰下知如件、

文保二年三月十二日

1231 『和泉忠氏譜中』

文保二年戊午初 道義公生七男二女、長諱貞久乃 道鑑公、次郎忠氏、次忠光、次時久、次資久、次資忠、次久泰、皆事 幕府、各有勲功、至是三月十五日、道義公割邑封國、授書各一通、傳 道鑑公以下忠氏等六男及其長女、稟諸 幕府守邦親王、二十三日、親王乃命相模守北條高時・武藏守北條貞顯、亦與 公等七人書各一通、使以領掌如 道義公狀、時忠氏拜領薩摩國出水郡、因稱 島津或和泉氏焉、

1232 「写在藤野氏」

(外題) 一任此狀、可令領掌之由、依仰下知如件、
文保二年三月廿三日

(高野) 相模守
(花押)
(貞徳) 武藏 (花押)

ゆつりわたす

ちやくし三郎左衛門尉貞久

さつまの國すこしき

十二たうのちとうしき

さつまのこほりのちとうしき

山門のゐん

いちくのゐん

かこしまのこほり 同なかよし

さぬきの國くしなしのほう上村

しなの、國大田の庄内南郷

下つさの國さむまの内ふかわの村

ひうかの國たかちをの庄

ふせんの國そへたの庄副田三郎二郎種信

右所々、貞久にゆつりあたふる所也、女子(分子なく)

其一期の後ハ、そうりやう貞久可知行之狀(如件)

文保二年三月十五日

沙弥道義(忠志)〔花押〕

〔写在藤野氏〕

〔藤野氏四十三通ノ内道鑑公御妹ノ伝ニ載タリ〕

〔外題〕「任此狀、可令領掌之由、依仰下知如件、

文保二年三月廿三日

相模守(高時)〔花押〕

武藏守(貞顯)〔花押〕

ゆつりわたす

女子大むすめ御せん分

さぬきの國くしなしのほうのうちくもんみやう 同たところみやう

右、大むすめ御せんにゆつりあたうる所也、但子なくハ、

一この後ハ、そうりやう貞久ちきやうすへし、仍狀如件、

文保二年三月十五日

沙弥道義(忠志)〔花押〕

〔以上旧御番所御文書ニ番箱中御宝鑑三帖之内ニアリ〕

1234

〔外題〕「任此狀、可令領掌之由、依仰下知如件、

文保二年三月廿三日

相模守(高時)〔花押〕

武藏守(貞顯)〔花押〕

ゆつりわたす

四郎時久分

さつまの國內みやさとのかうちとうしき

ひせんの國ふくまんみやう江田忍阿跡

下つさの國相馬郡(押手)をしての内黒さきさへもんきう、五郎兵衛かきう、

右所々、時久にゆつりあたうる所也、仍狀如件、

文保二年三月十五日

沙弥道義(忠志)〔花押〕

〔上書有之〕「四郎殿へのゆつり状案 嘉曆四二十九ぬしの方へつかへさるゝ也」

〔此書、新納家先祖時久辭中ニ在リ〕

〔右ノ正文、旧御番所御文書ニ番箱中御讓狀置文ニ卷ノ中ニアリ〕

1235

『樺山氏文書』

(外題)

「任此狀、可令領掌之由、依仰下知如件、

武藏守

文保二年三月廿三日

平朝臣泰時

相模守

平朝臣時房

「藤野本、守下、曰在判、而無泰時等名、後人妄填名、可以知也、殊

不知泰時等、變死於其前、可謂陋妄甚矣、後皆倣此」

(本文ハ一二三三号文書ト同ニツキ省略ス)

件、

文保二年三月廿三日

武藏守平朝臣泰時

右、ゆつりあたふる所也、

三男三郎左衛門尉忠光分

文保二年三 十五日

沙弥道義

(本文書疑文書ナルベシ)

1236 薩摩國出水之郡

右、爲勲功之賞、所宛行也者、守先例、可致沙汰之狀如

件、

文保二年三月廿三日

武藏守平朝臣泰時

相模守平朝臣時房

右、ゆつりあたふる所也、

二男下野守忠氏分

文保二年三月十五日

沙弥道義

(本文書疑文書ナルベシ)

1238 日向國新納院

右、爲勲功之賞、所宛行也者、守先例、可致沙汰之狀如

件、

文保二年三月廿三日

武藏守平朝臣泰時

相模守平朝臣時房

右、ゆつりあたふる所也、

四男四郎左衛門尉時久分

文保二年三月十五日

沙弥道義

(本文書疑文書ナルベシ)

1237 大隅國佐多

右、爲勲功之賞、所宛行也者、守先例、可致沙汰之狀如

1239 日向國山西 樺山 石寺 嶋津

しもかはち 河南之内北郷之内三ヶ一

合而三百町

右、爲勲功之賞所、宛行也者、守先例、可致沙汰之狀如件、

文保二年三月廿三日

相模守平朝臣泰時在判

武藏守平朝臣時房在判

右、ゆつりあたふる所也、

五男安藝守資久分

文保二年三月十五日

沙弥道義

(本文書疑文書ナルベシ)

1240 日向國河南之内北郷之内三ヶ一、山西ニ中郷

右、爲勲功之賞、所宛行也者、守先例、可致沙汰之狀如件、

文保二年三月廿三日

相模守平朝臣泰時

武藏守平朝臣時房

右、ゆつりあたふる所也、

六男尾張守資忠分

文保二年三月廿三日

沙弥道義

(本文書疑文書ナルベシ)

「右嶋津下野入道殿六人之御息へゆつり状是也、関東奉公之比、北条

之天下取沙汰時ト云々、

如此之如、高氏將軍御代ヲ取合候刻、忠節之子細有而、本領之御請之状有、建武三年正月廿四日と有也、
初之程者、任給旨可致其沙汰之状如件ト有、後ニハ字茂尊氏と有」

1241

當國在國司所職所々注文

合

一白杵郡河南方竿失米六石六斗二舛五合 納定

并雜事米二石 行藤皮一懸

一新納院竿失米十三石 鑿折五斗 山毛分竿失米貳石
馬食物五斗 雜事米一斗 白米定

此内宮類請新貳貫伍百文

一穆佐院竿失米十三石 雜事米三石

一眞幸院國司十二石 寺社勘新
四ヶ年一度

此外引田五丁六反

一飫肥東西三十貫文内

山西地頭名六貫文 粮米六斗

同別分十一貫文 粮米一石一斗

山東分地頭名壹貫二百文

同別分名六貫五百文 粮米六斗五舛

一加宇原名四貫二百文 粮米五舛

此外引田一丁六反

文保貳年六月五日

田部榮直(花押)

1242 (本文書ハ一二四一号文書ト同文ニツキ省略ス)

1243 『臺明寺文書』

大隅國臺明寺雜掌數建申打擲蹂躪以下狼籍事、重訴狀如

此、子細見狀、早速可令明申也、仍執達如件、

文保二年十月五日

遠江守(臨時)(花押)

目代殿

「右原書へ、旧御番所御文書二番箱中ニ一卷アリ」

1244 『市來崎氏文書ノ内』

〔編纂書〕
「遠江守御下知案文」

山門弥宗太法師法名如善代子息種友申、新田宮燈油免田薩

摩國宮里郷正富名内田地壹町五反事、

右、如申狀者、帶代々證文等、當知行無相違之處、下野

前可入道道義扶持人宮原太郎入道蓮心、致非分押妨之上

者、可被停止彼違乱云々、仍可催進蓮心之由、兩度雖被

仰道義、無音之間、仰下總權守重雄尋問違背實否之處、

如重雄執進文保二年十一月二日道義請文者、新田宮燈油

免田事、任御教書之旨、相觸候之處、論人宮原太郎入道

蓮心代子息正光請文如此云々、

文保二年十一月二日(二カ)

1245 「池端氏文書」

ゆつりわたすやうしねしめのいや二郎きよたねのとこ

ろニ、大すみのくニさたのむらのうち、てんちやしきな

らひニ御くたしふみいけのてうとのせうもんらの事、

みき、くたんのてんちやしきらハ、ちかまさかちうた

いさうてんのしりやう也、しかるニきよたね一もんのう

ゑ、ゑうせうよりとりやうするこゝろさしあさからさる

あひた、ゑいたいをかきて、きよたねニゆつりわたすと

ころ也、よてこ日のためニ、ゆつりしやうくたんのこと

し、

文ほう二年十二月十日 建部親政(花押)

1246

ゑうようあるによて、ねしめのいや二郎殿ニ、大すミ

のくニねしめのみなミまたさたのむらのうち、親政さ
うてんのてんちやしき、ありしんかいはた(マ)そのノ内、

1249

『高岡土河上次郎左衛門文書』

1248

『池端文書』

(本文書ハ一二四五号文書ト同文ニツキ省略ス)

1247

『池端文書』

(本文書ハ一二四六号文書ト同文ニツキ省略ス)

しやうくんけの御くたしふミ六はら御しきやう、そふ
(親)ちかつなのわけしやうらをあひそゑて、しろのせニ三
(御)十五くわんもんニ、ゑいたいをかきりて、うりわたし
 たてまつる事、
 みぎ、くたんのてんちやしきらへ、ちかまさかちうたい
 さうてんのところ也、しかるあひた、御くたしふミいけ
 のせうもんらをあひそゑて、しろのせニ三十五くわんも
 んニ、ゑいたいをかきりて、うりわたしたてまつるとこ
 ろ也、たゞし、たそのゝゐんしゆみやうしへ、ちかつな
 のわけしやうニミゑたり、よてこ日のためニ、しやうく
 たんのことし、

文ほう二年十二月十日

建部親政(花押)

1250

『正文在官庫』「安養院文書也」

禁制

鹿兒嶋東福寺事、山臥三川房時差四至堺、条条令禁
 断處、近年有違犯輩云々、

- 一 草木採用事、
- 一 放入牛馬事、
- 一 殺生禁断事、

右、御内被官之輩内、於恩足者可被分召所領三分一、無
 足之仁者、百日止出仕、可令停止鹿兒嶋經廻、至下部者
 捺火印、可流遣硫黄嶋、於郡内甲乙人等者、可爲三貫文
 過怠也者、守此旨、堅可令禁制之狀如件、

文保三年二月五日

〔家光〕
〔忠宗〕
(花押)

〔此文書、忠宗公御譜中ニ在リ〕

原田太郎入道淨法与得重五郎助道相論殺害刃傷事、去年
 十二月廿日御教書如此、任被仰下之旨、見聞之次第、任
 實正、載起請之詞、可被注申候、仍執達如件、

文保三年正月廿三日

河上平次郎殿

〔家光〕
〔鎮西奉行人也云々、
鉄谷下総權守重雄〕
前下總權守(花押)

1251 『比志嶋氏文書』

□意信代行兼法師大隅國下木田村内田地以下事、重訴狀如此、訴陳(參差カ)間、可參決旨、可相觸別府彦三郎光實之由、被仰了、不日可被執進請文、爲無音者、載記請之詞、可被注申、仍執達如件、

文保三年三月十日(二カ)日 前遠江守(花押)(顯特)

比志嶋孫太郎殿(忠範)

1252 『道鑑公』

(本文書ハ一二三三号文書ト同文ニツキ省略シ)

1253 『藤野氏藏』

(本文書ハ一二三三号文書ト同文ニツキ省略シ)

1254 『載肝付兼藤傳』

文保三年己未四月改元元應三月二十六日、前肥後守顯親承北條高時旨、使左兵衛尉兼村復岸良村辨濟使職、先是兼村解職、既又有請、至是復之、兼村見上、

1255 『岸良内藏丞藏』

(花押)

宛行嶋津庄大隅方肝付郡内岸良村弁濟使職事

左兵衛尉兼村

右、所職者、有子細雖被召上、依歎申、如元所宛給也、有限御年貢以下臨時恒例之課役等、無懈怠可被致其沙汰者、早庄家宜令承知、敢勿違失、仍所宛給之狀如件、

文保參年三月廿六日 前肥後守顯親(花押)

1256 『岸良氏文書』

納嶋津庄大隅方肝付郡内岸良村文保參年領家御方御年貢

用途事

合貳拾貫文内拾貫文者御年貢、拾貫文者任料用途今年計、

右、所納如件、

文保參年三月廿六日(A.P.) 眞理(花押)

1257 嶋津御庄内薩摩方伊作庄雜掌法橋承信并下司高純謹言上

欲早被与奪當庄本訴奉行入安富三郎貞泰方、被經御沙汰、被召上同國阿多郡北方一分地頭隱岐三郎(行雄)不知、被究御沙汰淵底、任傍例蒙御成敗、當庄入來別符名内大

牟礼并大野名内塩道上毛夜木瀬任和田名内橋牟礼狼野

「島津國史」

津波牟礼以下所々、打越往古境、去正安三年以來令押領条、更不可遁所當罪科子細事、

副進

一通 立券狀案文治四年十月 日

右、當庄者、爲 本家近衛殿、領家一乘院御領進止之地也、而隱岐三郎任雅意、打越往古之境、令押領之上者、早被与奪安富三郎方、被召上彼隱岐三郎、被經傍例御沙汰、爲蒙御成敗、仍粗恐々言上如上件、

文保參年六月 日

「此文書、伊作久長譜中写在卷本トアリ」

「伊作久長譜中」

「正文在手鏡」

伊作庄同日置北郷所務条々事、以信宗法橋、令和与候了、於領家御舉狀者、恣可下遣字符雜掌承信法橋之許候、定令申沙汰候欵、可得御意候、恐々謹言、

(文保元年)

六月十九日

行壹(花押)

謹上 伊作日置地頭殿御報

(宗久)

『臺明寺文書』

大隅國臺明寺雜掌澄海重言上

當國目代々官甲斐阿闍梨盛範追捕當寺領止上村百姓等

住宅、致打擲以下狼籍間、就訴申、雖被成下御教書、願

無理至于兩年不及陳狀、剩不受取本解狀由、掠申間、

重雖書上彼狀、尚以無音上者、被經急速御沙汰、欲被

行其身於重科子細事、

道鑑公上 名貞久、道義公之子也、稱三郎左衛門尉、任上總介、法名道鑑、道阿弥陀佛

元應元年己未、是年四月改元元德、自三月以前猶是文保三年、先是、山伏三川房、

居鹿兒島東福寺、時 公命爲設界至禁約、其後漸有犯

者、春二月五日、復立禁牌曰、東福寺界至之内、不得伐

草木、不得放牛馬、不得殺生物、敢有犯者、論如法、

拋道義公伯譜、去年道義公既傳守護職於道鑑公、然禁牌月日下、有道義公花押、故知禁牌爲道義公所立也、和語、謂解魔法師爲山伏、或作山伏、

按道鑑公伯譜、元亨三年公下令禁鹿兒島東福寺界内殺生伐木事、云如應長元年文保三年約束、拋此則東福寺初設禁牌、蓋在應長元年矣、文保三年即是年也、東福寺即今安養、

院地、在府城東北十八町許、夏四月二十八日改元、拋大日本史、

二年庚申、事缺不書、

元亨元年辛酉、是年二月改元元亨、正月猶是元應三年、春二月二十三日改元、大拋

日本史、

二年壬戌、事缺不書、

右、盛範作爲當參、恐自科、不終御沙汰之篇、難澁至極之上者、被經急速御沙汰、於件追捕物者、任員數被糺返、至打擲以下之咎者、任定法、爲被行重科、重言上如件、

元應元年潤七月 日

〔端裏書〕
〔臺明寺雜掌申狀 元應元後廿七日〕

〔裏花押〕

1261 「伊作家文書写在文庫」 「伊作家久長譜中写在卷本トアリ」

薩摩方伊作庄雜掌承信・高純等申當庄入來別符境事、重

訴狀如此、〔行總〕隱岐三郎背兩度催促無音云々、所詮、尋問實

否、載起請之詞、可被注申也、仍執達如件、

元應元年九月廿日

〔臨時〕
前遠江守御判

在國司入道殿〔道總〕

1262 『正文小根占池端氏藏』

ゆつりわたしたてまつるおい弥二郎殿ところに、大す

ミのくにねしめのいんミなまたの内、重清分ニなり〔弥 稜〕
〔南 侯〕

て候はん内のそのい所の事、

右、くたんのところハ、はうふよりしけの重代さうてん〔亡 父 頼 重〕

のしりやう也、しかるをミせうふんのよし、ひるをいた

され了、御はいふんにあたりて候はん時、いやしきのために、そのいしよ、たゞしひろさ三反、ゆつりたてまつり候也、おなしをいながら、れん／＼の心さしあさからさるによて、ゆつりたてまつり候也、永代ちきやう候へし、たゞしその／＼さい所ハ、御はいふんニあたりて候はん時、さたむへく候、よてのちのために、ゆつり狀如件、

元應元年十月十五日

建部重清〔花押〕

1263 『羽島氏文書』

天滿宮薩摩國分寺

奉引進同國薩摩郡成枝名内羽嶋浦田島〔山カ〕野河海等〔但若松名〕

〔内水田等事 除之〕

右、當浦者、忠兼重代相傳之私領也、而奉引進〔之〕之故者、

以去正和二年二月十日・同十三日三昧僧神人命婦等爲鋪

設催促、令來臨于忠兼許之刻、不慮之外、狼籍出來由、

雜掌就被訴申、〔北条実政鎮西探題〕上總介殿御代被尋〔子細〕、有注進関東之

處、被返下彼注進訴陳狀於鎮西畢、而今遠江守殿御代被〔北条隆時同探題〕

究御沙汰之淵底間、恐冥慮、以私領壹所、奉引進于寺家

之上者、至于忠兼子孫々、不可成違乱煩、若又不懼冥

慮、於申異儀者、爲不孝之仁而可被申行重科、仍爲向後
龜鏡、引文如件、

元應元年十一月一日

〔若松彦太郎〕
平忠兼〔花押〕

『羽島氏文書』

うりわたしたてまつる【國分】ありさつまの

くにさつまごをり、はしまのうらのてんはくさんやた

しわかまつみやうの内【のそくカ】
すいてんらハこれを【忠兼】

みぎ、たううらハ、たうかねかせんそさうてんのしりやう

なり、しかるをようえうあるによて、しろのせに三百く

わんもんに、こくふの二郎殿に、えいたいをかきりて、

うりわたし候をハぬ、しうそんくまで、たのさまたけ

なくちきやうせられ候へし、くわんとお御けちいけほん

せうもんにをいてハ、れんけんたるによて、はなちあた

へす、あんもんをうつして、うらをふして、そへわたし

ところなり、くけふけ御かうしハ、ぶんけんにしたかて、

ちきにぎんしせられ候へく候、かやうにうりわたし候と

ころに、たうかぬかしそくらのなかに、いらんを申とも
から候ハ、なかくふけう【不孝】のことして、しよ【自念】のそりやう
をも申給らせ給へく候、よてこにちのせうもんのため

に、うりけんのしやうくたんのことし、

元應元年十一月一日

忠兼〔花押〕

〔裏書〕
「此狀爲謀書之由、忠兼申之間、所封裏也、

元亨三年十月三日

沙弥春寂在判

左衛門尉久義在判

「伊作家文書在文庫」「伊作久長譜中正文在手鑑トアリ」

八月廿日御教書、同九月廿日御教書訴狀、十一月二日同

日到來、謹拜見仕候畢、抑薩摩方伊作庄雜掌承信・高純

申境事、任被仰下旨、以一瀬弥次郎入道見佛、急速可令

明申候、以此旨、可有御披露候、恐惶謹言、

元應元年十一月三日

藤原行雄讀文
〔花押〕

「伊作家文書在文庫」「伊作久長譜中正文在卷本トアリ」

〔編裏書〕
「在國司入道々雄請文」

薩摩方伊作庄雜掌承信・高純等申當庄入來別符境事、任

被仰下之旨、相觸隱岐三郎候之處、請文如此候、仍令進
上候、以此旨、可有御披露候、恐惶謹言、

元應元年十一月五日

沙弥道雄讀文
〔名之實ニ有〕(花押)

1267 『入來院氏文書』

〔編裏書〕
「りやうけの御うけとり」

納 薩摩國入來院塔原領家方元應元年夏物御年貢色、

事

合

一 綿伍拾四兩壹分之内當進肆拾陸兩貳分者、未進柒兩參分歟

一 太糸拾肆兩之内當進陸兩云々、但精合糸未進、未進捌兩

一 花紙伍帖之内當進貳帖、未進參帖

一 苧伍拾兩 全未進

一 麥代少袖絹壹 全未進

一 白布壹切 全未進

右、且所納之狀如件、

元應元年十一月十四日

尼眞理(花押)

1268 『入來院氏文書』

澁谷余一(爲題)入道善阿申、相模國寺尾村内田島在家以下之

事、御教書案并相副訴狀令進候、任被仰下旨、御請文給

可令進覽候、恐々謹言、

元應元年十二月廿五日

源貞綱(花押)

謹上 澁谷孫三郎殿
(准題)

1269 「正文在西俣氏」

加冠

忠字

〔可也〕
下令早以西俣又七良、附与實名忠辰之狀如件、

元應二年正月八日

忠宗(花押)

1270 「伊作家文書写在文庫」 「伊作久長譜中ニアリ写在卷本トアリ」

号嶋津庄内薩摩方伊作庄、雜掌承信并下司高純等掠訴申

候同國阿多北方地頭隱岐三郎行雄、當庄入來別符名内大

牟礼并大野名内塩道上毛夜木瀬任和田名内橋牟礼狼野津

波牟礼以下所々、打越往古堺、去正安三年以來押領由

事、此条無跡形不實候、於當方者、隱岐常陸前司入道行

日行雄外、去建長年中拜領以降、至于行雄、代々七十余年

之間、相傳知行無相違地也、仍先々預所下司等、敢以不

申子細處、承信・高純等、今度始而及掠訴之条、希代奸

謀、何如之哉、且於當庄者、近衛殿御領也、其子細承信

等書載于本解狀之畢、至阿多郡者、大宰府領也、号彼雜

1272

『公』

『古本末吉士檢見崎氏家藏』

元應二年庚申、初父兼石時、爲本郡地頭名越道鑿等、被奪職田、訴於幕府、以幕府命与道鑑成、道鑿歸父侵地百七十町、然而實歸堀内七八町、佗未悉歸、以歷子時家、至孫高家、及我、爭訟者有年矣、今也尊阿与地頭代盛貞、建武四年六月、弥養亦次郎清種言上、兼父在多孫四郎親政所領事云、名越尾張左近大夫・肥後次郎入道淨心令押領云、此云盛貞、疑即此人也、又按肥後氏古系図有淨心房、而無盛貞、疑一人異号、信基子信式末男六郎左近子宮内兵衛次子也、一本宮内兵衛弟云、未知孰是、又訴探題、盛貞陳之曰、正應之盟既歸百七十町、定之封疆、無敢侵之、於是探題隨時復告鎌倉、乃是歲三月十一日、幕府守邦使北條高時・北條貞顯命隨時、更遣廉直人、明察情實、以歸尊阿侵地百七十町、

1271

『載于肝付氏六代兼藤譜中』

元應二年二月八日 阿多北方地頭代沙弥見佛（通）講文在裏判

掌右衛門尉成守、當時一番御手、爲攝津式部房實胤奉行、年貢事所令番訴陳也、凡如此領家各別之地界相論事、如傍例者、可爲聖断候上者、承信等奸訴、不可及執御沙汰候、以此旨、可有御披露候、見佛恐惶謹言、

1273

「羽島氏文書」

宛行

大隅國肝付郡弁濟使尊阿与地頭尾張前司高家代盛貞相論所職名田以下事、就高家祖父尾張入道道鑿正應六年四月三日和与狀、同五月廿四日裁許後、任下知狀可沙汰付之旨、度々被成御教書畢、爰尊阿則永仁年中御使打渡處、堀内七八町之外者、地頭代皆以押領之由申之、盛貞又任正應和与狀、於百七十町者、立堺避与間、尊阿于今所知行也、無押領儀之旨陳之者、重差遣使者、於彼百七十町田地者、尊阿領知欵、將又地頭代押領否、遂檢見除兩方緣者敵人、尋問近隣地頭御家人、可執進起請文、若地頭代押領之条、無所遁者、於百七十町田地者、地頭無異論之上者、先可沙汰付尊阿、次地頭代先度分与彼田地之時、悉割取余田、以繩分出云々、云彼百七十町内余田有無、云惣郡田、被入部之次、遂實檢可注申之旨、可被下知者、依仰執達如件、

元應二年三月十一日

「高時」
相模守御判

「貞顯」
前武藏守御判

「北條隨時」
遠江前司殿

薩摩國薩摩郡成枝名内羽島浦水田壹町内、字濱田陸段
坪字臂判官代田肆段并塩屋壹字字次郎事、男跡

右、田地塩屋等、依有于義、雜掌忠□給分所宛行也、但地頭方先例有限所當公事等者、隨分限可令勤仕、此外於寺家方所當諸公事山野草木用水等、所令免除也、然者守彼狀、可令知行之狀如件、

元應貳年卯月十一日 友貞(花押)

(付箋) 元應二年十二月廿一日 觀樹院文書寫ノスヘシ

(底本) コニ付箋アルモ、該文書ヲノセズ、恐ラク、那答院旧記所収新田八幡宮觀樹院文書、元應二年五月日新田宮雜掌申狀案、及ビ元應二年十月廿二日鎮西御教書ヲサスモノ如シ

1274 「長谷楊氏文書」

讓与 字乙房丸所

薩摩國鹿兒嶋郡長谷場村内田園等讓狀事

在水田壹町内長谷楊森田參段
内崩下貳段但自坂下路東限

大田壹町内 伍段

在はせはの園内自山口溝
限西方

右、於彼水田園者、自時澄手讓得之、阿妙重代相傳所領也、しかるあいた字乙房丸仁、限永代讓与ところなり、

何子孫たりといふとも、またくいらんをいたすへからず、但ちとうまい已下公事等ニをいてハ、分けんニしたかて、惣領新五郎相共その弁をいたすへし、仍爲後日、自筆をもて讓狀如件、

元應貳年八月三日 沙弥阿妙(花押)

1275 『臺明寺文書』

(編纂書) 「大隅守拳狀案」

當國臺明寺衆徒等、去正和六年正月廿八日夜、對國衙公人等、致種々狼籍候事、就和与之儀、止訴訟候早、其子細以雜掌令言上候、以此旨、可有御披露候、恐惶謹言、

元應二年九月十六日 大隅守重氏 在裏判

進上 御奉行所

1276 『國分氏文書』

薩摩國分寺雜掌申押取狼籍以下事、雖訴狀如此、下野前(北条時直)可入道背催促否、可尋注進之由、被仰下候、早可申左右、仍執達如件、

元應二年十月十一日 前遠江守御判(臨時)

祢寝郡司殿

1277

〔町田元祖忠經譜中〕

元應二年庚申五月、薩摩國八幡新田宮雜掌言上狀曰、爲同國加世田別府内村原名地頭大隅式部丞女子代左衛門四郎実名不知、非當背國中平均先例、令違背惣領加世田別府地頭御代官支配、去正和貳年同六年兩年分不弁濟御神拜用途無謂事、略、下

副進

一通 加世田別府地頭御代官狀

當別府内御神拜用途五分一村原分被相延可貢進由事、卯月廿三日付、正和

一通

同別府地頭御代官狀同社神拜用途當別府致沙汰畢、於村原分者、可致沙汰由事、正和六年二月十一日

右、上狀中、大隅式部丞謂即忠經也、阿多郡加世田別府村原名今日村原村、在地頭館北、距十五町余、當時忠經領村原名地頭耳、

由此則至于成久之世、住加世田者、蓋依祖宗食邑之遺地也、且忠經女子即宗長妹忠継姉、而平賀三郎左衛門之室也、又村原村時宗稱名院、謂尚古葬地云々、

1278

『岸良氏文書』

大隅國始良庄弁濟使道知房永信子息永俊等申、与力肝付東方弁濟使野崎宮内左衛門尉兼賢、殺害永信以下輩由事、今月廿日守護御方御教書并重訴狀如此、早任被仰下之旨、

可被申分明散狀候、仍執達如件、

元應二年十月廿二日

散位清保(花押)

岸良村弁濟使殿

1279

『長谷場氏文書』

(本文書ハ一二七四号文書ト同文ニツキ省略ス)

1280

『入來永利氏文書』

(編纂書) 〔本田民部入道請文〕

永利如性掠申、薩摩國薩摩郡内山田村与田崎名堺事、訴狀具書等謹下賜候早、此条當名下地以下事、名主善法与曉道、番干數問答訴陳、已被逢御引付候上者、是非治定之後、可被經御沙汰哉候覽、以此旨、可有御披露候、恐惶謹言、

元應二年九月二日

地頭代曉道請文
(裏花押)

1281

『臺明寺文書』

(本文書ハ一二七五号文書ト同文ニツキ省略ス)

1282

『比志島氏文書』

牛屎新平二付休足重可被預置之由、沙汰候也、仍執達如件、

〔元應二〕

十月卅日

本性(花押)

比志嶋(息絶)孫太郎殿

1283

〔伊作家久長譜中〕

〔正文在手鏡〕

嶋津大隅守久長代頼秀与薩摩國伊作庄下司孫四郎高純相論正和元二領家年貢事

右、如久長代訴狀者、正和元二領家年貢、庄家未進雖多之、應関東御教書、去文保元年六月十九日、於京都爲地頭沙汰、令勘渡之、取皆納請取、預御下知早、將又、高純代道入請文分明之上者、所經入年貢可糺返云云、如高純代重通陳狀者、於正和元二兩年領家年貢者、地頭糺返之、至所務者、可去渡之由、就被成進関東御教書於領家方、云所務、云御年貢、被致其沙汰者也、頼秀所進請文者、正和二年領家米未進云云、請文与訴狀令參差畢、可致弁者、對於領家方可致沙汰云云、爰如頼秀所進正和三年二月十一日下司代道入請文者、伊作庄領家御米、岩富未

進、斗子九合延定、拾石捌斗米、領家方仁彼御米被打渡候之時、結解仁可逢云云者、高純請取二問狀之後無音之間、三箇度雖書下、終以不出帶陳狀之条、回遁違背之咎、加之、久長對領家方皆納之間、先日被裁許之處、何彼年貢可弁領家之旨、可遁申哉、然則、任注文旨、可糺返也焉者、依仰下知如件、

元應二年十一月六日

前遠江守平朝臣(隨時)(花押)

1284

『水引執印文書』

石塚四郎入道後家妙忍代忠治申、諸大女童事、重訴狀如此、新田宮執印背度々奉書、不召進論人妙慶云々、早尋問實否、載起請之詞、可被注申候、仍執達如件、

元應二年十二月十日

沙弥(息絶)(花押)

山門郡司殿

1285

『臺明寺文書』『袴田五段ノ事康永四年九月十五日ノ文書ニ見ユル』
(端裏書)
〔袴田寄進狀等案 真陽法眼〕

もりへのうちのめつしんてうりわたす

大すみのくにそのこほりしけゑたのミやう 正八

まんくうのしやうにん大はんにやのきやうてんあなざ(まなざ)
はかま田伍段の事

右、件のすいてんへ、うちのめかさうてんのそりやうな
り、しかるにようくあるニよて、せうもんらをあひそ
へ、やうねんをかきて、しろのよね十五石五斗に、かゝ
とのにうりわたしたてまつるところなり、もとよりきや
うてんたるあひた、まんさうくうしりんしくわやくこれ
なし、よてほんけんのしやうめいはくなり、さらに一ふ
んのくうしあるへからず、もし又この田につけて、こう
しめらんいてきたらん時へ、うちのめかたくふんを、か
のたニあたらんほど、さりたてまつるへし、又そのきな
くへ、もとのよね十五石五斗を、ことくかへしたて
まつるへく候、こくたう米たるうへへ、さらにふほうあ
るへからず、そのわきまへをいたすへく候、よてこ日の
ために、せうもんくたんのことし、

【当元字元年】
元應三年正月廿八日　もりへのうちの女在判

目六云、

- 一通 平山領家了清与隈本大夫房幸明相博状
- 一通 幸明活券状　一通 止上宗十郎檢校貞光讓状案
- 一通 守部氏女活券状　一通 寄進状　以上五通

以上五通相副本證文了、

1286

「在御文庫二番箱他家文書中」

(祐繼)

薩摩國御家人上神殿次郎太郎入道迎祐重言上

所續進御奉行所御使請文正文焼失上者、任傍例、欲被

經御沙汰、當國伊集院郡司弥五郎宗繼与迎祐相論、背

和与御下知、令押領當院下神殿内山下田地町四段□

五段余荒野并常念蘭等事、

副進

一通 御教書案元應元年後七月三日

右、巨細前々御沙汰事舊畢、爰宗繼令違背和与御下知、

押領件田蘭荒野等之間、依被仰下使節在國司入道并顯娃

次郎左衛門尉、進兩御使請文畢、仍被經御沙汰最中、去

年十二月廿三日夜博多炎上之時、兩使請文正文於御奉行

所焼失之由、奉行人問答之上者、任傍例、被經御沙汰、被

打渡下地於迎祐、至于宗繼者、爲被處御下知違背罪科、

重言上如件、

元應三年三月　日

(奥書)

□神殿次郎太郎入道重申元應三、八

『岸良氏文書』

大隅國始良庄弁濟使道智房永信子息永俊・永鏐・姫鶴女等重言上

爲同國肝付郡岸良弁濟使阿性与力同郡東方弁濟使兼賢等、令殺害永信同子息通證・通信以下從人等間、就訴申、先御代雖被成下度之召文、依令違背、仰使節祢寢郡司清保有御尋實否處、捧自由請文、不及參陳間、任傍例、以違背篇、可蒙御成敗旨、令言上處、仰本御使、當御代重可有御尋由、被仰出上者、被經急速御沙汰、欲被断罪其身等事、

副進

三通 御教書案 二通路之

一通 使節清保請文

一通 阿性請文

右、殺害事度之言上畢、而阿性(不脱也)願重科、捧自由請文、不及參陳之上者、早任傍例、被經御沙汰、爲被断罪其身等、重言上如件、

元亨元年七月 日

『國分寺文書』

薩摩國天滿宮國分寺所司神官等謹解申進申

請殊早被經御 奏聞、且任先例、(且任與之)行御德政法、

被造畢當宮并國分寺堂塔等、弥耀 神威、奉祈天

長地久御願子細狀、

副進

一通 宣旨 建治元年十二月三日 可造管當寺社由事

三通 院宣 建治付建治一四院宣

二通 國宣

一通 大府宣 建治二年正月日 當寺社造營事

三通 關東御下知 文治二年十二月七日 承久三年八月廿八日 文應元年十月五日

一通 關東御教書 弘安七年五月三日 國分寺住古子細當時次第并管領仁及免田等分明可注

一通 鎮西御施行 永仁七年二月十四日 任關東御事書旨九州大社以下修造恒例佛神事等可與行由事

一通 守護人廻文 同年四月一日

一通 關東御教書 正安二年七月十三日 異國降伏可致御祈禱由事

一通 守護人催促狀 同三年正月十日

一通 鎮西御施行 正安三年八月廿三日 任關東御事書旨可致誓星出

一通 守護人催促狀 同年八月廿五日

一通 關東御教書 嘉元三年十二月十日 可致異賊防禦御祈禱由事

一通 鎮西御施行 同二年正月四日

一通 守護代催促狀 同二年正月廿三日

一通 関東御教書 延慶三年二月廿九日
可致事

一通 守護代催促狀 同三年五月四日

一卷 年中佛神事注文

一卷 損色 去建保二年仰官使被注之、

一通 繪圖

此外雖多、數通上宣等、且備進之、

一天滿宮并國分寺往古子細當時次第事

右、謹考舊規、當 宮者、天滿大自在天神垂跡之地也、

天曆皇朝被下官符、号分補安樂寺、應和年中姑鷹苗基

爲興樂□、即爲鎮護國家之仁祠、專祈天長地久御願、自

尔以降、耀神威、漸送數百載之光陰、加尊禮早配廿七

社之扮、揃堂舍塔婆之基、二千余宇連軒、日記月祭之

勤、數百余度有增無減、然則代々賢王寄田園、任々國史

添寺領、爲神領之地、不隨他所役、不勤大小勅院事者

也、國分寺又奉建立養老元年、遙及六百余歲、忝奉安置

大聖觀世音菩薩、爲奉祈御願之清淨法地、尼寺又奉安置

藥師如來并十二神將、奉祈御願事以同前、然間、文治承

久大乱者前代未聞之重事也、然而不被准他社、被免除

兵糧之催促、被停止武士狼麩之条、関東代々御下知柄

焉也、如此每有兵革、必先被尊崇 聖廟者、我朝之故

實、武家嘉猷也、如文治年中関東御下知者、當寺者天

滿天神御在所也、不可准他社、仍可爲宗佛神事之由、

自鎌倉殿所被仰下也、然者停止武士違乱、全安堵所司

神人等、加寺家修理、可勤修佛事也云々、又承久年中

如所被成下之関東御教書者、右件天滿宮并寺領等、不

有武士狼籍、又遼遠之境、如此之時、寄事於左右、結

構新儀之濫妨、對捍有限之所當、濫行非法之者自出來

欵、若然者、可注進 (交名カ)可處罪科也、沙汰人右近將監友

久以下所司神人等、更不可有事煩之狀如件云々、因茲、

於博多津石築地并警固役者、不嫌神社佛寺權門勢家之

領、雖被催促之、至當寺社御領等者、併被免除畢、是則

天下無雙之御廟、國中第一之大社故也、就中、異國御

祈禱事、致精誠可勤行之由、就被下度 (脱カ)院宣於安樂寺、

云當社、云安樂寺、雖異名異依爲一躰分身之靈神、當

社祠官等抽無二丹誠、依奉祈請、去文永年中蒙古凶賊

等難令襲來鎮西、依不堪神戰、或捨乘船沈海底、希令

存命、雖有凶賊之、終不遂合戰之本意、空返歸畢、

其後又可致懇勸御祈禱之由、依被成下関東御教書於當

社、令致丁寧御祈禱之處、去弘安四年凶徒等令來着之

刻、令對治事、非神慮之征伐者、更難及人力之□、諸人仰天之處、同年七月一日神風荒吹、賊船漂沒、賊徒一時滅亡、是則 天滿大自在天神御征伐也、此等子細見聞之輩、莫不貴御廟之威德、爰當宮并國分寺(堂力)當塔等者、自往昔爲國衙之所役、加修理小破、及大破之時者、令造替之条、先例炳焉也、而或依國司怠慢、或依任之目代改替、不加修理、經年序之間、寺社佛殿以下迴廊等、悉令破損畢、然間、佛像忽爲雨露令朽損之間、如形以土木、云當宮正殿并拜殿迴廊等、云國分寺・尼寺・泰平寺本堂、勵寺家(廟力)瀝分、造葺葺之假殿、而奉尊崇、當寺社每年恒例不退月並御神事數百余度、式日不怠令勤行之、併奉祈無疆之寶祚、然而祠官等、情案(余力)舊規之例、往古次第與當時作法相違、歎而有除、仍勒此等子細、去建保年中令言上之時、仰官便(使力)、雖被注損色、急速不及御沙汰之、被闕之間、以建治元年重經奏聞之時、可造營天滿宮國分寺之□、忝被下院宣之間領掌早、仍被寄符料所六ヶ所那答・東郷・入来・山門・南郷・加世田於寺家之間、祠官等開喜悅之眉、營其節之處、彼料所地頭名主等、募武威、有限不升正稅之間、僅所尋出之以所當等、且令採要御殿以下材木之刻、無程被妨國司料所之

間、不終造營、却希所令採要之材木等、徒令朽損乎、且爲公損、且爲神愁、見彼念是、愁歎無極、難押悲淚之處、幸今如承及者、可被興行諸國之分寺等之由、被行御德政旨風聞、是則 天滿大自在天神并大聖觀世音菩薩御威光、斯朝家安穩御祈禱令成就故也、望請恩裁、早被經 御奏聞、且依先例、且任興行法、當宮并國分寺以下堂塔等、任損色經文旨、被造畢、日祀月祭之勤、式日無懈怠、弥振神威、吾朝鎮護之□不怠、異國自歸(奮力)皇化、三韓貢獻跡無絕、仍在狀、以解、(勸說之)

元亨元年七月 日

執行貫首大藏

都維那大法師澄範

寺主大法師嚴種

大檢校大法師

少別當大法師

權讀師大法師

上座大法師妙嚴

大別當大法師慶地

讀師大法師有範

權講師法眼和尚位融嚴

1290

『戴肝付譜中兼藤傳』

元亨元年辛酉、始良庄弁濟使永俊等報告探題、以殺害等事、於是九月八日、散位清保執達狀使岸良弁濟使兼村、察情實以報知之、

1289

『道鑑公御譜中』

条々さたあるへき所々

- 一 系ちせんの國すこしきかはりの事
- 一 むさしのくにはちかたの越訴事
- 一 しもうさの國くろさきの越訴事
- 一 さつまのくにたに山の越訴事
- 一 ひこの國ほんとのしまの事
- 右、三郎さへもんさたとして申給へき狀如件、

元亨元年九月六日

(忠孝)
道義(花押)

〔此御書ノ正文ハ、旧御番所御文書ニ番箱中御讓狀置文一卷中ニアリ〕

留守散位惟宗朝臣友貞

〔朱カキ〕

〔実名者御裏書之〕

〔私注、此社解京進清書者、新田宮平等御房筆也、被打正印畢〕

1291

『岸良内藏丞藏』

大隅國始良庄弁濟使永俊等申、殺害以下守護御方御教書并重訴狀具書如此、早任被仰下之旨、可被申是非左右候、仍執達如件、

元亨元年九月八日

散位清保(花押)

岸良村弁濟使殿

1292

『牛屎文書之内』

可令早牛屎院司入道元覺跡領知薩摩國牛屎院内知行分事

右、守先例、如元可致沙汰之狀、依仰下知如件、

元亨元年十月十一日

相模守平朝臣判(高時)

前武藏守平朝臣判(貞徳)

1293の1

忠宗

久長

號伊作 大隅守 法名道意

女子

『前可カ』
せんす御ぜん

『正文在官庫』

ゆつりわたす 【伊作】 いさくのむすめのふん

南郷のてつくりの米拾石

さぬきのくしなしの中村四郎か給分

右、ゆつりわたす所也、たゞし一このうちハ、惣領にかへすへき狀如件、

元亨元年十月廿七日

【道義】 たるき(花押)

『右ノ正文ハ、旧御番所御文書ニ番箱中御讓狀置文一卷ノ中ニアリ』

尚【上保】かミのほうさた申ゑす候ハ、この御けうしよをハあつかり人【坊門少將】はうもん【下】のせうしやう殿ニこいまいらせて、ふくすまろもち候へく候、をなしくしも【保】ほう【保】のちやうもく六あつけおきまいらせ候、まつこれ【保】をハ申てとられ候へく候、このやう御あんち候て、ふちして給るへく候、なに事もくもとり【保】のふる事候ハ、御けさんニ入候て申うけ給候へく候、又ゆつり狀をも、をなしくあつけまいらせ候、せいしんの時ハふくすニ給へく候、

なに事をも、御けさんニ入まいらせ候て、くハしく申たく候へとも、あまりにくそうくのをりふしにて候ほ

とニ、そのきなく候御事、心よりほかにおほへさせ給へ

く候、さてくこんとせんちやうニまかりむかい候ほと

ニ、ゑちう【越中】のくにふすまへのほうのちとうしきを、おんしやうニ給りて候、このうちしものほうのちとうしきを、ふくす【福壽丸】まろにゆつり狀をしてとらせ候、みはくむ

人なく候、せいしんのほとせんし、このひら山のおは御

せんニ申させ給候て、せんしこあいとも【代官】に、このところ

をれんちよくの御たいくはんニ仰せつけ給候て、御はか

らいとして、ふちして給候へく、しやうくんの御けうし

よをあいそへて、とらすへく候へとも、きやう【京都】とにはうもん【京】のせうしやうとの御かたニあつけをき候了、ふす

まへのかミのほうをハ、ちやくし太郎三郎ニゆつり候ハ

んするか、いまたかミのほうハ、ふちぎやう【不知行】の事にて

候、御さたさいちうにて候あひた、もしこんとふしきの

事も候ハ、この狀をもて、太郎三郎さた申へく候あひ

た、太郎三郎もつへく候、あなかしく、

六月廿九日 【山田式部少輔忠継】

【上書】 たつづく(花押)

【上書】 せんしこの御かたへ 申させ給へ

『右年間知レサレトモ、せんす御前のコト故、此ニ載て後の考ニ備ふ』

1295

賴久

孫三郎 左衛門尉

號川上 上野守 依他腹無家督、

宗久

生松丸 三郎左衛門尉 大夫判官

元亨二年壬戌誕生、母大友因幡守親時女也、

曆應三年早世、十九、

師久

氏久

光久

四郎左衛門尉

氏忠

但馬守

女子三人

1296

『臺明寺文書』

〔編纂者〕

〔淨円墓所前燈油田寄進狀兼徒反狀案 元亨二年正月十五日〕

任殿親存生之御素意、石燈爐燈油析所協田一段、同園一

所御寄進由事、即令披露衆中候之處、面々被隨喜申候、

仰給候日々更無闕怠、可取繼候、御寄附重疊之条、殊目

宛行

〔花押〕

1299

『岸良内藏丞藏』

元亨二年壬戌四月二十五日、執權高時袖判、以伴兼義爲岸良弁濟使職、乃兼村之子也、

1298

『載伴譜』

安東二郎兵衛入道殿
澁谷平六殿

1297

『入來院氏臣岡本氏文書』

出、幽儀佛道増進之、御願定成就候欵之由、沙汰候也、
恐々謹言、
〔元亨二〕
正月十五日
臺明寺政所權律師惠弁

〔國林野保一分地頭江見新〕信茂申出家暇事、年齡
〔有余之上、所勞危急云々、〕〔云年九〕
齒、云病躄、加檢見、
載起〔詞〕、可被注申也、仍執達如件、
〔請力〕

元亨二年三月九日

左近將監〔花押〕
〔範貞〕
〔維貞〕
陸奥守〔花押〕

嶋津庄大隅方肝付郡内岸良村弁濟使職事

〔岸良氏也〕
伴兼義

右以人、被補任彼職畢、有限御年貢以下恒例臨時之課役等、無懈怠可令勤仕者、早庄家宜令承知、敢勿違失、仍所宛行如件、

元亨貳年四月廿五日

榮寂(花押)

1300

『比志島氏文書』

納 嶋津庄大隅方肝付郡内岸良村御年貢事

合拾貫文者

右、元亨貳年之領家御年貢所納如件、

元亨貳年四月廿五日

榮寂(花押)

1301

『比志島氏文書』

〔編纂者〕
「契約狀案平田行秀方へ遺案也」

郡山安堵事者、税所殿御書有之間、就御教書被進御請文候之条、自是不及悅申候、自分上原藺安堵事、同被成御教書於御方候、云當知行之段、云幼少養子之篇、無子細候之上、税所殿御放狀御見知之候之上者、無相違被進御請文候之条、生前悅入候、向後者、相互成親子兄弟之思、

悅歎共以我身之大事と存、更不可有腹黒害心候、縦住所者雖隔遠近境、互用事無隔心可申承候、

此条々偽申候者、日本六十余州大小神祇冥道御罰可罷蒙候、仍契約狀如件、

元亨貳年五月三日

〔上原〕
右衛門尉基員在判

1302

『比志島氏文書』

比志嶋孫太郎忠範代義範申薩摩國比志嶋以下之事、重申狀如此、爲訴人不終沙汰之篇下國云々、所詮、來月十五日以前可被明申也、仍執達如件、

元亨二年六月十二日

〔英時〕
修理亮(花押)

「四代下野守忠宗公御二男」
下野三郎兵衛尉殿

1303

「和泉實忠譜中」

元亨二年壬戌六月、先是實忠補滿家院惣地頭職、舉津性爲代官、而津性與比志嶋孫太郎忠範、有刈麥論、忠範乃遣子彦太郎義範、訴之於探題北條修理亮英時等、而義範不待裁許還于國、於是十二日、英時致實忠教書、使察事情以白其實、必期來月十五日前、原文收焉、

1304

『池端文書』

建部清元辞

讓与祓寝弥次郎殿母御前仁大隅國祓寝院南俣内田地号

島、参段事

右、件田地者、清元重代相傳地也、而祓寝弥次郎殿母御

前者、爲清元姪之上、忠節成之間、於彼田地者、亡父清

綱讓狀之案文仁裏お封天、相副之、限永代之、所奉讓渡于

弥次郎殿母御前清元姪之實也、但於御佃并府御領物等御公

事者、清綱讓得清元田地八段内加藤蒲田島田定御佃米貳斗、府

御領物肆疋可弁之由、被定置之上者、隨于田地之分限、

可被弁之、此外於万雜公事者、一向被留于惣領早、將又警

固番役并社國兩方臨時課役出來之時者、隨于田地分限、

可被勤仕之、若又清元子孫共中仁、聊毛彼田地仁於申違

乱之輩者、清元所領お不可領知候也、仍爲後證之讓狀如

件、

元亨貳年七月七日

建部清元(花押)

1305

『入來院氏臣岡元氏文書』

讓与 所(領)事

尼教阿所

在阿波國大野新庄立江内(八分カ)壹地頭職事四至界者、孔子第三分配分狀に

みえ たり、

右所者、後家分として知行すへし、但一期之後者、重知

・重文・乙童女三人等分ニ、限永代、無相違可令領知者

也、若新田出來之時者、重知三分二、重文三分一を分領

すへし、仍佛神事、関東御公事等、先例にまかせて、其

沙汰をいたすへき狀、爲向後狀如件、

元亨二年八月十八日

静重(花押)

一乙童女一期之程へ、岡の菅三郎入道在家田島等を領知

すへき者也、同月 日

(静重) (花押)

1306

「貞久公御譜中」

『入來永利氏文書』

「上書」 下野三郎左衛門尉請文

永利如性掠申、薩摩國山田村山口新開田島在家等事、去

月廿二日御教書案并今月十七日御催促狀、同十九日到來、

謹拜見候畢、

抑此事爲令明申候、代官晁道令參上候、可有御披露候、

恐惶謹言、

元亨二年八月廿二日

左衛門尉貞久(請文) (裏花押)

『比志島氏文書』

薩摩國比志嶋孫太郎忠範代義範重【言上カ】 同國滿家院

惣地頭下野三郎兵【和泉元祖忠氏コト】代津性、乍訴人、願無理、【實對実忠カ】

問答難澁間、【背カ】御教書御書下、無音上者、任定法、

以違背【之篇カ】經御沙汰、比志嶋以下五ヶ所并条々非

副進

副進

一通 御教書自余略之、

右、巨細言上先畢、而實忠代津性、令違背度々御教書御

書下、難澁至極之上者、爲被經急【速御沙汰カ】、言上如件、

元亨二年九月 日

「和泉實忠譜中」

九月、津性拜命、論猶未伏、比志嶋忠範乃使義範復訴前

事、

「在御文庫二番箱他家文書中」

納

造 宇佐宮薩摩國伊集院内上神殿分所課貳百丁別事

合伍斗柴舛捌合

右、所納如件、

元亨貳年十月廿日

專當迎念(花押)

拒押使代頼【押】(花押)

關東御使

顯國(花押)

宗覺(花押)

『野田篠原氏藏』

尿

和与

牛屎郡司元尚与光武孫九郎國顯相論薩摩國牛屎院篠原

目丸兩里内田藪荒野野島地等事

一下地事

右、雖及相論、以和与之儀、止訴訟早、仍光武國顯知

行分兩方、苳彼田頭、なはをひき、是をわらしめ早、

爰篠原里之内西部坪之内柒段・榎田坪之内壹町【但孫六國長跡】

知行 目丸里之内小長田坪之内參町貳段・余田參段【内此】

壹町少次郎道 大長田坪之内肆町壹段壹杖中・余田壹町

伍段參杖中・桂木坪之内【所肆段】已上本田玖町陸段壹

杖中・余田壹町捌段參杖中、藪々ハ國顯當時居藪四至

1311

〔蒲生士山内某文書〕

讓与 薩摩郡内平礼石寺水田畠地等事

但至四至者、本證文等在之、

四方皆坪称（但平分此道國知行分加定）、文弥藤太夫園壹ヶ所、東限、南

限少溝、西限坪称、北限道（但秀朝知行分）、此外ひや水のはしの

内井たれ橋の橋口より東へ、少溝乃もとまてすくに通

して、そのさかいとすへし、西東北小溝をさかいとし

て荒野参町、なはをひき、これをわりて國顯方へ打渡

早、此外者、水田畠地山野及國顯知行水田坪このくち

中嶋乃園名野等にいたるまで、國顯不可有違乱競望比（者也カ）、

せ矣、

一狩役事

右、郡方狩之時者、國顯知行分より狩人一人をいたす

へし、但三ヶ度仁一度者、又太郎秀朝可出之也矣、

以前兩條、守和与狀、雖末代相互不有相違者也、仍爲

後代和与狀如件、

元亨貳年十月廿六日

大秦元尚

〔本文書ハ底本ニ欠ク、鹿兒島県立図書館本ニヨリ補フ〕

1312

〔道鑑公御譜中〕

右、件於寺領者、覺西重代相傳之所領也、而相副次第相傳之證文等、嫡子新左衛門尉親成仁、限永年讓与畢、全不可有他人之妨狀如件、

元亨貳年十一月四日

沙弥覺西(花押)

嶋津大隅左京進宗久申薩摩國伊作庄日置庄地頭職安堵御

下文事、申狀（副具書）如此、云當知行實否、云支申仁有無、

載起請之詞、可被注申候也、仍執達如件、

元亨二年十一月廿五日

修理亮(花押)

下野三郎左衛門尉殿

1313

〔山田氏文書〕

『奥ニ有之』此朱書此本ノマ、上書ニ有之
「これハほんしやうはうのしひつをもてかきうつしてたふ、この狀ハ
もろ三らうもつへし」

「山田・上別符をちしきふの太郎殿たうけいニゆつらせ給狀のあん御ゆつりの案寫進候、上野平九郎入道の、いくらも御教書なされて候しへ、さつまへ進候了、只今み候へとも、ゑらひいたさす候、これそみいたして進候、てきたいのふんハ、うけふみにみえて候、恐く謹言、

十二月十一日 本性(花押)

【到 コレほど、かりニ、ほろくかき有候、則テ字状】
【到元亨二十二年十一月、ほんしやうはうしひつつの状也】

【案文】
「山田氏文書」

嶋津大隅式部孫五郎入道道慶謹言上

薩摩國谷山郡内山田・上別符兩村地頭所務以下事

副進 【裏ニ有之】
(花押)

一通 関東御下知 要段 弘安十年十月三日

一通 鎮西御下知 要段 正安二年七月二日

一通 年記請所狀案 同四年十月廿日
自明年三月可為請所由事

右、地頭職者、當郡司五郎入道覺信非分押領之間、道慶
于時就訴申子細、云関東、云鎮西、令拜領度々御下知之
宗久、多年知行之後、去正安四年為請所、限拾捌ヶ年、所
去給覺信也、仍年記過之間、自去年擬致所務之處、覺信
構事於縱横、及違乱之条無道也、所詮、年記違期之上者、
早任傍例、被停止覺信濫妨、為糺給押領物等、恐々言上
如件、

元亨二年十一月 日 (花押)

【朱ニテホソク書有之、大隅此位、
被下時ケ機書入下り候ト見得候】
【下り候字シノ卷ニハコノ判モナシ】
【文中前出ノモノト同シ】

「大隅式部孫五郎訴狀案」

1315 「山田氏文書」

大隅式部孫五郎入道と慶申、薩摩國谷山郡山田・上別符
兩村所務事、訴狀副具如此、爲有其沙汰、早可參對、仍
執達如件、

元亨二年十一月廿五日 修理亮(花押)

谷山五郎入道殿 【裏ニ有之】

1316 「正文在文庫伊作家文書」

(本文書ハ一三二号文書ト同文ニツキ省略)

1317 「池端文書」

ゆつりわたす 【孫二郎 清種】
ちやくしいや二郎きよたねかところ【次 手 繼】に、はたけた三た
んの事【次 手 繼】つきのしやうにあり、そゑわたすしたいてつきの
しやうら、
みきのでんちハ、【澤 阿】せんあかちうたいさうてんのしりやう
なり、しかるに、【老 少 不 定】らうせうふちやうたるあいた、ちやく
しいや二郎きよたねに、【次 第 証 文 本】したいせうもんをあいそゑて、
ゑいをかきりて、ゆつりわたすところしつなり、こうせ
うのために、ゆつりしやうくんたんことし、

けんかう二ねん十二月十六日

〔尼^釋阿^阿あませんあ(花押)〕

1318 『國分氏文書』

〔奉行人大保六郎入道契道 二番御引付也〕

薩摩國御家人國分二郎友貞申、押寄國分寺領、致追捕放火狼籍等由事、訴狀^{副具}、如此、爲糺明、早可令參決、仍執達如件、

元亨二年十二月廿日

〔友任〕

國分彦次郎殿

〔美詩〕
修理亮御判

1319 『國分寺文書』

〔口切ル、カ本ノマ、仁治二年九月十日
同御教書 同三年十月十九日〕

一通 關東御教書案弘長二年七月十日

一通 守護大隅入道々佛奉書弘長二年

一通 同人書下 正月卅日

□通 同子息式部丞催促狀 二月十四日

□通 異賊警固番役覆勘狀

一通 亡父道本狀 應長元年閏六月廿四日
友任義絶事

□通 鎮西御教書案 元應二年十月十一日
守護人敵對所見

一通 當寺領相傳系圖

右、所領者、友貞先祖代々相傳、重代御家人勤仕之地也、仍友貞帶亡父道本手繼以下證文等、當知行無相違之處、友任不願亡父道本義絶狀、相語當國在國司入道々雄同一族親類等、引率數多人勢、押寄當寺領、燒拂住民等住屋、致追捕狼籍、剩違乱當寺領本所御年貢等之間、名主等寄事於左右、令抑留之条、言語道断之次第也、然者早仰御使、被停止友任狼籍□□六波羅御教書并御家人□□狀等、爲預御裁許、恐々言上如件、

元亨二年十二月 日

1320 『山田氏譜中』

〔写在山田七郎右衛門久通〕

谷山五郎入道覺信代俊忠重言上

薩摩國谷山郡内山田・上別符惣地頭式部孫五郎入道々慶令違背度々御下知、不糺返質人并桑竿失及錢貨以下色々損物等上者、任先傍例、欲宛給別納御下知子細事、右、如陳狀者、檢断以下質人等事、所犯難遁之條、云生口白狀等、云證跡、顯然之處、先御沙汰雖令參差、道慶存後訴、任被仰下之旨、現在百姓等仁令糺返之處、或稱請

取質人等之咎、追取身代等、或不可請取彼損物之由、令勢命被書起請文於百姓之條、覺信造意之企無比類者也云云、此條先御沙汰令參差之由、令存知者、可申越訴之處、無其儀乍送多年、今更御沙汰參差之由令申之條、上裁忽緒之咎難遁者哉、且於令糺返彼質人以下損物等者、以何故不可請取之由、覺信加勢命、可書起請文於百姓等哉、爰御下知違背咎難遁問、稱百姓等狀構出之狀、正文披見之時、可申子細也、將又不糺返損物等之由、道慶自稱之上者、御下知違背之條承伏畢、同狀云、先御沙汰之時、如此等子細被究淵底、任度之御下知違背之實、爲向後傍輩、可被經微肅御沙汰之處、依無其儀、覺信插私曲、令張行之條、爭可遁其咎哉云、此條覺信令違背何御下知哉、可立申所見、道慶令違背數箇度御下知、不糺返質人等之間、所訴申也、積習于自身所行、覺信背御下知之由申付、不實之條、無謂之次第也、同狀云、桑竿失由事、不覺悟之所見何事哉云云、此條桑竿失事、可糺返之由被成兩方之、正安二年御下知明鏡之處、道慶背自身帶持御下知明文、不覺悟之由、申異儀上者、御下知違背之條、語下令露顯畢、爭可遁罪科哉、同狀云、山田・上別符地頭所務可令請取之旨、頗覺信懇望之間、就和談令承諾之處、同道慶

在國之隙、致奸訴之條、言語道斷也云云、此條當村請所事、道慶強望申之間、令請之處、覺信懇望之由、令申之條、存外也、道慶違背度之御下知、不返與質人等之間、自請所以前連之所謂申之也、依請所儀、此訴訟可令默止坎、所詮、被召出道慶所帶契約狀之時、可止訴訟之由載之否、可爲顯然者也、次召給本解可進陳狀云云、此條多年被經御沙汰、被成御下知之處、今更可被召出本解之由令申之條、比與也、爭可有御許容哉、然則且任御下知違背承伏之實、且依先傍例、爲宛給別納御下知、重言上如件、

元亨二年十二月 日

〔統目表判一〕
〔花押〕

(表紙)

忠宗公 自元亨三年正月
貞久公 至同年十二月

前編 舊記雜錄 卷十三

1321 「國史」

三年癸亥秋七月十日、公爲河内丹下郡西島地頭職、【元亨】
鑑公旧譜、曆應四年九月十一日下
知狀、按西島事、詳見下曆應四年、

正中元年甲子、是年十二月改元正中、自
十一月以前猶是元亨四年、冬飛報至自關東、

命 公募衆參津、於是小山田彦五郎景範・別府彦三郎光
實別府氏、加・延時又三郎忠種延時氏、莫詳其所自出、世
治木別族、領薩摩郡延時名、因以為氏、河
田智門房慶惠、或称官里氏、蓋、
官里郡可支族、河上又次郎家□市來氏・斑目

六郎政泰・政泰子孫七政行、政泰父曰次郎泰基、泰基祢答院重松
弟、領祢答院柏原村之地、出為斑目
惟基嗣、惟基橘三藏人惟如博多、
家臣遠矢十郎兵衛・財部人延時九
廣次子、惟廣在右見東鑑、比志島軍人・垂水
郎兵衛・有馬長右衛門・高岡人河上次郎左衛門、出水人斑目藤左衛門家
藏文書、參津者、謂至博多、按河田慶惠・延時忠種元亨四年十月二十一

1322

『在比志島氏』

日上奉行所狀、別府光實元亨四年十月十九日上奉行所狀、皆言今次騒動、
關東報至、故詣幕下、皆謂至博多也、又按大日本史、正中元年九月、後
醍醐天皇謀誅北条高時、徵武士会謀洩、高時殺应徵武士土 小山田景
岐頼兼・多治見國長於京師、狀言今次騒動者、正謂此也、
範者、比志島時範之孫也、【和采】
比志島軍人系圖、時範生忠範、忠
範生三子、其次子即景範也、時範見
第三卷弘、秋八月四日、幕府命相模守修理權太夫、使島津左
京進宗久領信濃神代郷、薩摩伊作莊・日置莊、如久長文
保元年十月二十二日讓狀、宗久、久長之子也、【和采】
上卷文保二年
有相模守・武藏守、即北条高時・貞頼也、
武藏守、後改修理權太夫、則此云修理權太夫、即上卷之武藏守也、島津
久長見第三卷、冬十二月九日改元、權太夫、
弘安四年、本史大日

薩摩國比志嶋孫太郎忠範代表義範重言上

當名惣地頭下野三郎兵衛尉實忠違背數ヶ度御教書、

不及參陳間、雖被仰使節澁谷新平次、依令引汲論人

坎、不申是非散狀上者、仰他人被經嚴蜜御沙汰、欲

蒙成敗、當名内苅麥狼籍事、【和采】

副進

一通 御教書案自余略之、

右、巨細度々言上畢、愛實忠願無理、違背度々御教書、不

及是非散狀之間、雖被仰使節澁谷新平次、尚以無首條、

引汲論人故坎、適實忠當參之上者、仰別使節、被經嚴蜜

御沙汰、爲蒙御成敗、重言如上件、

元亨三年□月 日

1323 「和泉實忠譜中」

三年癸亥、教書屢至實忠、雖皆拜讀、於其所論有事叵辨、遷延曠日、探題乃命澁谷新平次赴使節、令回以促、是歲閏月 比志島忠範上表、復訴前事如左、

1324 『臺明寺文書』

先日所奉寄進候三郎丸忌日料田卒都婆田三段、今者祖父智松奉寄料田不足之間、重奉寄進之候、爲三郎丸者、直垂田一丁內南方五段者、爲千与石丸者、徳治年中寄進仕候早、所殘候北丸五段奉寄仕候、卯月十六日者、蒙衆徒之御哀憐、御廻向候者、尤所望候乎、恐惶謹言、

正月十日

散位紀時秀判

進上 臺明寺衆徒御中

追申候、

先度所進上仕候卒都婆寄進狀者、可返給候、重恐々、

「進上臺明寺衆徒御中到来元亨三正十一散位紀時秀」

1325 『國分氏文書』

「正廿八日、阿江御掃之時、國分寺殿皇ス」

國分次郎友貞申、薩摩國分寺領追捕放火狼藉事、重訴狀如此、遣召文訖、來月十五日以前可被參決、仍執達如件、

元亨三年正月 日

(英時) 修理亮御判

國分彦次郎殿

1326 『國分氏文書』

薩摩國御家人國分次郎友貞重言上

舍兄彦次郎友任違背召文不參對者、急速欲被處罪科

追捕放火以下事、

副進

一通 御教書案 元亨二年十二月廿日

右、子細載本解狀、具言上畢、仍被下召文之處、友任不

參陳之条、自由之至也、然者云友任、云同意与力之輩、

爲被行罪科、重言如上件、

元亨三年正月 日

1327 『臺明寺文書』

入阿謹辭

正八幡宮御法樂經講勘合田字横手田參段事

右、經田者、入阿相傳年來知行無相違地也、然於今者、

任丹後法橋御房之素意、坂上普賢御前仁限永代、相副本

證文等、奉避与者也、其故者、田尻万德寺新田内中津町

壹町者、任故弥勒寺執當御房慶印之置文、丹後法橋御房

申子細給間、爲如此新田之由、入阿依令申之、法橋御房

重奉寄進万德寺給間、爲其志、此田於所奉避与也、仍爲

後代、辭狀如件、

元亨三年二月廿日

入阿在判

1328 「國分寺文書」

國分次郎友貞重言上

舍兄彦次郎友任背日限召文不參對上者、仰御使、有

御尋違背實否、欲被行其身於罪科、押寄當寺領致追

捕放火以下狼藉事、

副進

二通 御教書案一通先進畢、

右、友任違背度、召文不參對之条、難遁罪科故也、然者、

仰御使、有御尋違背實否、云友任、云同意与力之背、爲

被罪科、重言上如件、

元亨三年二月 日

【北条英時】

1329 「公」

國分次郎友貞申薩摩國分寺領追捕放火狼藉事、重訴狀如

此、同彦次郎友任不應度、召文云云、相尋實否、載記請

之詞、可被注申候、仍執達如件、

元亨三年二月廿六日

【北条英時】
修理亮御判

莫祢郡司殿

1330 「山田氏文書」「朱カキ」「上書」有之「顯姪次郎左衛門尉請文」

「正文在山田七郎右衛門久通」

嶋津式部孫五郎入道、慶申、薩摩國伊集院嶋廻田地事、

就先度御教書、相觸世、彦三郎忠行候之處、以去年十二

月七日捧請文候之間、令進上候畢、以此旨、可有御披露

候、恐惶謹言、

元亨三年三月四日

左衛門尉久純
【実名之裏ニ有之】(花押)

【此願之タ下判ハ元禄被下ノ本ニナシ】(花押)
【顯姪次郎左衛門尉請文】

1331 「正文」

嶋津式部孫五郎「入道」慶申、薩摩國伊集院嶋廻田地

事、任被仰下旨、相觸穎娃次郎左衛門尉候之處、請文如
此候、以此旨、可有御披露候、恐惶謹言、

元亨三年五月三日

（兼色）
平爲重請文
（花押）

1332 『國分氏文書』

國分次郎友貞申、薩摩國分寺領追捕放火狼藉事、就去二
月廿六日御教書、相觸同彦次郎友任候之處、構參津之由、
不及是非散狀候、若此條僞申候者、八幡大菩薩御罰可罷
蒙候、以此旨、可有御披露候、恐惶謹言、

元亨三年四月二日

平成貞在襄判

1333 『伴譜兼尚傳』

元亨三年癸亥、立爲父後、襲本郡辨濟使職、初父尊阿時、
所領職田凡百七十町也、而迨地頭代盛貞等侵掠奪之、失
九十餘町、屢々訴探題、至是四月十七日、探題北條隨時
承幕府命、使大隅守護代盛秀稅所介敦胤篤秀之子、歸兼
尚百七十町、

1334 『古本末吉土檢見崎氏家藏』

大隅國肝付郡弁濟使尊阿今者死去、子息兼尚与地頭代盛貞相

論所職名田以下實檢事、守元應二年三月十一日関東御教
書去年五月廿一日御施行之旨、遂其節畢、仍堀内四十一

町二段卅内打渡分八町河南十七丁段中内打渡十三町

山方小原大道ノ牛山作玉史本ヨリ西始良堺至マテ三十二町七段

廿中略之

岸良村二十町六段廿中

内浦村四十六町二段卅不世

東方村三十九町四反中

以上、百七十町沙汰付弁濟使兼尚畢、至殘田地者、見取

帳坎、仍渡狀如件、

元亨三年四月十七日

〔稅所介〕
敦胤在判
〔守護代〕
盛秀在判

1335

『水引執印文書』

〔端書〕
〔阿多八郎次郎うけ状事〕

就御注進候、河邊左衛門三郎知行分、五大院内三丁六段、
并兵衛太郎知行分、安堵仕候上へ、公文所無御免候へ、
不可沽却于權門人候、若又御年貢以下社役等懈怠仕候者、
知行分可被召候、仍爲後日之狀如件、

元亨三年四月十七日

〔阿多〕
泰忠（花押）

1336

「伊作久長譜中」

「正文在手鏡」

嶋津大隅前司久長申出家暇事、注進狀披露訖、所詮、所
勞難治云々、所被免許也者、依仰執達如件、

元亨三年五月十日

相模守(當時)(花押)

修理權大夫(貞顯)(花押)

武藏修理亮(英時)殿

1337

「在文庫伊作家文書中」「伊作家二代宗久譜中案文在卷本トアリ」

(端裏書)
「大隅左京進代」

嶋津大隅左京進宗久代沙弥道慶重言上

薩摩國伊作庄下司穎娃孫四郎高能背御下知、地頭所

經營當庄正和元二領家年貢、不致弁罪科事、

副進

一通 御下知案但一方得理之間、可持參御奉行所之、

右、年貢等、久長宗久親父應関東御教書經營之處、高純無沙

汰之間、就訴申之、爲田中備前房澄昌奉行、(隨時)遠州御代元

應二年十一月六日預御下知畢、而高純違背嚴重御下知、

于今不及弁償之条、好招其咎坎、早任傍例、爲預御裁許、

重言上如件、

元亨三年五月 日

1338

「正文在文庫伊作家文書三番箱」「伊作久長譜中正文在手鏡トアリ」

嶋津大隅守久長代道慶申薩摩國伊作庄正和元二領家年貢
事、重訴狀如此、被裁許之處、不叙用云々、任先下知狀、
可令糺返也、仍執達如件、

元亨三年五月廿九日

(英時)
修理亮(花押)

(頼経高純)
下司殿

1339

「伊作宗久譜中末紙写在卷本トアリ」

(端裏書)
「ほうしゆ□にゆつるしやうのあん」

ゆつりわたす、ほうしゆかところ、しなのよくにおう
たのしやうかんしろのかうの内てんちの事、

合いちやうにたん大内

一丁大かはつらのうちにたんひるさほのひ

右、かのそりやうハ、ひさなかちうたいさうてんのとこ

ろなり、しかるに、きよねん多く多んかう二けうしんはうか
至五月十六日

ほんきう一丁、ならひにひるさほのひんかし二反お、ゆ

つりあたうといへとも、けうしんハうかほんきうわろき

よし申あひた、かはつらのうち、しんしかつくり一丁大

ニたてかへ、以上一丁二反大、ほうしゆに、一こふんゆ
つりあたふるところなり、たのさまたけなくちきやうす
へし、いちこののちハ、そうりやうニつくへし、たし、
このてんちゆつりあたふる心さしハ、久長のちのほたい
をとふらはれんかためなり、しかれハ、おやのめいをそ
むかす、ほうしになりて、こせをねんころニとふらふへ
し、又久長かさげのいたわりによりて、てふるうあひた、
かのゆつりしやうをハ、おうかたとの御ハんを申、そ
うりやうむねひさかしゆせき、をなくハんをさせて、
とらするところなり、よてのちのために、ゆつりしやう
くたんのことし、

く元きんかう三年五月廿日　　そうりやう宗久在判

久長

ひくにめうたう在判

『國分寺文書』

國分次郎友貞重言上

舎兄彦次郎友任乍爲當參不進陳狀、送數ヶ日上者、任
違背實、欲預御裁許、押寄國分寺領、致追捕放火狼藉、
難遁罪科子細事、

右、子細、載本解狀言上畢、而友任就使節催促、乍令參
對不及陳狀、送日數上者、急速爲被行罪科、重如件、
(言上脱)

元亨三年五月 日

1341 『全』

國分次郎友貞申追捕放火以下狼藉事、重狀如此、陳狀遲
云云、不日可被明申候、仍執達如件、

元亨三 五月九日

「大保六郎入道」
「興道在判」
「二番問奉行下廣田新左衛門尉」
久義在判

國分彦次郎殿 (友任)

1342 『池端氏文書』

ゆつりわたす

ちやくしいや二郎きよたねかところ、をうすミのく
にねしめのいんのうち、てんちやしきらの事ハ、しん
しさいは、ほんせうもんにあり、

一 (南)ミなミにうたうのその 道

一 (馬門)まかとのうちのた五たん

みきのでんちやしきハ、はうふよりしけのちうたいさう
てんのしりやうなり、しかるに、しやきやう又五郎きよ

純^ニ、御けちをかすめ給へるといゑとも、しやてい五郎

二郎^{重^ニ清^ニ}しげきよ、かわちとの御にてして、を^{越^ニ所^ニ}つそうを申

たて、ミふんとおほせいたされ、御はいふんあて、御ひ

やうちやうにのほり、くわんとうに御ちうしんあるうゑ

ハ、かのて^ウちきやしきにをきてハ、ちやくしいや二郎^{清^ニ}き

よたね、ゑいたいをかきりて、しひつをもてゆつりわた

すところしつなり、よて、こうせうのためにゆつりしや

う、くたんのことし、
元^亨き けんかう三ねん五月十六日

【尼^禪阿】
あませんあ(花押)

1343

『國分寺文書』

國分次郎友貞重言上

舎兄彦次郎友任作爲當參、陳狀遅^レ間、雖被成御教

書、不及一口陳詞上者、任定法、欲被經御沙汰、押寄

國分寺領、致追捕放火以下狼藉、難遁罪科子細事、

副進

一通 御書下案

右、子細、度^レ言上畢、而友任不及陳狀、送日限之上者、

急速被經御沙汰、爲被行罪科、重言上如此^{件カ}。

1344

『全』

元亨三 五月 日

國分次郎友貞申追捕放火以下事、重狀如此、背催促不及

陳狀云云、不日可被明申、仍執達如件、

元亨三 五月廿三日

【大^陸興^道在^判】
久義^{廣^田}

國分彦次郎殿^{友任}

1345

『國分氏文書』

天滿宮安樂寺御領薩摩國分寺領等事、助次郎友貞訴狀具

狀等^書謹下給候畢、抑當寺領等者、一圓御神領之間、友任

帶本所御下文候之處、友貞構新儀、爲御家人領、令勤仕

所役之由、令掠申候之間、友任欲令陳謝候之處、自安樂

寺被申子細之間、宜依彼落居候哉、將又至放火刃傷之篇

者、友貞狼藉之段、無其隱候之間、友任爲訴人、先日就

訴申守護方、被遂檢見、沙汰最中候、而今守護指合之由

構虚言、奉掠公方候之条、奸謀候、退座之有無、尤可有

尋御沙汰候欵、以此旨、可有御披露候、恐惶謹言、

元亨三年五月廿五日

惟宗友任^{請文}
在御判

『國分氏文書』

天滿宮安樂寺雜掌祐舜謹言上

欲早且依代之公驗并廳宣(旨カ) 宣上及右大將家以來関東

度之御下知不易旨、被停止武威輩違乱、且任根本一

圓御神領實、云下地事、云年貢段、明沙汰、助次郎

友貞爲前司身、奉敵對寺家領家、令押妨所務、對當

領所、同舍兄友任下地爲御家人領由、致内通相論無

謂、薩摩國之分寺領散在田畠在家荒野以下事、

副進

一通 廳宣天養二年正月日
當寺根本一圓御神領所見

一通 右大將家御下文文治三年十二月七日

一通 関東御下知同年十月八日
當寺領可令停止武士違乱由事

右、當寺領者、去應和年中奉分補之、定置安樂寺別宮之

間、令散在國中、爲一圓不輪御神領、所被宛置北野廟院

仁王講并吉祥院御忌日八講祈所、然間、於領所職者、自

本所被補下、令究濟有限之御神用途、送數百年星霜之處、

前領所友貞年之令對押乃貢、度之依背本所御令、被改替

所職、去年正月日被仰付友任畢、就之、友貞不願後勸、

奉敵對寺家領家、燒拂住民百姓等舍屋、及刃傷狼藉之間、

友任於守護方訴申之最中、剩以當寺領等爲武家進止之由、

捧訴狀、兄弟擬番訴陳之由、承及之条紆曲也、凡於天滿

宮御領者、根本雖爲八十八庄、代之國司任之都督、連之

御奉寄之間、令散在國之所及數百ヶ所也、雖然甲乙人等

訴訟出來時者、對于寺家被經次第御沙汰者先規也、故實

也、何限友任・友貞兄弟、離寺家可致自由相論哉、就中

於下地事者、爲万代不朽之御神領之間、爭對遷代領所、

可被經御沙汰哉、其上表者雖有相論之宿意、裏者爲眼前

之兄弟之間、付旁擬貽多之上者、任當宮御領之法、於下

地相論事者、被止友貞等之自由相論、爲寺家之沙汰、欲

致其明、將又於友貞者、爲所職改易本所敵對之身、不拘

寺令、剩致種之狼藉、令押妨惣庄、可札賜名主百姓等未

進年貢之由、及訴訟之条、弥招罪科之上者、不日可被追

放其身者也、凡佛神神事以下所役事、一ヶ度之退轉猶以

神慮難測、況數年之間、一向於闕息哉、所詮、友貞爲前

司之身、不恐神覽、不憚寺家領家、懸當寺領名主等、可

札給年貢未進之由令競望之条、先以無謂之上者、任関東

代之不易御下知之旨、被停止友貞濫訴、至所務以下年貢

未進者、對當領所究濟之旨、面之欲被相觸之、然早且任

當宮御領之先規傍例、召賜友貞所進訴狀於雜掌方、爲致

其明、粗言上如件、

元亨三年五月 日

『池端文書』

大隅國宮原五郎頼重息尼禪阿代清種申當國祢寢院内畠

田參段事

右、如申狀者、於件田地者、伯父祢寢七郎左衛門尉清元讓与禪阿訖、而致違乱之條、無謂云云、如所進去年元亨

七月七日清元狀者、讓与祢寢弥次郎母仁大隅國祢寢院南

俣内田地字号參段事、右田地者、清元重代相傳地也、而

祢寢弥次郎母者爲姪之上、志切之間、亡父清綱讓狀案文

仁封裏、相副之、限永代所讓渡也云、就之、度々雖遣召

文無音之間、以谷山五郎入道覺信、尋問實否之處、如執

進去三月廿一日清元請文者、尼禪阿代清種申祢寢院内畠

參段事、以去年七月七日讓与禪阿之上者、向後不可違乱

云、此上不及異儀、任清元讓狀、可令禪阿領掌矣者、

依仰下知如件、

元亨三年六月十日

修理亮平朝臣〔英時〕(花押)

『名乘之下裏ニ有之』
(花押)

薩摩國中村兵衛四郎入道了願申原田垣本領家年貢事、今月五日御教書、副訴狀、如此候、給御請文、可令注申候、恐々謹言、

元亨三年六月十四日

〔莫祿〕平成貞(花押)

謹上 大隅式部孫五郎入道殿

1349 「正文在文庫伊作家文書」

嶋津大隅守久長代道慶申薩摩國伊作庄正和元二領家年貢事、重訴狀如此、裁許之後、雖加催促、下司不叙用云々、任先下知狀、可糺返之旨、可被相觸之、不事行者、載起請之詞、可被注申候、仍執達如件、

元亨三年七月九日

〔英時〕修理亮(花押)

〔重基〕澁谷新平次殿

1350 『正文』

式部孫五郎入道之慶掠申候當國〔谷山〕郡山田・上別符兩村

内宮園以下同村所務〔事〕〔今力〕年三月廿一日・六月三日兩通

御教書案并〔三〕日御催促狀等、今月八日到來、謹拜見

候、〔此條當村惣地頭所務條之〕事、爲衾江〔左衛門

尉奉行、訴申道慶之間、被差〔遣力〕郡司於御使候之處、不付

「山田氏文書」

本解、指違□使節御教書候之條、奸訴一事兩様(谷難カ)遁候哉、此等次第相親候秋次三位房(見知)□上者、可令明申候、以此旨、可有御披露(候カ)、恐惶謹言、

元亨三年七月廿五日

沙弥覺信此稱裏ニ有之
(花押)

【上書ニ有之】
【谷山五郎入道請文】
【此名ノ判送元本ナシ、以下效ヘ】

【花押】

1351 『國分寺文書』

彦次郎友任申放火刃傷以下由事、去四月廿四日御奉書案
今日七日御催促狀謹承了、抑友任者亡父道本令義絶、雖
爲段歩不讓与所帶之處、去年乱入友貞相傳知行國分寺領、
致放火追捕以下狼藉之間、守護御方志年(念)來就所務以下事、
奉及敵對之間、訴申公方、番訴陳之處、願自科差違、爲
友貞致放火刃傷由、構不實、号國分寺留守、奉掠守護御
方、申成御奉書之条、奇謀之企、争可遁其各候哉、所詮、
於公方御沙汰最中候之間、不能巨細候、以此旨、可有御
披露候、恐々謹言、

元亨三年六月廿日

惟宗友貞在裏判

1352

『入来院氏文書』
(端裏書)
別當次郎丸重申(状カ)

澁谷別當次郎丸代惟朝重言上

伯父弥四郎重經(重名)背兩度御教書、不及參陳上者、任定法、

欲被經御沙汰、薩摩國入来院塔原郷内田藪事、

副進

二通 御教書案一通先進畢、

右、當郷者、別當次郎丸自祖父惟重手相傳知行之處、重
經不帶一紙狀、令押領當郷内田藪、及刈田狼藉之間、兩
度雖申下御教書、願自科、令難澁之上者、急速被經御沙
汰、爲蒙御成敗、重言上如件、

元亨三年六月 日

1353

『伊作家久長譜中』

「正文在手鏡」

〔本文書ハ一三四九号文書ト同文ニツキ省略ス〕

1354

『正文在國分宮内社司澤某』

來廿五日守護狩事

加治木郷

郡司

歩兵狩人廿人

上木田大掾

十人

下木田大掾 十人

中津河湯原拂曉可有狩聚候、致三ヶ日用意、自身早々可有見參候、若雨降候者、可爲次々日候、

右、任先例、支配狀如件、

元亨三年七月十一日 酒太夫季親

『自元亨三年癸亥至弘化四年丁未五百廿五年』

1355 『載伴譜兼尚傳』

既而、兼尚蓋有所思、猶令諸村辨濟使各未復職、於是岸良弁濟使兼義兼基之孫等乃訴于官府、七月十八日榮寂下知狀、令兼義復原職、

1356 『岸良内藏丞藏』

(花押)

當郡所務就地頭押領、御使入部之間、村々弁濟使等、開喜悅之眉之處、兼尚不究地頭押領之實否、地頭与兼尚以相論之御下知、本所御進止于今無相違、而庶子等各別相傳、當知行之處、住宅共仁寄事於左右、兼尚押領之条、希代未聞之次第也云々、如申狀者、不便之次第也、於公方御使者、任関東御下知之旨、雖被打渡兼尚、至兼尚者、

急伺申入本所、隨彼御氣色、任本田數、如前々可令配分村

々弁濟使之處、剩日來庶子等當知行無相違、云下地、云住宅、押領之条旁以過分也者、早岸良弁濟使兼義先令還

住本宅、近年領知之田地等如元致知行、可全御年貢者也、

於委細者、追被經御沙汰、重可有御下知之狀、所仰如件、

元亨參年七月十六日 榮寂(花押)

1357 『写在岸良氏』

(本文書ハ一三五六号文書ノ案文ニツキ省略ス)

1358 『在文庫伊作家文書中』伊作家二代宗久譜中案文在卷本トアリ

(端裏書) 大隅左京進代

嶋津大隅左京進宗久代道慶重言上

薩摩國伊作庄下司穎娃孫四郎高純背御下知、地頭所經替當庄正和元二領家年貢、不致弁罪科事、

副進

二通 御下知并追御下知一通先進畢、

右、子細言上先畢、而高純背度々御下知、于今無音上、

任傍例、爲預御裁許、重言上如件、

元亨三年七月 日

「伊作家二代宗久譜中」

「正文在手鏡」

(端裏書)

「伊作庄領家狀」

嶋津庄薩摩方伊作庄同日置北郷預所与地頭相論所務條々、
雜掌承信於宰府令申沙汰候之處、於京都、以雜掌信宗与
地頭代道慶名字兩方書連和与狀候早、於御成敗之段者、
於宰府、爲本雜掌承信沙汰、賜御舉狀、可令申沙汰候、
以此旨、可有御披露候、恐惶謹言、
(文保元年)
七月廿三日 行壹上
進上 少納言法眼御房

『國分寺文書』

薩摩國御家人國分次郎友貞謹庭中言上
欲早被渡二番御引付、被經一具御沙汰國分寺領之事、
右、當寺領事、二番御引付爲御奉行人大保六郎入道興道、
自去年于今御沙汰最中也、而論人彦次郎友任申成 繪旨
院宣、被与奪一番御引付云云、所詮、渡二番御引付、於
一所爲被經御沙汰、恐々庭中言上如件、

元亨三年七月 日

「七月廿三日庭中狀也、松齒カ筆エイノ許ニテ書了」

『國分寺文書』

薩摩國御家人國分次郎友貞謹言上

欲早任定法被寄一方、被經御沙汰、被停止安樂寺雜掌
祐舜并彦次郎友任濫訴薩摩國々分寺領之事、
右、寺領者、友貞先祖代々領御下知御教書、其身爲御家
人令勤仕所役之地也、而友任不顧亡父道本義絶之、相語
當國在國可入道道雄同一族以下富有之輩、引率多勢、以
去年十二月日押寄當寺領、致追捕放火以下狼藉之間、就
訴申、於二番御引付、爲大保六郎入道契道奉行、被致御
沙汰、雖被成召文、友任願自科不參對之間、以難澁之篇
可預御裁許之由、令言上之、剩安樂寺雜掌祐舜爲本所進
止地之上者、於武家難及御沙汰之由、捧支狀畢、其後可
依于雜掌沙汰落居之由、友任進請文畢、仍御沙汰最中之
處、今如承及者、友任掙給旨・六波羅御教書云云、奸計
之至極何事如之哉、然者早任定法、被寄一方被經御沙汰、
爲預御裁許、恐々言上如件、

元亨三年七月 日

「山田氏文書」

『正文』

山田村讓狀爲類書留置候、沙汰落居候者、可返進候、恐

(頭述)「宗公々山田宗久江書被遊」(借候)

く謹言、

『元亨三、押札ニ有之』

八月四日

忠宗(花押)

山田とのへ

『元亨三、但押札ニ有之』

そうりやうしまつのしもつけとのほうみやう道義御事、
谷山の御さたの時、るいしよのために、山田のもんし
よを御かり候御狀也、なおり御はんかやうに候也、

1363 下總國相馬御厨内府河・押逆・申斐御房三ヶ村御代官職事

右所々、所讓渡平盛資也、但府河村御年貢拾石、無懈怠、
可有其沙汰之狀如件、

元亨三年八月十二日

沙弥稱惠在判

(本文書藤野家文書ナルベシ)

1364 『藤野家文書』

讓渡 下總國相馬御厨内發戸本給壹町 田中左近
入道在家 井中ノ代

内事

右所々、雖讓渡平盛資、一期の程半、息女虎御前にゆつ
りわたすところ也、一期の後者、盛資知行すへき狀如件、

元亨三年八月廿九日

稱惠

1365 『國分寺文書』

薩摩國御家人國分次郎友貞謹陳申、欲早停止天滿宮安樂
寺雜掌祐舜濫訴、依天福・寛元・寶治・正應御式目并五
社興行御事書、任關東六波羅御下知御教書并武役勤仕證
跡等、預御裁許、當國々分寺領田畠在家等事、
副進

一通 右大將家御教書 十一月廿四日

一通 六波羅御奉行書狀 七月廿八日

一通 武藏守殿御書 九月廿九日

一通 修理亮殿御書 同月廿三日

二通 六波羅御教書 寛元二年七月廿五日
同四年五月廿七日

一通 同御下知 同四年九月五日

二通 同御教書 仁治二年九月十日
同三年十一月十九日

一通 關東御教書 弘長二年七月十日

一通 守護大隅入道々佛御奉書 同年八月十一日

一通 同人書下 正月卅日

一通 子息式部丞催促狀 二月十四日

一通 弘安四年蒙古合戰恩賞御配分狀 正應元年十月三日

八通 異賊警固番役覆勘狀

一通 道本義絶狀 應長元年閏六月廿四日

一通 友任請文 元亨三年五月廿五日

一卷五通 天福・寛元・寶治・正應関東御下知御教書
并五社興行御事書案

一通 國分寺相傳系圖

右、如雜掌祐舜訴狀者、當寺領者、去應和年中奉分補之、被定置安樂寺別宮之間、令散在國中、爲一圓不輪御神領、所宛置北野廟院仁王講并吉祥院御忌日八講祈所也、然間於預所職者、自本所被補下、令究濟有限御神用、送數百年星霜之處、友貞年々令對捍乃貢、度々依背本所御令、被改替所職、去年正月日被仰付友任云云、此条當寺領者、友貞累代相承之地也、仍於下地者、爲御家人領令勤仕関東御公事、至于本所年貢者、爲請所每年八十八石令京進之条、請取狀等炳焉也、自昔各別号領所補下之例、一切無之、御家人領事、天福・寛元・寶治・正應関東御下知御教書嚴重之上、殊五社興行之時、被定下其法畢、以何罪怠、無左右以友貞重代相傳所領、自本所可被仰付友任哉、於友任者、背亡父道本、令現条々不調之間、以應長元年令義絶、於所帶者悉讓与友貞言上者、道本遺領友任難及競望者哉、次對捍乃貢由事不實也、年々請取明白之上者、遂結解之日爲顯然欵、次背本所御令由事、此條有限御年貢雖一塵無懈怠者、以何事令掠申哉、次同狀云、友貞不

願後勘、奉敵對寺家領家、燒拂任民百姓等舍屋、及刃傷狼藉之間、友任於守護方訴申云云、此條無極虛誕也、友任爲亡父道本義絶之身、相語當國在國司入道道雄同一族親類等、引率多勢、以去年元亨十二月押寄國分寺領、追捕土民等住屋、致放火以下惡行之間、守護方者依爲退座、就許申公方、被成下度々御教書、仰御使真祢郡司成貞、有御尋違背實否之處、友任構參津之由、不進請文之間、其子細成貞令注進之間、以違背之篇、擬被致御沙汰之刻、祐舜捧訴狀畢、其後可依雜掌訴訟落居之由、友任捧請文、於放火以下狼藉者、雖一口不論申之上者、友任罪科承伏勿論之處、祐舜以友任所行、爲友貞所行之由、令掠申之条、非得友任之語哉、次同狀云、以當寺領爲武家進止地之由捧訴狀云云、此條爲御家人領令勤仕関東御公事之条、御下知御教書明白之間、友任濫妨狼藉事所訴申也、難及謬難者也、次同狀云、甲乙人等訴訟出來時者、對於寺家被致次第御沙汰者先規也、限友任・友貞兄弟、離寺家可致自由相論哉云云、此條友任者、亡父道本義絶之仁也、仍於當寺領者、道本讓与友貞之間、當知行之處、友任引率多勢、致放火以下狼藉之間、守護人者爲退座之間、其身爲御家人令訴申公方之条、尤爲正路之處、雜掌祐舜得

友任之語令支申之条、無謂次第也、且以重代御家人稱甲乙人之条、惡口專一也、爭可遁其咎哉、次同狀云、表者雖有相論宿意、裏者爲眼前兄弟之間、旁擬貽多上者、任當宮御領之法、於下地相論事者、被止友任・友貞等自由相論、爲寺家之沙汰、欲致其明云云、此條得道本讓、令知行遺領等之友貞背亡父之素意、爭令同心于不孝友任、可致表裏沙汰哉、可依雜掌訴訟落居之由、友任捧請文之間、友任令同心于祐舜之条眼前也、濫訴更非御許容之限多、(平カ)次同狀云、於友貞者爲本所敵對身、可拘寺令、致種之狼藉、令押妨惣庄、可糺給名主百姓等未進年貢之由、及訴訟之条、弥招罪科之上者、不日可被追放其身云云、此條依友任(任カ)濫妨狼藉、名主等寄事於左右、抑留年貢之間、所訴申也、(本説カ)所敵對之由構不實、以重代御家人、無左右可被追放之由、何可及濫訴哉、同狀云、佛神事以下所役事、數年之間一向闕怠云云、此條佛神事全無懈怠之處、得友任語、構申不實之条、不足御信用、次如祐舜所進天養二年廳宣案者、僧永修之事也、全非友貞先祖之上、爲平家以往之間、難備當論准據欵、次如文治二年御下文案者、無國分寺号之間、不定證據之条同前、次如承久宣旨案者、武士寄事於左右、煩州懸費民庶、不營租稅之誠也、不能當論潤色欵、

然者早被停止祐舜濫訴、依天福・寬元・寶治・正應御式目并五社興行御事書言旨、(之カ)關東・六波羅御下知御教書、武役勤仕之證據、爲預御裁許、粗披陳言上如件、
元亨三年八月 日
私、但此陳狀者、大保六郎入道之許被上之處、其後不請取雜掌之間、永利殿取給(比カ)三天、國分殿御方仁被進畢、爲不審注之、
『國分寺文書』
宇佐宮領條々
一 御家人等知行分事、
或爲代々沒收之地、被付給人、或依神官供僧之咎、被成関東御下文所々、輒難被付社家、但於年貢并神役者、任先例、可勤仕也、若令難澁者、可被處罪科之由、可相觸之、
次自社家相傳買得地事、
或掠給安堵御下文、或雖過知行之年記、同任舊規可被付社家、但雖爲一圓神領、自天福・寬元以前、宛其所勤來御家人役之地者、今更不可有相違、子細同前、
一 非御家人凡下輩知行分事、

1366

或帶下知狀、或雖過知行年記、糺明本證跡、可被沙汰付社家、

一 本領令寄進地事、

凡下輩分可令注進之、

一 社壇造營并祭祀事、嚴密可申沙汰之由、可相觸奉行

人大宰少貳貞經、

一 宮崎 高良 香椎 安樂寺領等事、

社家雜掌等及訴訟者、同可令致其沙汰也、

此沙汰、元亨三年九月八日入門御引付仁兩方被召合天、

旨趣者、奉行入契道披露被申早、同十六日、御評定ニ合

テ、年貢者本所雜掌仁可請取之、於下知者、入理非、可番

之旨、奉行入披露、仍成云々、

奉行人大保六郎入道契道被成之、

1367 「伊作久長譜中」

「正文在手鏡」

出家暇事、今年五月十日関東御教書如此、可被存其旨也、

仍執達如件、

元亨三年九月五日

嶋津大隅前司殿

修理亮(花押)

1368 「山田家譜中」

「正文在山田七郎右衛門久通」

谷山郡山田村御讓狀事、披露候之處、御沙汰落居以後、

可進之旨、可申之由候、恐々謹言、

九月十一日

山田殿

山田殿

「到元亨三十九十一、これハ本しやうほうのしひつ也、しまつ殿御時」

1369 「正文在文庫伊作家文書」「伊作久長譜中正文在手鏡トアリ」

所從宗太郎男事、帶嘉元四年八月廿五日兩通證文、可被

召渡之由、大隅國河俣拯入道禪心代篤範就訴申、有其沙

汰之處、彼狀等義理相違之上、篤範爲訴人難澁、不通其

咎、加之、於件男者、禪心出遊狀候畢、訴訟之趣無謂之

間、所被棄捐也者、仍執達如件、

元亨三年九月十二日 前參河守(花押)

嶋津大隅守殿

1370 「國分寺文書」

安樂寺領薩摩國々分寺友貞濫妨狼藉事、就繪旨・六波羅

施行、有其沙汰之處、於下地者可依相論落居之旨、雜掌

申之上、不及子細、至于年貢者、可被渡沙汰雜掌也、仍執達如件、

元亨三年九月十六日
(忠孝)
修理亮御判

嶋津下野三郎左衛門尉殿

〔此御教書ヲ成テ後、奈古三郎入道春坂方被渡畢〕

1371 安樂寺雜掌与國分寺三郎友貞相論薩摩國分所務以下事

文書等可撰給候、恐々謹言、

十一月七日
(寺脱カ)
春寂在判

大河入道殿

1372 『水引執印文書』

薩摩國新田宮雜掌申放生會饗膳役事

右、如所進神役注文者、吉永名分上料二立次七十膳、清酒壹斗五舛、濁酒參斗五舛云々、而當名領主友經對捍彼

役之由依訴申、嘉元以來數度雖遣召文、無音之間、去年

九月廿日以澁谷弥平三爲重、尋問實否訖、如執進去二月

八日友經請文者、新田宮放生會饗膳役事、企參上可明申

云々者、可參上之由進請文之後、數月不參之上、雖可被

行罪科、嘉元以後年々神事無爲令遵行之由、雜掌自稱訖、

以前分所役勤否、無據糺明之間、不及沙汰、至向後者、社役勤仕之時者、爲斷絶後日相論、悉可出給請取於役人等者、依仰下知如件、

元亨三年九月十六日

修理亮平朝臣(花押)

1373 『上』

薩摩國八幡新田宮放生會饗膳相撲流騎馬以下神役等事

吉永又三郎左衛門尉友經、嘉元以來雖[]捍、依小事社

役懈怠、令抑留大營祭祀条、神慮難測之間、年々[]遂

行神事、追年致對捍之由、雜掌妙嚴申之處、嘉元以後祭

礼無爲遵行之由、妙嚴自稱之上者、神役無懈怠之条分明

之旨、友經披陳之間、社役勤否、神事以後無據糺明歟、

所詮、於向後者、所役勤仕之時者、社家出證狀、役人等

可帶請文之由、可被相觸兩方也、仍執達如件、

元亨三年九月十六日
(英時)
修理亮(花押)

下野三郎左衛門尉殿

1374 『山田氏文書』

(本文書ハ一三六八号文書ト同文ニシテ省略ス)

1375 〔正文〕
嶋津式部孫五郎入道、慶申當國谷山郡山田・上別符兩村

内宮園以下同村所務事、任被仰下候之旨、相觸谷山五郎入道候之處、捧請文候、謹令進上候、以此旨、可有御披露候、恐惶謹言、

元亨三年九月廿八日

〔表全〕
平重基請文
〔名栗下裏ニ有之〕(花押)

〔上書〕
〔深谷新平次請文元亨三十二〕

1376 〔正文〕
御文委細承了、おほせをかふり候山田北別符の御ゆつり

狀の正文事、御内ニ進有之候、たうし御勞のおりふしにて候あひた、申いたして、進せず候、このち申て進へく候、恐々謹言、

九月卅日

〔地頭代〕
沙弥津性(花押)

1377 〔正文在池端氏小根占〕
大隅國祢寝南俣山本村内田地号横北横副貳段

右、田地者、高清算代相傳私領也、而弥次郎殿事、爲一姓甥上者、年來申承志依不淺、限永代所奉讓渡也、但於御公事者、加御佃新入田米定參舛、府御領物貳疋可被勤仕之、又石築地勤仕之時者、錢田別拾文可被勤仕之也、

若又彼地仁不慮外煩出來時者、當俣内類地邊田村内田地上田貳段可被撰取之也、至于子々孫々、無他妨可令行給、仍爲後證讓狀如件、

元亨參年十月廿日 建部高濤(花押)

1378 〔臺明寺文書〕

相博

臺明寺新田大隅國曾野郡重留名内垣本田貳段与同郡用松名内萩峰貳段号大卒都婆事

右、垣本者、爲正八幡宮之經田、萩峰者、爲公田、而相懸垣本田之所役於萩峰、相付萩峰之諸公事於垣本田、互依爲便田、所令相博也、向後相互不可有改變之儀、但或令相違彼田、或背此役儀者、萩峰田如元自稅所殿可令知行也、仍爲後代、相博之狀如件、

元亨三年十一月十五日 書生學頭忠禪在判

政所權律師惠弁在判

1379 〔水引執印文書〕

薩摩國八幡新田宮放生會饗膳以下色々神役等事、諸郷保役人等年々雖令對捍件課役等、依小事抑留大營之條、神

『在比志島氏』

慮難測之間、遂行祭祀之由、雜掌妙嚴申之處、神事遵行之旨、雜掌自稱之上者、社役弁勤之条勿論之旨、領主等披陳之間、神事以後社役勤否、無據亂明欵、所詮、爲斷橫論、所役弁勤之輩者、出送文、社家可出請取由、可被相觸兩方也、仍執達如件、

元亨三年十一月十六日

修理亮(花押)

下野三郎左衛門尉殿

〔守〕護人退座之間、所有其沙汰也、彼女者相傳所從〔嫁大隅國蒲生彦太郎宗清所領蒲生〕〔院〕弥太郎大夫〔年并〕明之處、近年對捍〔間〕申、仰宗清、元應二年〔月〕以後、度々遣召文〔年六月六日以別府彦〕〔本〕郎光實、重催促〔地〕
〔者力〕如執進宗清代直清同八月廿九日請文、義範申千与王女同女子等事、如此名字之族不存知云、同十一月宗清以代官高清〔如狀者、弥太郎大夫妻女爲下人之證據、何〕〔年并來役祈之旨、構申不實之上者、不召仕條承伏也云、始則不存知之由申之、後并〕〔役力〕祈不實之旨論申畢、涉兩舌之上、今年八月十一日義範進二問狀之處、高清不終沙汰之篇〔痛力〕國畢、難遁難澁之咎、然則於彼女母子者、

『國分寺文書』

可去渡于忠一矣者、依仰下知如件、

元亨三年十一月廿五日

修理亮平朝臣(花押)

薩摩國々分次郎友貞謹庭中言上

欲早先奉行人大保六郎入道契道非勤条々顯然上者、

仰當奉行人奈古三郎入道春寂、被召返島津下野三郎

左衛門尉貞久所給御教書、被究兩方訴陳、於下地并

所務濫妨者、可停止由、預御下知、至年貢者、任承

元以來請所員數、可弁濟由、宛于友貞身被成下御教

書、當國國分寺領事、

副進

四通 領家年貢請取狀 承元以來請所々見、

一通 御教書案 守護當敵所見

三通 御教書案

一通 使節莫祢郡可成貞請文

一通 友任請文

右、當寺領者、友貞重代相傳所領也、仍於下地者、爲御

下人領令勤仕所役、至年貢者、承元以來爲請所令弁濟之、

代々知行無相違之處、去年^{元亨}十二月友貞舍兄友任、爲

亡父道本義絶之身、押寄當寺領、追捕土民等住屋、致放

火以下狼藉、成年貢違乱之間、守護人者依爲當敵訴申公

方、被經御沙汰、被成召文之處、友任違背三ヶ度御教書、

不及參陳之間、使節莫祢郡可以違背篇、令注進畢、仍欲

被行罪科最中、安樂寺雜掌祐舜爲本所進止地上者、於公

方不可及御沙汰之由捧支狀之後、友任可依雜掌訴訟落居

之由、捧請文、替面掠申下綸旨六波羅御教書之条、云祐

舜、云友任、難遁一事兩様罪科之處、先奉行契道不究訴

陳、仰當敵守護人貞久、可沙汰渡年貢於雜掌之由、依被

成下御教書、貞久仰守護代、濫妨所務之上、諸郡郷院免

田所當米等、不可弁友貞方之由、依相觸于郡司名主、一向

所抑留也、凡下地年貢相並雜掌致訴訟時者、兩方訴陳相

究之後、被成御下知之条、爲定法之所、何下地相論未斷

以前、年貢之一事先立可被成敗哉、御奉行非勸顯然也、

一、雜掌者不出帶一通證文、任雅意、一向可被付所務之由

申之、友貞者亦備請所支證、不可被付所務之由論申之處、

何下地相論落居以前、可沙汰渡年貢由、可被裁許哉、引波

友任等之所見、何事如之、^二將又下地相論落居以前、限

于年貢一事雖可被裁許、爲重代御家人之上者、先宛于其

身、直被仰下之、令難遊之時者、可及使節沙汰之處、自

最初被差使節之条、令參差畢、^三縱又雖可及使節、至

于守護人者、爲古敵當敵之条、備支證於本解狀、令訴申

之上者、可被仰各別人之處、以眼前當敵、被差御使之条、

非正義欵、^是然者早被改先奉行非勸、仰當奉行人奈古

三郎入道、^{（奉忍）}被召返貞久所給御教書、被經次第御沙汰、爲預

有道御成敗、恐々庭中言上如件、

元亨三年十一月 日

〔當奉行奈古三郎入道被成之〕

1382

『國分寺文書』

安樂寺領薩摩國分寺友貞濫妨狼藉事、就綸旨、六波羅施

行有沙汰之處、於下地者、可依相論落居之旨、雜掌申之

上者、不及子細、至年貢者可致沙汰之由、可被相觸友貞

也、仍執達如件、

元亨三年十二月三日

〔平成貞〕
莫祢郡司殿

〔北条業時〕
修理亮御判

1383

『正文在池端氏』

可早以建部氏字又領知大隅國祢寢院南俣内田伍段^{郡本}
馬門

依、東、島貳町壹段・在家肆宇南入道事

右、以亡父宮原五郎頼重跡所配分也者、早守先例、可令

領掌之狀、依仰下知如件、

元亨三年十二月七日

專當代家忠印

拒捍使種延印

關東御使

頭國(顯カ)

宗覺印

大官使清春印(マコ)

相模守平朝臣(高時)(花押)

修理權大夫平朝臣(貞顯)(花押)

1384 「安養院文書」

鹿兒島東福寺々中并山野草木採用及殺生禁断大犯人等以下条々事、去應長元季・文保三季故殿御下知訖、任彼狀、不可有違犯之儀、若不拘制法之輩者、可被處重科之狀如件、

元亨三季十二月十一日 (貞久) (花押)

1385 「篠原文書」

納

造宇佐宮薩摩國牛屎院所課内福光名貳百町別米事

合 伍舛一合二夕 (篠原) 孫二郎弁

右、所納如件、

元亨三年十二月十二日

(表紙)

忠 宗 公 自 元 亨 四 年即正中元年
貞 久 公 至 正 中 二 年

前 編 舊 記 雜 錄 卷 十 四

元 亨 三 正 中 二

自 元 亨 四 年即正中元年 至 正 中 二 年

四 代 忠 宗 公 正中二年
逝去

五 代 貞 久 公

1386

『加治木新納仲左衛門藏』

皇太神宮御訪用途事、先度被仰下之處、無沙汰云、甚自由也、不日可令究濟、若猶難澁者、可被收公所領也者、依仰執達如件、

元亨四年正月廿日

相模守(高時)(花押)

1387

『正文國分八幡宮社司澤氏家藏』

來二月五日守護狩事

曾野郡

稅所介

步兵狩人廿一人

惣檢校

十人

曾郡司

五人

河俣大掾

八人

重久『大塚篤兼』

十人

向笠

五人

同藤二郎

三人

中津河湯原可有狩聚候、致三ヶ日用意、自身早可有見參候、若雨降候者、可爲次々日候、右任先例、支配狀如件、

元亨二年正月廿五日

沙弥圓也

1388

『正文國分正八幡宮社司澤善三太家藏』

來二月五日守護御狩之事

稅所介廿一人

惣檢校十人

修理權大夫(貞顯)(花押)

曾郡司五人
重久大掾〔孫八傳兼〕十人

河俣大掾十人
向笠諸次郎兵衛五人

同藤三郎五人
東郷郡司十人

羽坂藤七大夫十人
切手又次良十人

姫木弥四郎五人
木房大掾十人

禰寝郡司廿人
佐多弥四郎十人

同九郎五人
伊佐敷大掾七人

田代七郎入道十人
小河郡司十五人

栗野郡司十五人
修理所十人

加治木郡司廿人※2
上木田大掾十人

下木田三郎十人
牧山大掾七人

田所小大夫十人
弟子丸五人

國修行五人

元亨二年正月廿七日

※1 『観應三年七月、鳥山直顯執達状ニ、姫木五郎四郎殿、或ハ姫木

十郎殿とアリ、此等ノ一族ナルベシ』

※2 『嘉曆二年閏九月、探題北条英時下知状ニ、加治木郡司政平ト見

ユ、亦文和三年ノ交名注文ニ、加治木彦二郎一族ト見ユ、自元亨

至文和年数續三十年、然レハ彦二郎政平ナラン、可考』

「伊作家文書在文庫」
「伊作久長譜中正文在手鏡トアリ」

薩摩國滿家院内河田名地頭職、大隅守殿御知行之時、檢

断ニよて、くうとうわらへかゝるい六人以下、ならひに

損物等事、雖訴申候、和談之儀を申候ニ付て、用途を給

候うへハ、彼〔沙迷〕条々、なかく止候了、若背彼状、雖爲

一事、後日變改仕、申子細候へん時へ、奸訴の罪科ニ可

奉被申行候、所詮、此旨を兩方より可申入奉行所候、よ

て不可有子細候、仍爲後日狀如件、

元亨四年二月廿二日
源祐清(花押)

「爲後證、奉行人所加判也、

元亨四年十二月五日

左衛門尉(花押)

藤原(花押)』

『載于智覽系譜』

和与

薩摩國知覧院鎮守開聞中宮大明神御神領内并公領内所

々別府及惣院内狩牧馬條々

右、就郡司申、雖被成御下知、以承諾之儀、相互所領

和与焉、

一 取違宗馬西谷中原山頭別府事、四至、東限自穎娃舍

利山仁通大道、南限白谷川下利并猿宇治利西原大道河邊境切留、北限河邊境、西限河邊境、

右、於所々四至內者、停止惣地頭以所務加徵檢斷之綺、郡司一圓可知行之由、被出狀之上者、不及子細矣、

一 當宮御神領檢斷事

四至、東限山中、西限舍利山并大人津布志、南限中牟禮并小龍喰、北限帶山河登并山田平尾立母嶽、又此四至之外、公領內散在田地浮免得田陸町參段參杖并同御神領世世自河東本蘭壹箇所、飯町田地捌段、同蘭壹ヶ所、一久玉敷地荒野田地參段壹杖、世世明神敷地平田田地壹町、同蘭壹箇所、白石久玉敷地勝尾田五段參杖、崩本參段參杖、世世崎參段參杖、東牟田壹町貳段等者、爲往古御神領之上、不除庶子各別之地、於檢斷職者、社司一圓可致沙汰、且任嘉祥・天仁以下宮證文旨、且任御下知旨、云利物、(地脱力)云檢斷、惣地頭聊母不可成違亂之由、被出狀之上者、不及異儀、但至向右衛門太郎入道今者死去蘭壹箇所并牧野七郎入道善惠之跡東流田地貳段者、爲庶子分離爲空地內、忠直別相傳之上者、彼蘭計者、檢斷相共可被知行也焉、

一 當院內公田加徵米事

右、至當郡司忠世知行分加徵米者、以承諾之儀、得田地別捌舛(何物)以攝可被收納也矣、

一 木佐木屋敷四箇所事

右、屋敷等者、雖爲御神領四至內、以承諾之儀、爲惣地頭屋敷、所避渡也、但於公領內惣地頭本屋敷、世世脇蘭壹箇所在田者、止惣地頭所務加徵檢斷之綺、避付郡司方之由、被出狀之上者、相互一圓知行不可有相違焉、

一 惣院內所々狩并牧馬事

右、且依先例、且任御下知旨、至狩并牧馬者、令停止惣地頭綺之由、被出狀之上者、不及吳儀矣、

一 永山河床別府事

四至、東限河能下利并田代東尾崎同河邊境、南限自上河床下山崎、同渡瀨大石并毛無峰尾立、西限城崎北野谷与利河邊境、經峰仁切留、北限河邊境、同平石馬上尾青木大柵、(脱アルカ)西限、右至四至內者、惣地頭一圓知行不可有相違焉、

一 白石狩倉事

四至、東限馬立前野谷、南限穎娃塚、西限布志能世多尾下与利北仁流多留野谷、北限道矣、

右、於狩倉四至內者、止郡司之綺、惣地頭一圓知行不

可有相違矣、
 以前條條、守彼狀、相互可致沙汰、若令違背者、可被行罪科也、且親父善能者長病之間、使節以下事、以子息忠世、可勤仕之由、預御教書之間、所加判形也、仍爲後日、和与狀如件、

元亨四年三月八日

平忠世判

「正文在文庫伊作家文書」「伊作久長謄中案文在卷本トアリ」

〔端裏書〕
 「御もんそのもく六」

御もんそのもくろくの事

合 承らひいたすにまかせて、これをかくほとに、したいふとなり

一つう いさくへきのしやう御あんとの御くたしふミの正文、大すミのすりのすけとの御給、けんちねん八月廿七日

四つう 御りやうの御くたしふミ一つう、てつきの御ゆつりしやう二つう、ちんせい御かきくたし、みな正もん、これらへほんたの五郎さへもんかまくらへもちてのほるあひた、うけとりをそをくところなり、

一つう ちんせい御けうそ、さきやうとの御くちし御つとめあるへき事、正もんへほんたさへもん、をなしくもちてのほる

二つう しゃうとのゝ御しやうの正もん、御りやう御あんとの事、

一つう かんしろうのかうの御けちのしやうもん、ちとうしきの事、

一つう 正をう三年五月十二日

一つう 正をう三年五月十二日

一つう 正をう三年五月十二日

一つう 御所さうゑいようとうの御けちの正もん、永仁三年七月廿九日

一つう ことのゝ御しやうの正もん、御もんその御よりの時へ、そうりやうに申さるへきよし事、こうあん四年四月十六日

一つう 大かたとのゝ御しやうの正もん、へきのしやうの事、永仁五年三月十八日

一つう たいなごんにうたうとのゝあんとの御くたしふミ、ならひニふこととのゝ大すミとのゝ御ゆつりしやうのあん、嘉禄三年十月十日

一つう いさくのしやうの御くたしふミのあん、けんぎう三年十月廿二日

一つう 大すミとの御おきふミ、ならひにいましめのしやうのあん、文永二年六月二日

一つう いくわんのうけとりの正もん、永仁五年ほんしよのねんくわよもつ

一つう いさくへき、正わ元二りやうねんのりやうけねんく三百貫のうけとりの正もん、文保元年六月十九日

一つう 御けちの正もん、文保元年九月二日

一つう いさくへきのりやうけねんくわきまふ事、

一つう 正をう五ねん十一月卅日

一つう 正をう五年十二月十六日

一つう いくわんとう御けちの正もん、りやうけちとうわよにつきて、三かみやうをちとうわよによるゝ事

一つう 正をう五年

一つう りわんとう御けちの正もん、

一つう いさくのしやうの所むいけ、りやうけちとうのわよしやうの正もん、

一つう いさくへきの所むてうゝの事、りやうけちとうのわよのしやうの正もん、文保くわんねん六月十七日

一つう 正をう五年九月廿四日

一つう いさくのしやうのりやうけの状のしやうもん、七月廿三日

一つう 正をう五年九月廿四日

一つう 大とのゝ御へんしかゑさせ給を、のちのためにしるしをかる、

元亨三年三月十三日

1392 「正文在文庫伊作家文書」「伊作久長譜中案文在卷本トアリ」
(端裏書)

「御もんそのわたしもく六」

めいこくしいけの御もんそのもく六

合 ちらひいたすにまかせてこれをかくほとに、したいふとうに
かくおくなり

一つう めいこくし御めんのくわんとう御けうその正もん、
正わ三おん六月廿五日

一つう くわんとふきやう、たいけきのりもとの状の正もん、九月廿日

一つう 御くわんとの事、しやミしやく一の状の正もん、むへん、
(寢)

一つう くわんとふきやう、とさのかミの状の正もん、

五つう くうせんのうけとりの正もん、

一つう めいこくしの事、
くわんとう御けうそのあん、正和三年六月廿五日

一つう ゆきゑのせう御めんのくわんとう御けうその正もん、
正をう三年十月廿七日

一つう さいふしやうゑの入たうの状の正もん、
くうせんの事、正をう三年十二月十九日

一つう 同しやうゑの入たうのほうその正もん、
正をう三年十一月廿四日

一つう (余久)
さきやうとの御にんくわんの御めん御けうその正もん、
嘉元三年八月廿一日

一つう をなしきくうせんようとうのうけとりの正もん、
延慶三年八月廿五日

一つう ふこのくにのけんたんの上の御つかひの事、
くわんとう御けうそのあん、ちんせいの御しきやうの正もん、

二一つう 御をん御所まうの御申のあん、くわんとうの御けうその正もん、

一つう くわんとうに御さん上の時のさいせうをんしとのならひニわ
かこれうの御かたへの御しん物の御返事正もん

十三つう かまくらのさかをさへもんにあつけおかる、御もんその
あんら、
(酒匂)

一つう 宮の御うた

元亨三年三月十三日

1393 『清水臺明寺文書』

奉寄進

竹井田參段在曾野郡

右、件田者、恒久名内也、而臺明寺衆徒傳領之、被寄 山

王御供田云々、而間雖爲円与當知行之地、以寄進之儀、

御佃以下諸公事等留之、所寄進 山王御寶前也、且爲現

當二世祈禱、永代更不可有違乱之儀者也、仍爲後日、寄

進之狀如件、

元亨三年三月十六日

大檢校円与(花押)

1394 「正文在文庫伊作家文書」「伊作久長譜中正文在卷本トアリ」
(端裏書)

「御もんそのもくろく」

御もんそらのもくろく

合 承らひいたすにまかせてかくほとに、したい
ふとうなり、

四つう けいこはんやくきんしのかきくたしの正文

一つう かつさの入たうとの御けうその正文
つせき\のすのこ事

二つう しなのゝはんくわん入たうのもとへの御文のあん

一つう たけさへもんの状の正文

一つう ちふ入たうの状の正文

一つう きやう一の状の正文
(行)

一つう かくしんの状の正文

七つう ひらやまのしやうの正文

十六つう 御くちをうかちて御ようとうぬすミとる時のかくしやうい
けの事

二つう めしのくうの御けうそのあん

一つう せうけんしのそうのきやうのやとのかとふミ

一つう さめしまのうけとり正文
五郎をとこのしろの事

二つう つのかんしろのりやうけねんくちうもん
(久經)

一つう しもつけの入たう殿の御文正文
大井さへもんの事

一つう もりかけか状正文
中をの村の御けちの事

一つう かちまきの五郎さへもん入たうの下人のうけとり正文

一つう 正をう二年しやうくん入きよの御とも人のけうミやうちう
(久明親王)

一つう たかハしのかり人の事、おきとの御状正文

一つう ところ入道の状

一つう いさくのしやうの□いけちうもん
(ま)

一つう せいふん三入たうの状正文

二つう せうたうか状正文

一つう ちやうしん房のきしやうもん

元亨四年三月十八日

1395 「山田氏文書」

嶋津式部孫五郎法師法名道慶 申薩摩國上野平九郎入道禪意

押取農具并牛馬事

右、雖爲守護人奉行之篇、退座之間、所有沙汰也、而給黎
院内藤弁以下田地者、道慶相傳知行之處、禪意無故押取
牛壹頭・馬壹疋并農具等、成勸農妨之間、藤弁坪四段卅
歩、宇治山崎貳段、桑坪壹段、小布治田卅歩、下地不作
訖、可被糺返牛馬以下之由、道慶依申之、度々尋下之上、
以頼娃二郎左衛門尉久純加催促之處、如久純去年七月廿
一日起請文者、禪意不及請文云々者、難遁違背之咎歟、
然則於牛馬以下者、可令糺返于道慶者、依仰下知如件、

元亨四年三月廿日

1396

『正文池端家藏』

祢寢弥次郎清種申大隅國祢寢南保内山本村田地事、訴狀副具、如此、爲有其沙汰、早可被參對、仍執達如件、

元亨四年四月十四日

修理亮(英時)(花押)

祢寢五郎殿

1397

『正文國分宮内社人澤喜三太家藏』

來廿一日守護狩事

祢寢院

郡司

歩兵狩人廿人

佐多弥四郎

十人

同九郎

五人

田代大掾

十人

伊佐敷

五人

中津川湯原拂曉可有狩聚候、致三ヶ日用意、早可有見

參候、若雨降候者、可爲次々日候、

右、任先例、支配狀如件、

元亨二年四月十八日

沙弥円也

修理亮平朝臣(英時)(花押)

1398

『正文國分宮内社司澤氏家藏』

守護私領頭役狩人事

重富四人

用松四人

庄司二人

光王二人

主丸四人

用丸四人

徳永二人

元行二人

立田二人

三郎太郎二人

太郎大夫二人

吉光二人

政枝二人

安氏十人

三郎丸二人

原木二人

秋松二人

右、先例如件、

元亨四年四月廿二日

1399

『享』
谷山五郎入道覺信代俊忠謹弁申

欲早被停止式部孫五郎入道之慶濫訴、被行謀作奸訴罪

科、薩摩國谷山郡内山田・上別符兩村惣地頭職沽却事、

副進

一通 道慶放券狀 正安五年三月廿三日

右、如道慶濫訴狀者、當郡司覺信非分押領之間、道慶就

1400

訴申子細、云関東、云鎮西、令拜領度々御下知云々、此條道慶・覺信等、相並給御下知之之間、非道慶一人所給儀之上者、不及委細欵、同狀云、正安四年爲請所、限拾捌ヶ年、所去給覺信也、年記過之間、自去年擬致所務之處、覺信及違乱之條無道也、年記違期之上者、被停止濫妨、欲乱給押領物云々、此條希代奸謀申狀也、以去正安五年三月廿四日、爲錢貨佰貫文米拾石代、令入置彼地頭職於本錢返之條、道慶沽券明鏡也、而稱正安四年十月廿日自身沽券狀案文、或引上年記、或限拾捌ヶ年沽渡之由掠申之條、無比類謀計也、云奸訴、云謀作、其咎爭可廻時日哉、然早被經急速御沙汰、任被定置之旨、爲被行罪科、粗披陳言上如件、

元亨四年六月 日

【統目裏判】(花押)

逐申候、

故殿御借狀一見仕候了、是非文書撰候て可申之由仰候、重恐々謹言、

【正文】蒙仰候山田村・上別符讓狀正文事、披露仕候之處、故入道文書、少々者三郎兵衛尉方にも候、是にハ候やらん、

不存知候、文書中撰候て可申之由仰候、恐々謹言、

七月二日

藤原忠幸(花押)

謹上 山田殿

御返事

1401

【正文小根占地端氏藏】

建部氏字又、今者死去子息祢寝弥次郎清種申、大隅國祢寝院南

俣内田伍段郡本馬門、東依島貳町壹段・在家肆字南入道事、

右、任去年十二月七日関東御下文、可令氏女跡領掌之狀如件、

元亨四年七月五日

修理亮平朝臣(花押)

1402

【羽島氏文書】

若松彦太郎忠兼代忠金与國分二郎友貞相論、薩摩國成枝名羽嶋浦田島山野等事、

右、訴陳之趣、子細雖多、所詮、忠兼則當浦者、忠兼相傳所領也、依有子細、割分田地參町、令契約友貞之處、令押領證文外田島之条、無謂之由訴之、友貞亦於件田島山野等者、忠兼沽却之間、買取之、知行之旨陳之者、當

「正文在文庫中伊作家文書」「伊作家宗久譜中正文在卷本トアリ」

嶋津庄内薩摩方伊作庄・同日置北郷下地田畠山野河海
檢断所務、領家一乘院雜掌左衛門尉憲俊与地頭大隅左
京進宗久代沙弥道慶、下地中分以下和与條條事、

伊作庄條條

一 下地中分、以伊与倉河爲南方堺、互可令一圓進止事、

右、河者、自伊作庄東堺山但杖立峰以西者伊作庄領、向于
家以東者谷山郡内

西流融庄内之最中、所流入同庄入來名湊海也、而以彼

河爲兩方堺、河以北者爲領家分、河以南者爲地頭分領、

互無違越、田畠山野河海檢断以下條條所務、一圓可令

進止也、次於堺河者、用水漁等者、相互不及制止、至

向後類渡分并河堰者、兩方不可有其沙汰焉、

一 領家年貢并地頭用米、同加徵米未進事、

右、年貢地頭用加徵米等、兩方共致未進之由、相互雖

及相論、依下地中分、止訴訟之上者、向後更不可及沙

汰矣、

一 當年田畠作毛以下事、

右、作毛以下所務、和与中分之上者、河北者領家一圓、

河南者地頭一圓知行、相互不可有違乱者也矣、

一 領家方庄廳・同宿神、并地頭方諫方社・地頭所・同

浦内田地參町令契約友貞之處、寄事於彼證文、令押領契

約外田畠山野等之条、無謂之由、忠兼雖申之、如忠兼元

應元年十一月一日狀者、薩摩國薩摩郡羽島浦田畠山野等

除若松
名水田、直錢三百貫文仁沽渡友貞訖、於關東御下知以下本

證文等者、依爲連券、封案文裏、副渡云、證文炳焉之處、

捧自由謀案、論申之条、難被許容旨、友貞所申、非無子

細之上、至彼沽券狀者、爲忠兼自筆之由、友貞申之處、

爲謀書之旨、忠兼依論之、於引付之砌、可書校之由、雖

被仰、不遂其節之条、頗承伏欵、加之、於貞應二年四月日

關東御下知、寬元四年十月廿九日六波羅下知狀、同元年

九月廿三日、弘安五年十二月二日、同六年八月日忠茂・

忠重・忠永等讓狀案者、忠兼加裏書、所相副沽券也、彼

裏書者、爲申口資家手跡之由、友貞申之處、資家承伏訖、

所副渡具書等無相違之上者、沽券狀又不及子細欵、且當

浦爲私領之条、前々其沙汰訖、然則至件田畠山野等者、

停止忠兼濫訴、任沽券狀、可令友貞領掌矣、次以實書、

号謀書俗事、任式目、【貞永式目一筋見合ノシ】可有其沙汰焉者、依仰下知如件、

元亨四年八月十日

【鎮西探題也】
【英時】
修理亮平朝臣(花押)

被管輩住宅等事、

右、庄廳・同宿神社等者、於河以南在之、諏方大明神

社・地頭所・同被管輩住屋等者、現在河以北、而下地

中分之上者、明年二月中仁、庄廳・宿神等者、取渡于

河北、又至諏方社并地頭所・同被管輩住宅等者、可取

移河南、若過約月不取渡者、互可被申行罪科也焉、

一 宇佐宮・同弥勒寺并大隅正八幡宮造營等事、

右、所役等者、兩方寄合、各可致均等沙汰矣、

一 宇佐宮・同弥勒寺造營析米錢中分以前未進事、

右、未進等者、下地中分之上者、兩方共付知行所領、

可致其沙汰也、

一 異國警固并宮崎石築地用途事、

右、於警固役者、任先例、可爲兩方沙汰、至石築地用

途者、兩方寄合、可致等分沙汰矣、

一 本所御分課役事、

右、本家御所造營御修理・淨光明院修理・興福寺造營

寺役以下色々御公事析物等、下地中分之上者、可爲領

家分役矣、

一 閔東御公事課役事、

右、將軍御所用途并流人事、中分之上者、可爲地頭沙

汰焉、

日置北郷條條

一 兩方堺事、

右、堺者、融于東西所立也、仍西者自帆湊之海、向東

至于河登苦田橋、自彼橋南假屋崎東道於、世戸江千手

堂前能道於東江、自久留美野之大世多和、向東至于伊

集院堺、但七曲通也兩方堅守此旨爲堺、北者爲領家分、南

者爲地頭領、相互無違越、山野河海檢断已下所務、各

可令一圓進止之條、同于伊作庄矣、

一 當年作毛以下所務事、

右、中分之上者、相互可令停止其緯之條、同于伊作庄

焉、

一 宇佐宮・同弥勒寺并大隅正八幡宮造營等事、

右、所役等者、兩方半分之段、同于伊作矣、(イ、ウ)

一 宇佐宮・同弥勒寺造營析米錢、中分以前未進事、

右、所役下地中分之上者、兩方就知行、可致沙汰之条、

同于伊作庄矣、

一 異國警固并宮崎石築地用途事、

右、所役等、同于伊作庄矣、

一 本所御分課役事、

右、所役等、同于伊作庄矣、

一 関東御公事課役事、

右、所役、同于伊作庄矣、

以前條條、所和与如斯、此外條條相互雖番訴陳、就和与止訴訟之上者、不及異儀、兩方堅守此狀、無違越可致其沙汰也、若條條内、雖爲一事、令違犯者、不日可被申行罪科也、仍爲未代明證、和与中分之狀如件、

元亨四年八月廿一日

地頭代沙弥道慶(花押)

雜掌左衛門尉憲俊(花押)

〔右裏書〕

一爲後證、各加判矣、

正中二年十月廿七日

實顯(花押)

〔右同、統目裏判〕

能定(花押)〔

1404

〔伊作家文書在文庫〕〔伊作久長譜中正文在卷本トアリ〕

伊作日置御文書事

合

一 文治寄進狀案

一 建長御下知案

一 伊作下司有純起請文案

一 日置下司弘純起請文案

一 伊作日置下司系圖

已上五通者進之畢、

一 立券庄号文書案

一 雜掌訴狀案堺事
但南

一 阿多北方地頭請文正文

一 寶治御下知案、正文者、伊作下司帶之

已上四通、追可進之、

右、所進地頭御方也、

元亨四年八月廿一日

憲俊(花押)

1405

『比志島氏文書』

大隅三郎忠國申負物事、去六月七日御教書如此、早任被仰下之旨、可被注進所領分限候、仍執達如件、

元亨四年八月廿三日

沙弥(花押)

比志嶋孫太郎殿

1406

『池端文書』

〔父頼重〕はうふよりしけのゆいりやう、おほすみのくにねしめのみなみまたもちまつみやうのうち、三のつほいけのしよ

1409

「伊作家文書在文庫」「伊作久長譜中正文在卷本トアリ」
薩摩國伊作庄与阿多北方境相論狀等事

一 本解狀案文保三年六月日

一 立券狀要段案文治四年十月日

一 御教書案元應元年九月廿日

一 北方地頭請文正文元應元年十一月三日

一 使節在國入道請文正文元應元年十一月五日

一 阿多地頭代見佛請文案元應二年二月八日

已上

右、狀等者、自領家任被仰下之旨、所撰渡于地頭御方之

狀如件、

元亨四年十一月九日 雜掌承信(花押)

1410

『正本在權執印』

今度驗動之間、被進子息於代官候之由承候畢、仍執達如

件、

元亨四

十一月十日

貞久在判

新田宮權執印殿

1407

『高岡土人河上氏文書』

依關東御早馬事、市來院河上又次郎家久令馳參候、以此

旨、可有御披露候、恐惶謹言、

元亨四年十月廿日

大藏家久

進上 御奉行所

承了(花押)

1408

『延時文書』

依京都御事、去五日亥關東御早打下着之間、薩摩國御家

人延時又三郎忠種馳參候、以此旨、可有御披露候、恐惶

謹言、

元亨四年十月廿一日

平忠種

進上 御奉行所

承了(英勝)(花押)

1411 『比志島氏藏文書』 「在道鑑公御譜中」

今度騒動之間、參津事承了、仍執達如件、

元亨四

十一月十日

貞久(花押)

比志嶋孫太郎殿

(忠實)

1412 『公』

いさゝの御□申へく候、

ふんこの三郎□方へくんせいの事、明後日へこれへ□

候へく候、それまで御まち候へ、悦入候□ふん御返候へ

、なんきたるへく候、なをく明後日にはせいつくへ

く候、構くそれまで御まちあるへく候、あなかしく、

十一月廿日

(貞久)
道鑿(花押)

比志島孫太郎殿

1413 『山田氏文書』

中村兵衛四郎入道了願申、薩摩國伊集院原田垣本田年貢

事、去一日御教書・重訴狀如此候、早任被仰下候之旨、

承左右、可注申候、恐々謹言、

元亨四年十一月十五日

平爲忠(花押)

謹上 式部孫五郎入道殿

1414 『正文』 嶋津式部孫五郎法師法名与石谷右衛門三郎法師法名相

論、薩摩國伊集院三小山原内中原与良金知行原堺事、

右、就相論、擬有其沙汰之處、今年二月廿六日兩方出和

与狀畢、如道有狀者、於良金知行原者、道慶領掌之、至

中原者道有相傳之、而就彼堺、雖及上訴、以和与之儀、

自富松北中野猿走、定于向嶋北上鼻崎畢、向後互不可有

異論云々、道慶狀旨趣同前者、此上不異儀(及腕之)、彼地武家成

敗之条、前々其沙汰畢、然則、相互守彼狀、可領掌矣者、

依仰下知如件、

元亨四年十一月廿九日

(英時)
修理亮平朝臣(花押)

1415 「在文庫伊作家文書中」 「伊作家二代宗久譜中正文有之トアリ」

嶋津庄薩摩方日置新御領田島荒野檢断所務等、領家一

乘院家雜掌承信与地頭大隅左京進宗久代道慶、下地以

下和与中分事、

一 下地中分、以八幡御前放生會馬場爲兩方堺、互可一

圓進止事、

右、馬場者、融東西之間、迄同社乃前後、以彼馬場之

融爲堺、馬場以南者領家分、馬場以北者爲地頭分、檢
断以下之、地、相互無違越、可令一圓進止者也矣、

一 領家年貢并地頭用米・同加徵米未進事、

右、年貢地頭用加徵米等、兩方共未進之由、雖申之、
下地中分上者、向後更不可及沙汰矣、

一 當年田畠作毛以下事、

右、作毛以下所務和与中分之上者、云領家方、云地頭
方、相互不可有違乱焉、

一 宇佐宮・同弥勒寺并大隅正八幡宮造營等事、

右、所役等者、兩方寄合、各可致均等之沙汰矣、

一 宇佐宮・同弥勒寺造營新米錢、中分以前未進事、

右、未進者、下地中分之上者、兩方共付知行所領、可
致沙汰也矣、

一 異國警固并宮崎石築地用途事、

右、於警固役者、任先例、可爲兩方沙汰、至石築地用
途者、兩方寄合、可致等分沙汰矣、

一 本所御分課役事、

右、本家御所造營御修理・淨光明院修理・興福寺造營
寺役以下色々御公事新物等、下地中分之上者、可爲領

家分役矣、

一 関東御公事課役事、

右、將軍御用途并流人事、中分之上者、可爲地頭沙
汰焉、

以前條々、和与如斯、此外所務以下、和与中分之間、相
互止訴訟畢、兩方共守彼狀、更不可令違犯者也、仍爲後
代明證、和与中分狀如件、

元亨四年十二月二日

地頭代沙弥道慶(花押)

〔石裏書〕
〔爲後證、各加判矣、〕
雜掌法橋承信(花押)

正中二年十月廿七日

〔續目裏判〕
實顯(花押)

〔右同〕
能定(花押)〕

1416 『入來永利氏文書』

永利如性与山田八郎次郎道政本名道能相論、薩摩國薩摩郡

内石上村草帳名堺荒野事、

右、訴陳狀具書枝葉雖多、所詮、如性則當郡者、建久七
年立券之時、云如性所領若松名内石上村、云道政分領草
帳名母薩摩堺分明也、所謂、如彼抄帳者、石上村四至、東本

御領加那毛西羽太、南馬渡并榎迫、西草帳東迫、北公田云云、薩摩迫四至、東石神島、西大路、南田渡橫大路、北川云云、而道政相語守護代阿忍、切上往古堺馬渡路、自元應元年令押領石上村南依荒野之上者、仰使節被檢見堺、可被付打越分限之由訴之、道政亦時吉内草帳名者、武家進止之地也、石上村者、本所領弁濟使名勸童丸内也、於本公檢者、時吉名惣領主在國司入道道雄所持之間、不能備進、如性指申四至堺、爲草帳名之條明鏡也、如性押領件荒野内島地屋敷等之間、雖含愁訴、依爲無力、點止之處、遮自科致軒訴坎、於馬渡路并榎迫等者古跡也、遂檢見、被召繪圖、可被糺明本跡之條、尤令庶幾之旨、陳之者、石上村南堺者、爲馬渡・榎迫之條、道政無異論、仍彼荒野者、爲石上村内坎、爲草帳名内否、莅論所、遂檢見、以繪圖可注進之旨、被仰澁谷弥平三爲重・同又次郎重幸等之「處、如今年六月十二日爲重請文者、莅件論所、遂檢見之處、道能令出對於彼論所、号往古堺馬渡・榎迫、如差申者、無其證跡、此上者、任立券帳、件論所爲石上村内之旨見候、仍進上繪圖云云、如同十八日重幸請文者、如性所立申之馬渡者、在所分明候、道能差申之馬渡・榎迫者、無證跡候之間、爲石上内之由存候、仍繪圖進上

云云、各起請詞在之、如爲重等所進之繪圖者、馬渡・榎迫者、爲論所荒野以南坎、隨而、令符合于如性所進建久抄帳等畢、加之、爲如性被押領田島之由、道政自稱之間、還顯如性知行證跡坎、但道政者、當村爲本所領勸童丸内之由、雖稱之、不備進支證、如性者、依殺害不實、先年被收公所帶、菊池三郎以下爲勲功賞令拜領畢、而於當村者、守護令勸落于闕所注文之間、漏御下文之刻、新給人就訴申、被尋問證人等之刻、爲如性私領若松名内之條、依無相違、欲被裁許之最中、如性還補之間、如元知行畢、而又道政相語阿忍、立還押領之由、如性令申之處、道政不帶支證、只寄事於本所、以胸臆擬遁申之條、非無軒曲坎、然則於件堺荒野者、守建久立券抄帳、爲若松名石上村内、可令如性領知者、依仰下知如件、

元亨四年十二月十六日

修理亮平朝臣(花押)

(本文中「」内、誤リテ一四三二号文書ノ後ニアレド、本文中ノ正シキ位置ニ挿入ス)

安樂寺領薩摩國之分寺領下地并年貢事

右、於鎮西、以雜掌雖番訴陳、所詮、每年捌拾伍石并公
事用途拾陸貫
伍百文、籾文革二枚、節供用途等、任先例、可致
沙汰之由、助次郎友貞所出狀也、然者永代不可有子細之
由、可申旨候也、仍和与之狀如件、

正中元年十二月晦日 沙弥正行奉

1418 『全』

薩摩國之分寺領御年貢事、京進捌拾伍石并公事用途十六
貫伍百文、籾文革二枚、節供用途、任承元之請所例、每
年無懈怠、可被沙汰候、若背此請文、致未進懈怠候者、
何様罪科可被申行、仍爲向後請文如件、

正中元年十二月晦日 惟宗友貞在判

1419 「和泉忠氏譜中」

元亨五年乙丑前年十二月改元、
正中是歲二年也、閏正月二十二日、
道鑑公狩巡封疆、發自薩摩郡、歷宮里・串木野・南郷・日
置莊・伊作莊・知覽院・穎娃郡・給黎院・谷山郡、至鹿
兒嶋郡、謂之國廻狩、即今
關狩、時實忠從、其他從者數百人、
而籍從卒自非公等、無用御字、獨實忠則特載泉殿、如其

言御馬三疋、御厩者五人、御雜色二人、御力者二人、實
可以觀見敬重也、

1420 『正文在山田直五郎家』
「引返シ候ニ」
「殿御國廻共人数」

國廻狩御共人数事

御分

御力者四人 御厩者十二人 御馬十疋

御物夫衆

福崎八郎 下二人 馬一疋
【建武四年三月廿上状ニ福崎五郎見ニ、此類屬ナラン】

田中入道 下一人 馬一疋

乙鶴御前 御舍弟 下三人 馬一疋

市來御前 同 下三人 馬一疋

殿原

東條藤二郎 上下三人 馬一疋

鳥羽孫七 上下三人 馬一疋

鳥羽右衛門二郎 上下三人 馬一疋

鳥羽弥六 上下二人 馬一疋

御中間

御弓袋差 下一人 馬一疋
【ユタイサン】

【三列ノ名ノ永田十家ニ弓袋サシノコトアリ】
永田太郎 下一人 馬一疋

宗五郎 下一人 馬一疋

一惣家子并殿原次第不同

【山田氏也、山引合戦に討死ナリ】
式部彦七 上下廿七人 乘馬六疋 雜駄三疋

【貞久公御前ニ隨テ大友家ヨリ来タト云小田原此人カ、然レバ彈正忠ナラン】
小田原入道 上下十人 乘馬三疋 雜駄一疋

式部小三郎

今村七郎 上下七人 乘馬一疋 雜駄一疋

【兵衛入道亦阿カ】
酒勾兵衛入道代彈正左衛門尉 上下卅人 乘馬十一疋

【久兼入道兼阿カ】
本田孫二郎 上下廿五人 馬十一疋

益山入道 上下八人 馬三疋

中條六郎 上下廿五人 乘馬七疋 雜駄二疋

【富カ、然レハ兼阿ノ父富内左衛門親兼入道親事カ】
本田藤内左衛門尉 上下六人 乘馬一疋 雜駄一疋

直木彦二郎 上下廿人 乘馬七疋 雜駄二疋

本田新兵衛尉 上下十人 馬二疋

仲四郎 上下十人 乘馬二疋 雜駄一疋

市來崎彦六 上下四人 馬一疋

本田四郎兵衛尉 上下六人 馬二疋

源藤左衛門尉 上下八人 乘馬一疋 雜駄一疋

本田又四郎 上下五人 乘馬一疋 雜駄一疋

井入道 上下五人 馬一疋

【武光氏コトカ】
高水彦九郎 上下五人 馬一疋

執行殿 白拍子一人 上下四人 馬一疋

一泉殿御分

御馬三疋

御厩者五人 御雜色二人 御力者二人

松房御前御分

御馬二疋 御厩者三人 御雜色一人

又三郎殿

御馬三疋 上下五人

殿原分

新田又四郎 馬一疋 下二人

式部源四郎 馬一疋 下一人

本田又六 馬一疋 下三人

石塚平三郎 馬一疋 下一人

谷口二郎三郎 馬一疋 下二人

一大隅五郎兵衛尉馬七疋 上下廿五人 雜駄二疋

【山田氏文書元徳二年三月十四日左兵衛尉助久請文ニ、当惣領主大隅助

三郎入道助久跡云々トアリ、亦貞和二年十一月今川了俊ヨリ道整公へ

被進候状ニ、大隅助三郎入道々忍トアリ】

一大隅助三郎【忠國殿】 馬八疋 上下廿五人 雜駄二疋

1421

『見乎較島日向入道松岳日記』

大岳の御世を継ぎたまふハ節山さまと申、その御兄弟ニ

他腹はらニ式部大夫殿と申て御座候、それこそ御當家の

御先祖ニ而御座候、それを分限ニつけ御申あらんとて、

一 猿渡新左衛門尉 馬^三一疋 雑駄一疋

一 猿渡藤三郎 馬^三一疋 雑駄一疋

一 姉崎八郎 馬^二一疋 雑駄一疋

一 猿渡藤四郎 馬^二一疋 下三人

一 伊藤入道 馬^一一疋 さう駄一疋

古庄縫殿允殿人數事 馬^上十人 馬^下二人

脇殿 下一人 馬一疋

御くにまわりかり御入所しゆくつぎの事

一 はん ^{【國】} 狩 二 八人 ^{【宮】} ミヤさと

三 八人 ^{【單】} 木野 四 八人 ^{【南】} 郡今ノ永吉事

五 八人 ^{【日】} 置 六 八人 ^{【伊】} 作 いさくの庄

七 八人 ^{【知】} 寛 八 八人 ^{【頭】} 雄 那のこほり

九 八人 ^{【給】} 業 院 十 八人 ^{【谷】} 山 たにやまのこほり

十一 八人 ^{【鹿】} 兒 橋 郡 かこしまのこほり

元亨五年後正月廿二日

1424

『公』

菅三位家雜掌宗清謹言上

欲早被經御 奏聞、被下和与論旨於武家、安樂寺領薩

摩國々分寺下地并年貢事、

1422

『應永記』

同卅四年丁未、属無爲、依代始國廻之無滯夏、去程ニ年

暮て應永モ卅五天ニ成行計利、

1423

『國分寺文書』

天満宮安樂寺雜掌靜祐申、薩摩國分寺下地事、重申狀如

此、不終沙汰の篇云云、不日可參決、仍執達如件、

正中二年閏正月廿九日

北條英時 修理亮御判

國分助次郎殿

副進

一通 先度綸旨(案)

一通 領家菅三位家和与御狀

一通 友貞請文

右、當御領者、菅三位家御相承之地、爰御家人國分助次郎友貞募武威、有限御年貢公事等抑留之間、先雜掌友任申成綸旨於武家及鎮西、沙汰之處、友貞令札返年々抑留物、每年御年貢捌拾伍石、公事用途拾陸貫伍百文、簾文革二枚、節供用途等、任承元請所之例、無懈怠可致沙汰之由、進請文之間、被出領家和与御狀畢、然者、早被下知与綸旨於武家、於鎮西申給和与御下知、備後證龜鏡、爲全來御年貢、恐々言上如件、

正中二年二月 日

1425 『公』

安樂寺領薩摩國分寺領下地并年貢事

先度申下 綸旨於武家、致沙汰候之處、友貞望申和与之儀候之間、令承諾候畢、且雜掌解副具如此候、向後可存其旨由、被下綸旨於武家候之様、可有申御沙汰候早、恐惶謹言、

二月晦日

藏人次官殿

(菅原)長宣

1426 『國分寺文書』

菅三品雜掌宗清申、薩摩國々分寺領家与友貞和与事、今年三月三日綸旨、(西園寺實德)内大臣家御消息副具如此、子細載狀候、仍執達如件、

正中二年三月十三日

武藏修理亮殿

(範貞)左近將監御判
(貞將)前越後守御判

1427 『國分寺文書』

天滿宮安樂寺雜掌靜祐申、薩摩國々分寺下地事、重申狀如此、國分次郎背度々催促、不終沙汰之篇云云、尋問實否、(敬)故起請之詞可注申、仍執達如件、

正中二年三月十八日

澁谷新平二殿

(重基)修理亮御判
『鎮西探題北条実時』

1428 天滿宮安樂寺領薩摩國々分寺雜掌靜祐重々言上

當寺前預所助二郎友貞乍請取訴狀、令遁避陳狀、刺被

1430

安樂寺領薩摩國之分寺和与事、繪旨副具書如此、子細見

『全』

三月二日

勅解由次官光顯上

安樂寺領薩摩國之分寺和与事、菅三位狀副雜掌申
狀具書如此、
子細見狀候欵、可被仰遣武家之由、天氣所候也、以此
旨、可令洩申給、仍言上如件、光顯誠恐頓首謹言、

1429

『全』

正中二年三月 日

右、友貞恐無理不終沙汰之篇、下國之間、就訴申、去聞
正月廿九日雖被召符成、于今不參對之条、罪科難遁、所
詮、早仰于御使、被成御教書、被召上友貞、被召出陳
狀、任一圓神領支證、爲蒙御成敗、重言(件力)上如此、

副進

一通 御教書案

成御書下、雖被立御使、猶以不出對陳狀、結句下國間、
就訴申、今年閏正月廿九日雖被成召府(卷)、于今不及請文
散狀上者、早仰于御使、被召上友貞、被經次第御沙汰、
欲蒙御成敗子細事、

1432

『入來院氏臣岡元氏文書』

備前國豊原庄雜掌宗朝申、親經・範平以下輩違 勅狼藉
事、重訴狀具書如此、度々加下知之處、不承引、重追出
名主宗元・重延以下、致追捕狼藉云々、大甘彦六郎相共
莅彼所、見知狼藉之実否、載起請詞可被注申也、仍執達

(本文書ノ後ニ、一四一六号文書ノ「内ニ移セル部分アリ、省略ス」)

被下御事書之上者、不可

1431

『入來永利氏文書』

永利如性_{有禪}与山田八郎次郎道一_{能字}相論、薩摩國薩摩郡

石上村荒野野堺打越事、

右、就訴陳狀、有其沙汰、仰使節澁谷弥平三爲重・同又
次郎重幸、被遂檢見之處、如性所進繪圖与兩使注進繪圖
令普合之間、於件堺者、去年元亨四十二年二月十六日被返付

狀候欵之由、内大臣殿可申之旨候也、恐惶謹言、
三月三日
沙弥靜祐西園寺家

謹上 越後前司殿
(北条貞時)

如件、

正中二年三月廿三日

左近將監(花押)

前越後守(花押)

澁谷平六殿

1433

『國分寺文書』

「御使清敷殿ヨリ被催促云云、宰府五月二日到来、自薩摩」

天満宮安樂寺雜掌申、薩摩國分寺下地事、去三月十八日御教書并訴狀如此、早任被仰下之旨、可被申明分左右、仍執達如件、

正中二年四月三日

平御判

國分助次郎殿

1434

「御文庫廿二番箱一巻中」

「くわんとうちんせいの御けうそらの正うともなり、

正中二四十一」

くわんとうちんせいの御けうそらのもくろく

一つう さかミのかうのととの御けうその正もん、いろ

く 事、嘉元三六廿

一つう 御申しやうのあんもん

一つう さいせうおんしとのへしんもつまいらせらるゝ

時の御返事の正もん

一つう ちんせいかつさの入道殿御けうその正もん 正安二
十一廿六

くわんとう御けうそのあんもんあり、ふこのく

にのけんたんうへの御つかいの事、

一つう しゃうのすけとのゝ状の正もん、御くたしふミ

申なざるゝよしの事、

一つう 同人のしゃうの正もん、いさくへき御給のよろ

こひ申さるゝ状なり、

一つう 大殿御すけ御めんのくわんとう御けうその正も

ん

一つう ちんせいむさしの御しきやうの正文元亨三三五十

一つう 御申しやうのあん御をん御所まうの事、

「此文書、道鑑公御譜中ニ在リ」

1435 「山田氏系圖」

五代 忠經

初忠能 諸三郎丸 大隅式部諸三郎 九郎左衛門

尉 加賀守

讓渡 嫡子諸三郎丸所云々、左ニアリ、

『山田文書』

讓渡 嫡子諸三郎丸所

薩摩國谷山郡内山田・上別符兩村地頭職以下事

右、所領者、相副亡父式部太郎忠實讓狀并関東御下知以下
證文等、限永代、讓与諸三郎丸畢、但上別符内よこて・こま
はしり・くきのゝ、以上三ヶ所四至界各見取帳圖、者、次男かめ三

郎丸にゆつりたふところ也、諸三郎無男子者、かめ三郎
か子仁讓へし、かめ三郎無男子者、諸三郎か子仁讓へし、

諸三郎并かめ三郎兩人共をの子なくは、雖爲女子、一門
の中に令相嫁仁可令相傳也、若又兄弟共無妻子ハ、一門
の中に志あらん人を取養て、ゆつりたふへし、爰彦六事、
もとより不調の人たるうへ、對于道慶、しゆくゝの現不忠
之間、永令義絶畢、迄于彦六か子と孫と、雖爲段歩、道
慶之跡を不可給与、於令背此旨子共者、道慶所領不可知
行、仍爲後日、以自筆所書与讓狀如件、

正中貳年四月十九日

山田家代初郎丸式部孫五郎宗久
沙弥道慶(花押)

『全』

讓渡 嫡子諸三郎丸所

薩摩國伊集院并給黎院内田園等事

一田地区

壹町 大道田 柳田 山下田 こは田 同院福山村

内但くつれわたり年荒不河成在之

四段 馬渡のつゝみより上、同院古里内不作有之

八段十 藤部桑原内山さきこふち田給黎院内年荒不

一園分

壹所 古江園同院久徳名内但此内荒

壹所 桑のさこ同前但荒野同前

壹所 但新開田在之 福山村同院内

右、田園等、道慶相傳知行之間、相副次第證文并鎮西御
下知等、限永代、讓与諸三郎丸畢、他さまたけなく可知行
之也、爰彦六事、もとより不調の人たるうへ、對于道慶、
しゆくゝの現不忠之間、令義絶畢、迄于彦六子と孫と、
雖爲段歩、彼田園等不可給与、於令背此旨子共者、道慶
跡を不可知行、仍爲後日、以自筆所書与讓狀如件、

正中貳年四月十九日

沙弥道慶(花押)

『山田氏文書』

さつまの國谷山郡内山田・上別符兩村地頭職、但かめ三
郎にゆつる分を除て、諸三郎にゆつりあたへ畢、このち

ハわうしやくの所領也、ゆめくわけゆつるへからす、

男子壹人にゆつるへし、男子なくへ、かめ三郎知行すへ

し、又わけゆつらんをいては、道慶かゆつる所壹所も

知行すへからす、諸三郎かへすく^くにいたるまでも、此

状をかたくまほるへし、若いはいするもの出来へ、かめ

三郎かへすく^くにいたるまでも、おさへ知行すへき也、

仍末代のために、せうもんの状如件、

正中貳年卯月十九日

道慶宗久(花押)

1439

『國分寺文書』

安樂寺領薩摩國分寺友貞乱妨事

菅三位狀(長寛)副解狀如此、

子細見狀候欵、可尋沙汰之由、可

被仰遣武家之間、天氣如此、仍言上如件、宗平恐^く謹言、

五月十二日

權中將宗平御判

進上

右大將殿(西園寺実衡)

1440

『伴謙兼尚傳』

正中二年乙丑、初兼尚受職田百七十町於守護代盛季即此盛秀

及稅所介篤胤、而領之如故、然有餘田、及父尊阿請之兩

使、兩使以告探題、不報尋、盛貞等復侵我所受田地、至

殺尊阿、尊尚怒乃以聞探題、時方北條武藏修理亮英時來

居探題、告諸鎌倉、至是六月二十日、北條高時・北條貞顯

承幕府旨、使英時命盛季等、按察虚實、以限十月報知之、

1441

『日本末吉檢見崎氏家蔵』

大隅國肝付郡弁濟使五郎太郎兼尚申所職名田□并父尊

阿殺害由事、訴狀如此、任元應二年三月十一日下知、元

亨三年二月守護代盛季并稅所介篤胤入部之、地頭尾張前

司高家代押領實否、餘田有無遂檢見、地頭代盛貞承諾分

百七十町者□打渡之、餘田段者兩使雖注進之、于今不被

左右之、□兼尚連と訴申處、剩殺害尊阿、押領所沙汰付

之田地内云、事實者、招重科欵、於殺害段者、各別所

有其沙汰也、至押領田地及餘田事者、盛季進注文云、

嚴蜜爲有沙汰、來十月中可被執進之盛季等注進狀也者、

依仰執達如件、

正中二年六月廿日

相模守高時在判

修理權太夫同貞顯

武藏修理亮殿北条英時

1442

「山田氏文書」

和与

谷山五郎入道覺信与薩摩國谷山郡内山田・上別符兩村地頭式部孫五郎入道・慶相論、當村所務條・沙汰事、

一 兩村内野島所當以下地頭得分等覺信同令抑留由事、

一 同村内宮園并久吉園桑代以下地利物、覺信同令抑留

由事、

一 同村地頭職請所過年記否、爲本物返否相論事、

一 寄事於領家所務、道慶令抑留郡司得分由事、

一 道慶令抑留質人并錢貨(貨之)以下損物等由事、

右、於兩村者、去弘安十年十月三日雖被成関東御下知、

就所務相互申子細之間、正安二年七月二日、道慶於鎮西

重預御裁許之、而不被糺返所被載彼御下知之野島以下地

頭得分等之間、連々雖訴申、云地頭綺、云當村條々訴訟、

以和与之儀、一向令停止之、有限之加徵米地頭米拾伍石、

但如正安三年取帳目錄者、雖爲拾肆石參斗捌舛、就和与

拾伍石定之畢、次野島地利物參石并麥地子壹石伍斗是等者舛

野島、此外檢断以下色々得分等代錢合拾肆貫文、每年十一

月中仁無未進可被致沙汰之由、被契約之間、止地頭綺者

也、但過約月者、地頭職如本可知行之、次於地頭米者、

任先例、於郡司所倉可被勘渡、至野島并所當等者、於當

村可直納之、次件得分等者、伊集院伊作兩所之間、以當

村百姓可被運送、若背此狀致違乱者、自今年年丑至于辰年、

令返与來納四ヶ年分、可知行也、此上者更不可有改變之

儀、仍爲後證龜鏡、和与狀如件、

正中二年六月一日 沙弥道慶在判

〔上書有之〕
〔山田・上別符兩村地頭所務和与狀案地頭方分〕

1443 和与

薩摩國谷山郡内山田・上別符兩村地頭式部孫五郎入

道・慶与谷山五郎入道覺信相論、當村所務條・沙汰

事、

一 寄事於領家所務、道慶令抑留郡司得分由事、

一 道慶令抑留質人并錢貨以下色々損物等由事、

一 兩村内野島所當以下地頭得分等覺信令抑留由事、

一 同村内宮園并久吉園桑代以下地利物、覺信同令抑留

由事、

一 同村惣地頭職爲本物返否、過請所年記否相論事、

右、於兩村者、去弘安十年十月三日雖被成関東御下知、

就所務相互申子細之間、正安二年七月二日、覺信於鎮西

重預御裁許畢、而不被糺返所被載御下知之桑竿失以下得
分等之間、連々雖訴申之、以和与之儀、一向停止惣地頭
綺之由、被契約之間、止當村條之訴訟、有限之加徵米頭

米斗 拾伍石、但如正安三年取帳目錄者、雖爲拾肆石參斗
捌舛、就和与拾伍石定之畢、次野島地利物參石并麥地子

壹石伍斗是等者
外野島、此外檢断以下色々得分等代錢合拾肆貫
文、每年十一月中無未進、於當村可致弁、於地頭米者、

任先例、於郡司所倉可令勘渡也、次至野島并麥所當等者、
於當村可被直納之、次件得分等者、當國伊集院伊作兩所

之間、以當村百姓可運送之、但自今年丑至于辰年四ヶ年
分來納可被取之由、被申之間、致其沙汰畢、若背此狀、

十一月中令違期者、如本可被知行所務、此上者更不可有
改變之儀、仍爲後證龜鏡、和与狀如件、

正中貳年六月一日 沙弥覺信(花押)

〔右之裏書〕
〔爲後證、奉行人所加署也、〕

正中貳年十月十日

〔素藤左衛門三郎〕
藤原(花押)
〔太郎孫七郎信〕
三善(花押)〕

1444 〔山田氏文書〕

〔正文〕
嶋津孫五郎入道之慶申、牛馬以下事、重申狀如此、上野

平九郎入道禪意背度之知狀云々、尋實否載起請之詞、
可被注申、仍執達如件、

正中二年七月三日

智覽又四郎殿

〔英時〕
修理亮(花押)

1445 〔國分寺文書〕

國分次郎友貞謹言上

欲早就領家和談、被成綸旨・六波羅御施行上者、爲後
代、任和与狀、宛綸御下知、薩摩國之分寺領下地并年

貢事、

副准

一通 領家和与狀
〔菅原長宣家〕

右、國分寺領者、於下地者爲御家人令勤仕所役、至于年
貢者、承元以來爲請所、致其弁、先祖代之無相違令知行

之處、舍兄友任爲本所雜掌致謀訴之間、捧陳狀、欲明申
處、就領家和談、被成綸旨・六波羅御施行之上者、爲後

代、任彼和与狀、爲宛綸御下知、恐惶謹言、

正中二年七月 日 〔十八日被露之段畢〕
〔既力〕

1446 〔全〕

安樂寺領薩摩國之分寺雜掌宗清与國分助次郎友貞相論
當寺領下地并年貢事

右、就訴陳狀、擬有其沙汰之處、去年十二月晦日(田院)和与狀

畢、如菅三位家狀者、安樂寺領薩摩國分寺下地并年貢事、

於鎮西雖番訴陳、所詮、每年捌拾伍石并公事用途拾陸貫

伍百文・藤文革二枚・節供用途等、任先例、可致沙汰之由、

友貞所出狀也、永代不可有子細云云、如二月晦日不記

舉狀者、安樂寺領薩摩國之分寺領下地并年貢事、先度申

下論旨於武家、致沙汰之處、友貞望申和与之儀候之間、

令承諾候畢、且雜掌解副具如此候、向後可存其旨由、被

下論旨於武家候之樣、可有申御沙汰候畢云云、如三月二

日論旨者、安樂寺領薩摩國之分寺和与事、菅三位狀副雜

狀具、如此、子細見狀候欵、可被仰違武家之由、天氣所候

也云云、如同三日西園寺家御消息者、安樂寺領薩摩國分寺

和与事、論旨副具如此、子細見狀候之由、内大臣殿可申

之旨候云云、如今年三月十二日六波羅施行者、菅三位雜

掌宗清申、薩摩國之分寺領家与友貞和与事、今年三月二

日論旨・内大臣家御消息副具如此、子細載狀候云云、如

友貞去年十二月晦日狀者、薩摩國之分寺領御年貢京進捌

拾伍石并公年用途拾陸貫五百文・藤文革二枚・節供用途、

任承元請所之例、每年無懈怠可致沙汰候云云者、此上者
不及異儀、守彼狀、相互可致沙汰矣者、依仰下知如件、

正中二年七月廿五日

修理亮平朝臣判(英時)

彼御下知續目裏判者筑後殿御判、

私注、爲後證、奉行人所加判也、

正中二年七月廿五日

奈古三郎入道

春寂

聞奉行安富弥四郎入道

寂圓在判

1447 『公』

私注

領家御雜掌ニ天曆磨和与御下知、同和与狀被請取早、

被出御下知事者、七月廿九日御評定、同八月一日阿以

御越也、

私注文國分寺相論之事、

奉行立野殿許ニ上ル、

同月廿日御評定日、被賦一番御平之間、今日者公文齋藤

右衛門尉規雉他行ニヨテ、權公文大保六郎入道ト奈古三

郎入道以上二人出仕之間、任孔子、大保殿奉行人ニ定早、

仍被書御教書、同廿一日被下畢、其後召文二ヶ度之後、

使節莫祢郡司ニ被仰早、仍使節如散狀者、雖相觸友任、

構參津之由不及是非散狀云云、其後友任當參之間、御書

下兩度ニ及時、友任請文ヲ被捧之間、五月廿七日下午給ル、

其後安樂寺雜掌祐舜吏狀(支カ)ヲ進覽、其後陳狀遲之由、付

狀書下也、

六月廿三日御引付ニ友任庭中狀ヲ進覽、如狀者、友貞者

於其身御家爲役所地頭之由申之、然者預所職者、任領家

御下知、友任仁可被哉、(脱アラシ)

就中狀、同廿七日兩方可召決云云、而友任無出仕之間、

奉行入依被披露之、預所事可依下地相論之由、被仰下、

其後校申論旨・六波羅施行、被与奪一番御手、可被施行

旨被申之旨、同七月廿三日友貞庭中狀ヲ進ル、(以カ)

〔次下多ク破損ス〕

〔御系圖〕

七代「朱カキ」
師久「薩摩国守護人也」

上總三郎左衛門尉 大夫判官 從五位下 上總介

正中二年乙丑八月十六日誕生、母大友因幡守親時女也、

○子孫記別紙也、

1449 「和泉實忠譜中」

九月、前此實忠領南郷地頭職薩州永吉 旧曰南郷、時、於任所、算田

壹町、入租於八幡新田宮、曰御供米、自元亨三年佃者怠

貢、雜掌訴之、至是此月五日正中、探題英時致實忠書、

令速辨濟焉、

〔正文在水引宮内大檢校〕

八幡新田宮雜掌申當宮御供米事、訴狀如此、背下知狀云

、不日可致弁濟也、仍執達如件、

正中二年九月五日

(英時) 修理亮(花押)

下野三郎兵衛尉殿

〔正文在文庫中伊作家文書〕「伊作家二代宗久譜中正文在卷本トアリ」

嶋津庄薩摩方伊作庄同日置北郷雜掌憲俊与地頭大隅左

京進宗久代道慶相論所務事

右、如大友近江守貞宗去年十二月廿五日執進、同八月廿

一日連署和与狀者、嶋津庄内薩摩方伊作庄、同日置北郷下

地田島山野河海檢断所務、領家一乘院雜掌左衛門尉憲俊

与地頭大隅左京進宗久代道慶、下地中分以下和与條之、事、

伊作庄條之、一下地中分、以伊与倉河爲兩方塲、互可令

一圓進止事、右河者、自伊作庄東堺山但枝立峰以西者伊作庄領峰以東者谷山郡内、向于西流融庄内之最中、所流入同庄入來名湊海也、而以彼河爲兩方堺、河以北者爲領家分、河以南者爲地頭分領、互無違越、田畠山野河海檢断以下條之務、一圓可令進止也、次於堺河者、用水漁等相互不及制止、至向後類渡分并河堰者、兩方不可有其沙汰焉、一領家年貢并地頭用米同加徵米未進事、右年貢、地頭用加徵米等、兩方共致未進之由、相互雖及相論、依下地中分、止訴訟之上者、向後更不可及沙汰矣、一當年田畠作毛以下事、右作毛以下所務、和与中分之上者、河北者領家一圓、河南者地頭一圓知行、相互不可有違乱者也矣、一領家方庄廳同宿神并地頭方諏方社、地頭所、同被管輩住宅等事、右庄廳同宿神社等者、於河以南在之、諏方大明神社、地頭所、同被管輩住屋等者、現在河以北、而下地中分之上者、明年二月中仁、庄廳宿神等者、取渡于河北、又至諏方社并地頭所、同被管輩住宅等者、可取移河南、若過約月不取渡者、互可被申行罪科也焉、一字佐宮同弥勒寺并大隅正八幡宮造營等事、右所役等者、兩方寄合、各可致均等沙汰矣、一字佐宮同弥勒寺造營祈米錢、中分以前未進事、右未進等者、下地中分之上者、兩方共付知行所領、可致其

沙汰也矣、一異國警固并箱崎石築地用途事、右於警固役者、任先例、可爲兩方沙汰、至石築地用途者、兩方寄合、可致等分沙汰矣、一本所御分課役事、右本家御所造營御修理、淨光明院修理、興福寺造營寺役以下、色々御公事祈物等、下地中分之上者、可爲領家分役矣、一關東御公事課役事、右將軍御所用途并流人事、中分之上者、可爲地頭沙汰焉、次日置北郷條々、一兩方堺事、右堺者融于東西所立也、仍西者自帆湊之海、向東至于河登苦田橋、自彼橋南假屋崎、東道於世戸江、千手堂前能道於東江、自久留美野之大世多和、向東至于伊集院堺、但七曲通也、兩方堅守此旨爲堺、北者爲領家分、南者爲地頭領、相互無違越、山野河海檢断已下所務、各可令一圓進止之條、同于伊作庄矣、一當年作毛以下所務事、右中分之上者、相互可令停止其綺之條、同于伊作庄矣、一字佐宮同弥勒寺并大隅正八幡宮造營等事、右所役等者、兩方半分之段、同于伊作庄矣、一字佐宮同弥勒寺造營祈米錢、中分以前未進事、右所役、下地中分之上者、兩方就知行、可致沙汰之條、同于伊作庄矣、一異國警固并箱崎石築地用途事、右所役等、同于伊作庄矣、一本所御分課役事、右所役等、同于伊作庄矣、一關東御公事課役事、右所役、同于伊作

庄矣、以前條々、所和与如斯、此外條々相互雖番訴陳、

就和与止訴訟之上者、不及異儀、兩方堅守此狀、無違越可致其沙汰也、若條々内、雖爲一事令違犯者、不日可被申行罪科云々者、此上者不及異儀、守彼狀、可領掌之狀、依鎌倉殿仰、下知如件、

正中二年十月七日

相模守平朝臣(花押)
(高時)

修理權大夫平朝臣(花押)
(貞朝)

1452 「長谷場氏文書」

沙弥音阿子息左衛門尉盛貞讓与名田島等事

南郷末弘名并門真山園三ヶ所

鹿屋院弁濟使職事

右、件名田島等者、養子平馬大夫入道顯阿手より、本證文等を相副、音阿被讓与知行さをいなし、然盛貞爲音阿依忠教(老)深候、残一所讓与畢、若音阿子息等中、後日ゆつり狀ありとかすめ申、この下地(違)いらんけい(乱)はう(親)を仕候物(違)いてきたり候ハ、兩御方仁申て、ぬす人のさいくわに申おこなはれ候へく候、仍爲後日讓狀如件、

正中貳年十月八日

沙弥音阿在判

下公文所可勘申候、

1453

【正文】

薩摩國谷山郡内山田・上別符兩村地頭大隅式部孫五郎

法師法名道慶与谷山五郎資忠法師法名覚信相論當村所務條々事

右、就訴陳狀、擬有其沙汰之處、今年六月一日兩方出和

与狀訖、爰如覺信狀者、和与薩摩國谷山郡内山田・上別符

兩村地頭式部孫五郎入道・慶与谷山五郎入道覺信相論當

村所務條々沙汰事、一寄事於領家所務、道慶令抑留郡司

得分由事、一道慶令抑留質人并錢賃(覺)以下色々損物等由事、

一兩村内野島所當以下地頭得分等覺信令抑留由事、一同

村内宮園并久吉園桑代以下地利物覺信令抑留事、一同村

惣地頭職爲本物返否、過請所年紀否相論事、右於兩村者、

去弘安十年十月三日、雖被成関東御下知、就所務相互申子

細之間、正安二年七月二日、覺信於鎮西重預御裁許畢、而

不被札返被載彼御下知之桑竿失以下得分等之間、連々雖

訴申、以和与之儀、一向停止惣地頭綺之由、致契約之間、

止條條訴訟、有限之加徵米地頭米斗斗定拾伍石、但如正安三年

取帳目錄者、雖爲拾肆石参斗捌舛、就和与拾伍石之由定

之畢、次野島地利物参石并麥地子壹石伍斗是等者此外檢

断以下色々得分等代錢合拾肆貫文、毎年十一月中無未進

於當村可致弁、於地頭米者、任先例、於郡司所倉可令勘

渡也、次至野島并麥所當等者、於當村可被直納之、次件

得分等者、當國伊集院伊作兩所之間、以當村百姓可運送

之、但自今年^{年丑}至于辰年四箇年分來納可被取之由、被申

之間、致其沙汰畢、若背此狀、十一月申令違期者、如本可

被知行所務、此上者更不可有改變之儀云云、如道慶狀者、

子細同前者、此上不及異儀、守彼狀、相互可致沙汰之狀、

依仰下知如件、

正中二年十月十日

修理亮平朝臣^(案時)(花押)

『統目異判』
(花押)

1454 『在比志島氏』

薩摩國鹿兒嶋郡司貞澄代内田右衛門太郎実澄申、下人乙

次郎^{今者}平六事、止訴訟之由、出帶實澄狀之間、尋問実否之

處、如今月十六日実澄狀者、上原三郎基員拘借乙次郎一

類之間、雖及上訴、以承諾之儀、止訴訟早云々、此上不

及異儀之由、可被相觸基員也、仍執達如件、

正中二年十月廿五日
修理亮^(案時)(花押)

税所介殿

1455 「正文在文庫伊作家文書」「伊作家宗久譜中正文有之下アリ」

嶋津庄薩摩方日置新御領雜掌承信与地頭大隅左京進宗

久代道慶相論所務條々事

右、如大友近江守貞宗去年十二月廿五日執進、同月二日

連署和与狀者、嶋津庄薩摩方日置新御領田島荒野檢斷所

務等、領家一乘院家雜掌承信与地頭大隅左京進宗久代道

慶、下地以下和与分事^(中略)、一下地中分、以八幡御前放生會

馬場、爲兩方堺、互可令一圓進止事、右馬場者、融東西

之間、迄同社乃前後、以彼馬場之融爲堺、馬場以南者領

家分、馬場以北者爲地頭分、檢斷以下々地、相互無違越、

可一圓進止者也矣、一領家年貢并地頭用米同加微米未進

事、右年貢地頭用加微米等、兩方共未進之由、雖申之、

下地中分之上者、向後更不可及沙汰矣、一當年田島作毛

以下事、右作毛以下所務、和与中分之上者、云領家方、

云地頭方、相互不可有違乱者也焉、一字佐宮同弥勒寺并

大隅正八幡宮造營等事、右所役等者、兩方寄合、各可致

均等沙汰矣、一字佐宮同弥勒寺造營新米錢中分以前未進

事、右未進者、下地中分之上者、兩方共付知行所領、可

致其沙汰也矣、一異國警固并宮崎石築地用途事、右於警

固役者、任先例、可爲兩方沙汰、至石築地用途者、兩方

寄合、可致等分沙汰矣、一本所御分課役事、右本家御所
造營御修理、淨光明院修理、興福寺造營寺役以下、色々
御公事新物等、下地中分上者、可爲領家分役矣、一関東
御公事課役事、右將軍御所用途并流人事、中分之上者、
可爲地頭沙汰焉、以前條々、和与如斯、此外所務以下、
和与中分之間、相互止訴訟訖、兩方共守彼狀、更不可令
違犯云々者、此上者不及異儀、守彼狀、可領掌之狀、依
鎌倉殿仰、下知如件、

正中二年十月廿七日

1456 「忠宗公御譜中」

正中二年乙丑十一月十二日、忠宗公薨、年七十五、法名
道義、號仲阿弥陀佛淨光明寺殿、

「島津世家」

道義公 諱忠宗、稱三郎左衛門尉、下野守、上総介
公建長三年辛亥歲生、先公娶相馬氏 小次郎左衛門尉胤胤第三女、先公薨後
薙髮稱生公、弘安四年元航海來寇筑前平壺、我兵擊
妙智

變之、元皇帝怒、益造戰艦練軍、以欲比死者報怨、於是
將軍令九州之諸將、備異城之寇、故 公既襲封、而益
發兵守宮崎營、八年阿答海等欲伐 日本、吏部尚書劉
宣者上書深言遠征之不便、元皇帝喜納之、詔罷東征、
故元寇不復到、正應二年九月、將軍惟康親王罷歸京
師、三歲而嗣位、十六歲而罷十月、北條貞時請

後深草帝第二皇子久明親王 時十於京師、六歲爲鎌倉將軍、延

慶元年七月、久明親王亦罷歸京師、子守邦親王七歲

嗣位、公有弟、曰伊作忠長、亦弘安以來與 公共勤勞

等書、正中二年乙丑十一月十二日 公薨、壽七十五、
號道義仲阿弥陀佛淨光明寺殿、

1458 『水引執印文書』

造字佐宮薩摩國所課事、被免除新田宮領候、院宣并六
波羅御教書、令披見正文等候畢、此樣可披露候、恐々謹
言、

「正中二」十一月十八日 宗覺(花押)

執印社司御中

〔表紙〕

前 編 舊 記 雜 錄 卷十五	貞 久 公 自 正 中 二 年 至 元 德 元 年
-----------------------------------	---

〔國史〕
 二年乙丑冬十一月十二日、道義公薨、年七十五、葬鹿
 兒島五道院、拋島津系図、
 廟堂要覽
 嘉曆元年丙寅、是年四月改元嘉曆、自
 三月以前猶是正中三年、夏四月二十六日改元、
 拋大日本史、
 二年丁卯、三年戊辰、凡二年、事缺不書、
 元徳元年己巳、是年八月改元元徳、自
 七月以前猶是嘉曆四年、秋八月二十八日改元、
 拋大日本史、
 二年庚午、事缺不書、

〔西藩野史〕

貞久公

忠宗公之長子、母ハ三池奎介入道道智女、享保中追諡して
 理玄院殿惠昭見
 一房と、文永六年己巳生、三郎左衛門尉と稱す、上總公に
 任す、

正中二年己丑、忠宗公薨して襲て立つ、

正慶二年癸酉、正中三年四月廿六日嘉曆と改む、四年二月二日元徳
 と改元、三年八月十日元弘と改元、二年三月廿二日

正慶と、初後醍醐帝未だ太子たるの時、北條氏世々天下
 の權を執て、按に、北条氏平時政、頼朝に相として、從五位下遠江
 守に任す、頼家立て後、北条氏を謀る、成らずして廢

せらる、実朝立に及て、時政か子義時代て相たり、從四位陸奥守に叙任
 す、頼家の子公暁をして実朝を弑せしめ、又公暁を殺す、於是源氏絶ぶ、
 藤氏頼經を請て將軍に任す、幼を以て頼朝の夫人か妹藤を垂て政を聞事
 八年、承久中、後鳥羽上皇北条氏を征して成らず、義時、帝を廢し上皇
 及ひ皇子を遠国に遷す、義時卒て子泰時立つ、頼經を廢て子頼朝を立つ、
 泰時か孫經時代て相たり、頼朝を廢して宗尊親王を立たつ、經時卒て弟
 時頼代て相たり、亦廢て惟康親王を立つ、時頼か子時宗、父に代て相た
 り、亦廢て久明親王を立つ、時宗か子貞時代て相たり、亦廢て其子守邦
 親王を立つ、貞時卒て子高時幼し、故に其族宗室・照時并て相たり、六
 年にして高時代て相たり、但將軍の廢立のミならず、承久の乱後帝の廢
 立も亦北条、驕横不法擊断自恣なるを惡む、是を討て政を專
 氏に由る、驕横不法擊断自恣なるを惡む、是を討て政を專

にせんことを欲す、位に即て學を好み、諸儒に命して五經、政
 を治め、務て貧民を賑濟す、相模守高時將軍に相たるに及

て、資弁捷疾淫湏度なし、愜億國に徧く、懐懼巷に滿つ、
 帝以て時至れりとし、蜜に中納言資朝・右少辨俊基等と

謀る、發覺して高時大に怒る、先是嘉曆三年、病に由て薨髮し、
 崇鑑と稱す、弟左近太夫家代

たり、資朝を佐州に遷し後に殺す、俊基を緇す、又殺す、帝を廢

し他州に遷さんとす、帝潜に通て笠置山に幸し、城築して兵を徵す、高時、常盤駿河守範貞を將とし、大軍を發

し是を撃しむ、帝の軍利あらす、有王山に通る、範貞追

て帝及び諸王を捕ふ、元弘二年三月、於是高時、帝を隱岐國に、

中務卿親王一帝第一子を佐渡國に、妙法院親王二帝第二子を讃岐國に

流す、先是詔を奉し、楠判官正成は河内國に、赤松圓心

次郎則村、村上と稱す、其先村上帝の子具平親王に出つ、親王の子師房

従一位右大臣に任す、始て源姓を賜ふ、八世の孫季房播州國司に任す、

是より武人となる、則村へ季房九世の孫なり、は播磨國に、大塔宮護良親王ハ吉野

に、足利左馬頭尊氏ハ京師に、新田小太郎義貞ハ上野國

に起る、帝亦遁て、隠州を出て伯耆國に至り、名和伯耆

守長年に寓る、天下に令して高時を討せしむ、尊氏京師

六波を破て、仲時・時益を誅す、共に北条氏、是を兩六波

義貞鎌倉を滅し高時を誅す、二日、北條氏天下の權を執

る事九世一百十五年にして亡ふ、時に北條修理亮英時、

西州の探題として筑前國博多に在り、尊氏、貞久公に告

て是を撃しむ、五月二十、貞久公、小貳筑後守貞時入道妙

惠按に、小貳氏、其先藤氏田原藤太秀郷八世景頼の次子大藏直頼

大宰大貳に任す、其子資能、大宰小貳たり、因て以て氏と爲す、大

友刑部太輔氏時按に、大友氏、小貳氏と祖を同す、秀郷八世景頼の

長子を左近將監能成と云、初て大友を以て氏とす、

に會して英時を撃つ、終に是を殺す、是に至て天下始て

一統す、尊氏、書を貞久公に贈て功を賞す、六月十日の書今存す

建武元年甲申、正慶三年正月二十、二月二十、貞久公豊後國井

田郷地頭職に補す、

二年乙亥七月、北條時行高時信州に起る、關族滅亡の時

の餘衆を收集て鎌倉先是、帝第八子成良親王を征夷大將軍に任す、

を襲ふ、足利直義、成良親王を奉して走る、時行鎌倉を

取て、東州震驚く、尊氏勅を奉し、往て征す、時行誅に

伏す、初尊氏征夷大將軍に拜せられん事を請ふ、許さす、

功あらは拜せんと約す、於是、尊氏勅を待すして自征夷

大將軍と稱す、尊氏、新田義貞と善からず、義貞か一族

の采地東州に在るをは奪ふて、軍士を賞す、義貞大に怒

り、尊氏か采地の中州に在る又奪て己か士に封す、交讀

て相訴ふ帝、義貞に可く、命て尊氏を撃しむ、義貞兵六

萬を帥ひ、東海道を経て鎌倉を征す、足利直義尊氏弟參州

矢矧川に逆え戦ふ、利あらす、六萬兵を卒し相州箱根山

に軍す、義貞進て撃破る、初大智院宮或云中務卿親王、彈正尹宮

及び江田行義・大館氏義・嶋津道鑑公先是、貞久公寵愛、

嶋津筑後前司考等、一萬餘兵を卒し、東山道を経て鎌倉

を撃つ、尊氏大兵拾八萬を帥ひ、相州竹下に在て逆へ撃

つ、衆寡敵せず、官軍大に潰ゆ、尊氏又義貞の後を撃ん

とす、於是、東征の諸將軍を京師に班す、尊氏は是を追ふ、按に、道鑑公勅を奉して征東の將たり、既に尊氏京に到て属す、伝記其故を載せず、愚謂、中納言安野公廉の女藤子容色あり宮に入て幸せられ、立て准后とす、佞姦邪匪の人多く、准后に由て内謁す、帝准后の言は從ふ、於是政大に乱れ人望を失、尊氏か叛するに及て、衆悉く義貞を棄て尊氏に属す、道鑑公の尊氏に属するや此時なる事必せり、然とも、臆説を以漫に記せず、分註して參考ニ備フ、

三年丙子正月、尊氏大兵を卒して京に入る、帝江州比叡山に幸して難を避く、奥州國司北畠源中納言顯家、奥州に起

て尊氏の後を躡て京に入り、義貞・正成等に會して尊氏と

洛中に戦ふ、道鑑公、尊氏に属して數功あり、云云、道鑑公正月廿七日加

茂川原に闘ふ、明日神樂岡に闘て功あり、嶋津孫五郎宗久・名和伯耆守

長年之臣和賀尾弥太郎及び兵衛次郎を虜にす、晦日宗久又五条河原に戦

て功あり、尊氏の軍利あらず、西州走る、道鑑公も又是に從て

國に歸る、云云、公河内國香椎宮に屯す、菊池掃部助武俊襲薩隅日

の土出て是を迎ふ、云云、山田孫五郎忠能は、長、尊氏筑前國

に在り、道鑑公を賞し、居を筑前國松口郷博多の内に賜ひ、

是に居らしむ、故に松口殿と稱す、數箇の庄を加へ封す、

筑前國今津本岡比加里唐津、豊後國故比田、豊前國

曾井、筑後國故加を賜ふ、後に老を告歸て是を辭す、四月、尊氏復

大軍を起し京を撃つ、帝、義貞・正成をして攝州に逆戰

せしむ、正成戰死し、義貞敗績す、帝又比叡山に幸す、

尊氏人をして偽説て京に還幸せん事を請ふ、帝是を可く、義貞大に憤激し、帝に見て且恨ミ且悲む、帝是を諭し春宮恒良を託す、義貞北國に走る、尊氏車駕を迎へ、帝を

花山院に幽す、十二月、帝潛に遁れて大和國吉野に幸し、

都を立て南朝と號し、年號を延元と改め、以て天下に令

す、於是尊氏後伏見帝第四子を立つ、光明帝と號す、是

を北朝といふ、義貞は春宮を奉し、越前國金崎城に據る、

足利尾張守高經大兵を卒し來て是を圍み攻む、尊氏又仁

木頼章・高師泰を遣して高經を助く、嶋津越前守頼久・貞

公の長庶子也、幼法師房・彦三郎・孫三郎・左衛門尉・上野介・大夫判

官と稱す、其子親久上野介鹿兒嶋川上邑に封せられ、川上を以て氏とす、

十八世の孫川上久馬久傳是なり、五世上野介兼久之三男左近將監忠忠十

一世勳解由久統也、忠塞の三男信濃守忠興其子參河守忠智、國老ニ任ス、

其子左京亮忠賢、隆信ヲウツテ功アリ、忠賢ノ、道鑑公ニ代テ軍ヲ

第四郎兵衛忠兄亦國老ニ任ス、共ニ子孫ナリ、道鑑公ニ代テ軍ヲ

領シ、越州ニ至リ師泰ニ属シテ功アリ、國老以下刊本ニヨリ補フ

1461 『臺明寺文書』

數位紀時秀跡

与讓犬王丸得分

一大神一丁 重留之官留也、但止上神田、 一むくひさき七段 宮留名

一まつなかのとへしけ中口町六段

一ひめきのなか田三段 一ひたくれ田三段

山野分

『山田氏文書』

一大鳥居園内しんかい一段小 一中津河内立岩迫一所
 一井丸園内くゑわたり一段 一ひめきのかみすきか荘園ほりまぢあり、
 一西園岩殿たうりやう也、
 右、任淨円讓狀、可令知行狀如件、
 正嘉暦元年ニ当ル中三年二月十六日 散位時秀在判
 所人入阿在判
 『ロツラ』
 『向佐太郎大夫讓与大王丸狀』

『山田氏文書』
 ゆつりあたうるもろ三郎に
 さつまの國谷山郡たにやまのこほりの内、山田・上別府へつふの
 ちとう米十五石・同ねんくようとうの内十貫文の事、
 右、山田・上へつふのちとうしよむたうけいと、かの所
 のくんし谷山五郎入道かくしんとわよせしむるうへは、けい
 やくの狀にちかへさらんほとは、くたんの米とようとう
 をとるへし、よて後日のふしん不審あらんために、自筆おも
 て、かきをくゆつり狀如件、
 正中参年二月十九日 　　たうけい(花押)

『公』

山田・上別符兩村惣地頭職得分物事、如御狀者、諸三郎
 ・龜三郎仁令讓之候早、彼得分、任契約狀、可有御沙汰
 候云々、可存其旨候、恐々謹言、
 二月廿五日 　　沙弥覺信(花押)

あん(具書)と申され候はんする時の申狀のくしよ案文をかきて、
 そへられ候へきもんしよの次第、
 一つう けんきう建公三年のうたいしやうけの本下文のあん、
 　　正文へ上総かつさ殿に候也、
 一つう けんち二年のたゝさねのゆつり狀、これも正文
 　　へかつさ殿に候也、あつかり狀二つう、正文に
 　　て候、くへしき事へ申て候、
 一つう こうあん(具書)のくわんとう御下知、これハをくの
 　　たんをあんかきてそへらるへく候、
 一つう 道慶かそれにゆつりたてまつる狀、
 一つう ひて時(英)の下知、これへくちの一たんをかきてそ
 　　へらるへく候、
 一つう りんし、
 一つう くゑつ(英)たん所のあんとのミてう、

以上七つうにて候、
諸三郎殿へ

1465 『清水臺明寺文書』

大隅國正八幡宮雜掌尚円并神官所司等申、兼意以下輩破損神王面・御銚、致殺害刃傷放火由事、今年正月廿九日関東御教書如此、早任被仰下之旨、爲處流刑、不日可召進兼意・永壽・慶喜・慶円・能兼・兼幸・永譽・覺増・覺榮・増範・貞兼之狀如件、

正中三年三月八日
(英時) 修理亮御判

守護代

「ロウラ」
「鎮西御施行案」

「ロウラ」
「清水大明寺」

1466 『公』

大隅國正八幡宮雜掌尚円并神官所司等申、兼意・永譽・慶喜已下輩破損神王面・御銚、致殺害已下狼籍事、任去正月廿九日関東御教書、爲處流刑、可召進其身之由、施行守護代畢、次社頭守護事、兩度被仰之處、一向無沙汰云々、甚不可然、所詮、社家靜謐之族者、自身令參宮、嚴密可致警固、若有緩怠之聞者、殊可有其沙汰之旨、相

觸日向國地頭御家人等、可被進着到之狀如件、

正中三年三月八日
(英時) 修理亮御判

守護代

薩摩國同前

「ロウラ」
「被下日向國守護代鎮西御教書案」

1467 『臺明寺文書』

正慶元年十二月廿五日
(本文書ハ一四六五号文書ト同文ニツキ省略ス、但シ後書ノミ掲グ)
比丘尼妙阿

坂上介三郎村秀也

勝吉入道亨阿

1468 「國分宮内澤氏蔵」

御供所本司職事、早可被奉行之旨、其沙汰候也、仍執達如件、

正中三年五月十二日
道澄在判

御供所百増殿

1469 納 用途事

合伍貫文者

右、御供所本司職、百増丸安堵副進所納如件、

正中三年五月十二日

在判

在判

在判

1470 『比志島氏文書』

薩摩國滿家院雜掌申所務年貢事、訴狀如此、子細見于狀、

早可明申候、仍執達如件、

嘉曆元年七月廿一日

(実時) 修理亮御判

比志嶋孫太郎殿

1471 『正文在宮内社司澤氏』

〔引渡シウラニ〕中津河上津守神田事 守護所殿免状覚進嘉曆元

中津川上津守神田壹段半事、爲神敵仁知行之由、聞及之

間、雖加惣札、依無其儀、本主田所殿所主日付也、仍狀

如件、

嘉曆元年八月十五日

沙弥(花押)

1472 『在比志島氏』

造勝長壽院并建長寺唐船勝載物京都運送兵士事、薩摩國

地頭御家人可催進旨被仰下畢、早致其用意、可被參勤候、

仍執達如件、

嘉曆元 九月四日

本性(花押)

比志嶋入道殿代

1473 『比志島氏藏』

〔編纂書〕比志嶋孫太郎入道代申嘉曆元

薩摩國比志嶋孫太郎入道佛念代義範謹言上

号入來院地頭代、貞雄對于佛念申成御教書由雖承及、

不付本解狀并御教書、令隱蜜上者、任□被成下返御

教書、被究明掠訴、欲蒙御成敗、諸三郎童鬼太郎男平

三郎并次郎檢校所當米由事、

右、彼貞雄書載比志嶋孫太郎忠範名字於訴狀訴申由、雖

承及、不付本解狀、剩忠範法名代佛念義範當參時者、不及出

仕、不對揚上者、急速召給本解狀、爲申明貞雄非據掠訴、

言上如件、

嘉曆元年十月 日

1474 『比志島氏文書』

薩摩國比志嶋孫太郎(忠範)入道佛念代義範申所當米事、申狀如

此、爲訴人、不終沙汰篇云々、來月五日以前、可被明申之狀如件、

嘉曆元年十月廿日

入來院地頭代(貞雄)

修理亮(英持)(花押)

1475 「延時氏文書」

「口裏」
「若松彦三郎和与状」

延時又三郎入道殿引付宇佐御造營役、於忠治母堂宿所、

依令抑取所持物等、於守護方雖訴申之、以和談儀、被出

錢貨之間、永所止訴訟也、仍爲後日證文如件、

嘉曆元年十二月五日 平忠治(花押)

「ウラニ」
「爲後證、所令加判也、

同六日 本性(花押)

1476 「御文庫伊作家文書中」

納 伊作・日置 内小野・古垣兩名見參祈事、

合參貫文者

右、江太入道良心之分、所納如件、

嘉曆貳年正月四日

預所御判

1477 一長谷寺別當申案堵用途事、去年惣公文上洛之時、持參

仕候之處、自多少之事候て不被召候、いまも寺社安堵用途治定候者、可持參仕之由、令申候、これらのしたい、たところ御たつねの時、いさい申さるへく候、

1478 「國分宮内澤氏文書」

正宮公文所下

可令早御供所本司息長百増丸領掌、御供田七坪貳段・

筒口貳段・馬渡園壹所事、

右、件田園等、爲神事興行、所宛行也、殊可令抽忠節之

狀如件、

嘉曆貳年三月 日

留守沙弥在判

1479 『池端氏文書』

西字(ウラニ)佐弥勒寺造營米錢事

合米老姪貳合錢百五十文者

右、大隅國祢寢南侯得富五分一内女子壹人分、祢寢弥二

郎弁、請取之狀如件、

嘉曆二年五月廿一日

沙弥道性(花押)

〔右ニ小異ノ文一通アリ、イツニト書ケル如シ、外ハ同シ故ニ略ス〕

〔池端文書ニ同年月日ノ沙弥道性請取狀アリ、相異箇所ハ「得富之内島田三反」、

〔弁所請取〕ノ如シ〕

1480

『在比志島氏』

薩摩國比志嶋孫太郎忠範今者出家、法名佛念。与大隅助三郎忠國于時大

相論、借用途伍拾貫文事、忠國雖預御下知、彼用途被致

弁候上者、向後止訴訟早、仍請取狀如件、

嘉曆二年六月十日

忠國(花押)

道助(花押)

1481

『比志島氏文書』

□爭号當雜掌、打止常々所務年貢□之由、可及新訴哉、就中、去元亨四年八月日□掌清秋補任狀者、七ヶ年對捍

云々、仍□一番御手彈正次郎兵衛尉光政奉行人、被經御

沙汰、被成下御教書之間、令出帶不闕返抄、遂結解之處、

毎年々未進無之、隨而清秋知行分兩年返抄又分明也、而

今乍号雜掌、不備進補任狀并宛文注文等、畜構胸臆浮言、

打止去延慶三年以來所務、令抑留年貢七十石并野稻所當

麥粟地子苧桑代色々濟物云々、此条背先規、不入部國、

不披見補任狀、以胸臆掠申之上者、不可依訴人掠訴、早

以新訴之篇、爲被弃捐濫訴、粗披陳言上如件、

嘉曆二年七月 日

1482

『水引執印文書』

〔編纂書〕
「土六免田、楠本免田賣券案東郷被上候願狀」

奉賣渡

薩摩國八幡新田宮常見免田代引田、永利名内土六壹町、

并入來院内楠本免田五段事、

右、件免田等者、知行無相違者也、而依有費用、代錢參

拾五貫文、限永代、東郷尼御前奉賣渡早、然者爲一円不

輸之地、可有知行候、仍爲後日之賣券狀如件、

嘉曆貳年七月卅日

惟宗友雄在判

(執印重友)
沙弥道嚴在判

1483

『水引執印文書』

〔編纂書〕
「莫称施行案市來四郎入道跡田園等事」

薩摩國八幡新田宮執印職内、市來四郎入道如導跡田園等

事、莫祢彦太郎入道殿相傳知行云々、然者早任如導跡輩手繼狀、無相違可被領掌之狀如件、

嘉曆貳年八月三日

沙弥道嚴在判
(重志)
(花押)

1484 『在比志島氏』

薩摩國比志嶋孫太郎入道佛念申、大隅國蒲生又太郎宗清(忠範)
今者、不亂返所從千与王女母子事、請文披露之處、宗清不
遁下知違背咎之間、所被分召所領五分壹也、於所從等者、
任先下知狀、可相渡之旨、重相觸之、載起請之詞、可被
注申、仍執達如件、

嘉曆二年八月廿九日

修理亮(花押)
(英特)

祢寝郡司入道殿

1485 『在比志島氏』

(端裏書)
「比志嶋孫太郎申狀 嘉曆二閏九十七」

薩摩國比志嶋孫太郎入道佛念代義範重
(言上カ)

号満家院雜掌、令抑留比志嶋名年貢延慶以來由、及掠
訴間、帶每年不闕返抄雖捧、恐于無理、爲當參身不及
出仕、不請取陳狀上者、任定法被弃捐掠訴、欲預御裁

許、當名年貢抑留不實事、

右、雜掌解云、去延慶三年以來所務抑留年貢七十余石以
下濟物等、不致其弁之由、及不實掠訴之間、帶每年不闕
返抄等、雖捧陳狀、乍爲當參之身、至于四ヶ月不請取彼
狀之上者、被弃捐掠訴、爲預御裁許、言上如件、

嘉曆二年閏九月 日

1486 「伊作久氏譜中 写在卷本トアリ」

しまつの三郎さあもんかこのたひのいとまの事、ふつと
叶かなふましく候、このむねをそむきて、なをくも申、
又おしてもくたらハ、世としやうくかたきとなりて、
なかくめしつかふ事あるへからす、この事いつハリなら
ハ、

いせ大神くう 八まん大ほさつ 北野 きたのゝ天神の御はつ

をたか氏かうふるへし、

嘉曆二年ナラン(貞和二年) 壬九月十四日 尊氏 たか氏あり
高氏御判物ノ初り也 御へん

藤野氏文書

探題北条英時下知狀ナリ

148701

薩摩國雜掌明尊申、伊敷村名主四郎入道打止國檢抑留
濟物由事、

右、就雜掌解、去年七月廿七日以後度度相觸之上、今年
五月七日仰加治木郡司政平、又六氏平カ子『彦次郎』加催促之處、如同八月廿七
日請文者、不及請文云々、起請詞者、難遁召文違背之咎
歎、然則於檢注者、守先例、令遵行、至濟物者、任御事
書之旨、遂結解可令究濟焉者、依仰下知如件、

嘉曆二年閏九月廿日
『續西探題北条武藏修理亮英時』
修理亮平朝臣(花押)

『伊地知季安考』

一今、伊敷ノ四郎カ迫戸ト云アリ、此名主四郎カ居所ヨ
リ呼ヘル遺号ナラン、義天公ノ時、伊敷弥次郎忠純
ト云者アリ、此名主カ孫子ニモ當ルカ、忠純ハ長谷場
六郎久純カ二男ト云、養子ニモ爲シカ、

1488 『伊作久氏譜中 正文在卷本トアリ』

ゆつりわたす二男『龜壽』(久氏)かめす『吉利』(名)

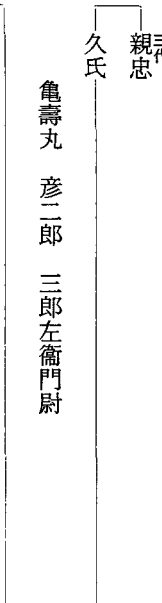
さつまの國日置のほかうよしとしミやうの内、りやう
けやしき、ちとうやしき、同そのくさんやら、くま
す井たうミやうの内の公田参分二、同うミ参分二の事、

1487の2

右、かの所りやうハ、道惠ちうたいさうてんの所也、し
かれは、かめすに永代ゆつりあたへをはぬ、たゞしよし
としミやうのさかいは、りやうけと、(総題)そうかう中分狀に
ミへたり、そのむねをまほて、一圓ちきやうすへし、よ
てのちのふしんあらしたために、しひつにてかきをくゆつ
り狀如件、

嘉曆貳年後九月廿一日 道惠(花押)

1489 伊作家



居住于信濃國神代郷也、

1490 『久來永利氏文書』

永利如性与山田八郎二郎道能字一能字能字相論、薩摩國石上村堺
打越事、被裁許如性訖、守下知狀可打渡由、被仰之處、

不事行云、太無謂、任先度催促之旨、不日致沙汰、可被注申候、仍執達如件、

嘉曆二年閏九月廿八日

(采時)
修理亮(花押)

(重幸)
澁谷又二郎入道殿

(為惠)
澁谷弥平二入道殿

1491 『入来院氏文書』

澁谷弥四郎重名代祐信申、薩摩國伊力院答原南方田畠在家等事、重申狀如此、(内惠)澁谷次郎三郎違背召文之間、可加

催促之旨、先度被仰了、不日可被申左右也、仍執達如件、

嘉曆二年後九月廿八日

修理亮(花押)

莫祢郡司殿

1492 『水引執印文書』

(端裏書)
〔東郷二遣又宇曾越賣券狀案〕

賣渡

薩摩國新田宮執印職知行内、同國入来院中村内字宇曾

越壹町事、

右、田地事、爲重代相傳(遺惠)也知行無相違者也、而依有要

用、代錢肆拾貫文仁、限永代、東郷尼御前仁所奉賣渡也、

但彼水田事、聊依有子細、舍兄執印入道(殿)教并子息友里法名等兩方出契狀者也、隨而教忍令同心、令沽却于同心教忍候間、加判形於彼狀早、且爲不審、親父道教讓狀并道嚴(執印重幸)

・教忍相傳之狀等、於正文者、爲連券之間、案文仁封裏

所副渡也、任彼狀等可被知行也、此田地者、迄于万雜公

事臨時役、自元不相懸之上者、爲一円不輸之地、可被知

行之、若又此田地不慮之外相違出來時者、本錢以一倍可

令糺返也、仍爲後日、賣券之狀如件、

嘉曆二年十月廿八日

(友里)
沙弥教忍

(金楚)
沙弥道惠

1493 『比志島氏文書』

(忠範)
薩摩國比志嶋孫太郎入道佛念代義範重言上

号滿家院雜掌、年貢濟物抑留由、及掠掠間、番一問

答訴陳訖、而爲訴人乍爲當參身、不終御沙汰篇上者、

任定法、欲被弃捐掠訴、年貢濟物抑留不實事、

副進

一通 御書下案

右、号雜掌乍致掠訴、顧無理、爲訴人、至于數ヶ月無音

之上者、任定法、爲被被急速御沙汰、重言上如件、

嘉曆二年十一月 日

1494 『山田氏文書』

嶋津大隅式部孫五郎入道、慶申、薩摩國上野平九郎入道
禪意背度、下知狀、不弁農具并牛馬事、請文披見畢、所
詮、於論物者、任先下知、可沙汰渡道慶、次禪意違背咎
事、所被分召所領五分壹也、仍執達如件、

嘉曆二年十二月十六日 修理亮(英時)(花押)
知覽又四郎殿(忠世)

1495 宗久

師久
氏久

又三郎 三郎左衛門尉 修理亮 越後守 陸奥守

嘉曆二年戊辰四月十一日 見但馬 氏系圖、誕生、
『島津氏世録系圖ニハ月日ナシ』

1496 『比志嶋氏家藏文書』

比志嶋孫太入道佛念代義範申錢貨事、如被仰下候者、
如佛念申、罪名以前令弁償、帶請取云々、
詮、此有御評

定以前、於在國致其弁候之間、出与請取狀候之條、不及
子細候、以此旨、可有御披露候、恐惶謹言、

嘉曆三年六月十七日 藤原忠國請文
『伊集院氏』
『大隅助三郎請文』

1497 『比志嶋氏家藏文書』

薩摩國比志嶋孫太入道佛念代義範申、所從千与王女母
子事、重申狀如此、早召渡其身、帶返抄者、可持參之由、
相觸浦生彦太郎入道、載起請之詞、可被注申、仍執達如
件、

嘉曆三年六月廿三日 修理亮(英時)(花押)
祢寝郡司殿

1498 『正本在水引權執印』

注進 於新田宮(者カ) 上宣等國分助二郎入道、
然所持之間、自社(名案カ) 可買之由、令申之条、聞及否可有
御尋人(之シカ)

合 一澁谷人、
新平次入道(入米院重基) 弥平三入道(為重) 車内又二郎入道

副田北屋 寺尾 中村地頭 副田山口 楠本地頭代

一當國守護代酒勾平内兵衛入道(本性)子息兵庫允

一高城郡

地頭代大藏左衛門入道 温田地頭代衛門次郎入道 觀

音丸地頭代青(領カ) 收納使太郎兵衛入道 在國司兄弟等

武光弥三郎入道(縁巻) 舍弟伴三郎入道(兼巻) 上村六郎入道 舍

弟三郎入道

一薩摩郡内

一分地頭代本田民部入道 一分地頭小田原弥二郎入道

郡司吉富又太郎入道 成枝領主上野四郎太郎 舍弟三

郎四郎 成富太郎 同舍弟彦二郎 山田九郎入道 延

時 富長 赤佐水性仙 光富又二郎入道 白濱三郎入

道 同五郎入道 同孫六入道

一宮里郷地頭式部孫七 三分二地頭高崎二郎入道 郡司

九郎入道 益富 松本入道 弥五郎入道 又三郎入道

又太郎入道 又二郎入道 弥四郎入道 三郎二郎 弥

六入道 禪理房 安養寺院主 (彌王丸在出) 高江石塚三郎入道 同

又太郎入道 同平七入道 同小四郎入道 同三郎四郎

又四郎入道 大三郎入道 五郎太郎入道 紀平三入道

紀藤五入道 長崎寺淨觀坊 源朝房 正末三郎五郎入

道 堀切六郎太郎入道 了性房 六郎二郎入道

一市來孫太郎(時憲)

一東郷三郎左衛門入道 子息左衛門入道 鳥丸在國司四

郎入道

右、爲有御尋交名人注文、粗言如上件、

嘉曆三年

1499

『比志島氏文書』

(端裏巻)

「比志嶋彦太郎」所也

(入道代脱カ)

薩摩國御家人比志嶋彦太郎義範(道、教カ)謹言上

欲早仰同國滿家院河田右衛門太郎入(道、教カ)任交名注

文旨、被召上同扶持人并領内百姓等、御成敗負累

米拾石肆舛并錢參百文事、

副進

一通 御教書守護當敵所見

一卷 二十通出舉錢請文等

一通 負人等交名注文

右、河田右衛門太郎入道、教扶持人、同領内百姓等、不

并負累米錢之間、於守護方雖可訴申、依爲當敵、所令言

上公方也、然早依彼請狀等之旨、任交名注文實、仰領主

道教、被召上負人等、爲預御成敗、粗言上如件、

嘉曆三年七月 日

1500 「蒲生土山之内某文書」

讓与 薩摩郡内平礼石寺水田島地等事

但至四至者、本證文等仁在之、

右、件於寺領者、親成重代相傳之所領也、而相副次第相傳之證文等、嫡子毗沙福丸仁、限永代讓与早、今後日不可有他人之妨狀如件、

嘉曆三年八月六日

左衛門尉親成(花押)

1501 「國分宮内澤氏藏」

(花押)

正宮去年檢断物事、任(新脱之)□載誓狀之詞、可被注進之□

仰下也、仍執達如件、

嘉曆三年八月十六日

沙弥□

田所檢校御房

1502 「上原氏文書」

納伊作田郡入山村請御年貢事

合伍拾玖貫肆佰玖文内

但絹四十二兩からいゝ代錢二十八貫七百十文内、二

十兩からいゝ代つけのまゝ鎌倉にて請取也、絹二

十二兩ハはたりの右衛門入道見ちにて十三貫四百

六十文うり進、

右、所明年分且納如件、

嘉曆三年十二月廿七日

(花押)

1503 「比志島氏文書」

注進 滿家院比志嶋名水田地頭御方目錄事

合

見作田拾捌町玖段□内 不河成三反□
才田三町二反□

得田拾伍町三反卅□内

除田壹町玖段卅内

山王田二反 大日田一反 御佃一反□

新加用三反 小地頭用二反廿□ 竿失壹町

定得田拾參町四反□内 追損田玖段□

分米六石貳斗伍舛 田米壹石貳斗五舛

右、目錄如件、

嘉曆參年十二月廿日

地頭代榮秀□

1504

「山田氏譜中」

「案文在山田七郎右衛門久通」

大隅式部孫五郎入道と慶重言上

薩摩國御家人上野平九郎入道禪意背敷ケ度御下知、

不亂返農具并牛馬等罪科事、

副進 一通 追御下知敷通略之、

右、違背之重科至極之上者、任傍例、爲預御裁許、重言

上如件、

嘉曆四年正月 日

「裏二有之一」
〔花押〕

〔比志島〕
名代表義範〔花押〕

1505

『水引執印文書』

薩摩國新田宮執印入道道慶申、江上村内荒野等事、重申

狀如此、來月廿日以前可參對也、仍執達如件、

嘉曆四年正月廿三日

〔英時〕
修理亮〔花押〕

吉永又三郎入道殿

1506

「引返しニ」

「徳」
「とくくしゆまろにくるゝゆつりしやう」

ゆつりわたすれんねんかしよりやう、をうすみのくにし
やう八まんくう御りやう、あさなさいのかれい、かわのし
もむらの事、

みきのてんはくさんや、ありしたいせうもんをあひそへ
て、まこいや四らうかちやくしとくしゆまろへ、ゑいた

いをかきてゆつりあたへをへぬ、しかれハ、れんねんそ

んしやうのところ、いや四らうをなしきまこ四らうと

けいやくのしやうをしかハし、ひらやまとのゝちきやう

しもかれかハを、まこ四郎にさりのくこと、もたへなき

したいなり、まこ四らうにをきてへてうくふけうのし

んなり、又れんねんかしこにをよひてふとくしんのめい

をそむきあるニよて、かへすく、かのまこ四らうにを

きてハちきやうすへからす、又いや四らうにもくるゝへ

からす、せんにそのしやうおやみ候、へうぎやまハひこ

くまちきやうすへし、せんするところ、とくしゆまろひ

らやまとのゝてを申のけ、いそき申給ハリ、たいてんな

うちきやうすへし、もしこのしやうをそむき、いらん申

しそん候ハン物ハ、れんねんかしそんにあるへからす、

しかるにてきたいとうたへ申のくへし、なをとくしゆし

せんのをひめの時ハ、女しをもきらハすをとゝいの中ニ

もつへきなり、よてのちのためニしやうくたんのことし、

かりやく四ねんしやう月廿五日

ひくにれんねん〔蓮念〕(花押)

1507 『本田二郎親兼入道道観傳』

嘉曆四年己巳三月二日、得父靜觀之讓、薩州山門院内領

針原・野角・横峯以下所々水田島也、

1508 「入來本田氏文書也」

薩摩國針原二郎入道被讓渡ところ針原・野角・横峯以

下所々水田島等事

合

右、本文書等、御下文等あいそへて、限永代、針原入道

ニ所讓渡也、但於後日、右之一所をのこさす子息孫二郎

ニ可被讓渡也、仍讓之狀如件、

嘉曆四年三月二日 沙弥靜觀〔道観ノ父〕(花押)

1509 請繼 関東雜掌合力用途事

合参百文者

右、御供所百増殿沙汰、所請繼如件、

嘉曆四年正月廿六日 円与在判(花押)

道澄在判

1510 『正文山田氏』

嶋津式部孫五郎入道々慶申、薩摩國上野平九郎入道禪意

背下知狀、不弁農具并牛馬由事、先度被仰了、不日守彼

狀、可沙汰渡也、仍執達如件、

嘉曆四年三月五日 修理亮〔北條英時〕(花押)

智覽又四郎殿〔忠世〕

1511 「伊集院忠國譜中」

「案文在山田七郎右衛門久通」

讓渡

薩摩國伊集院内門實村田島山野等事

四至本證文分明也、

右、件田島山野等者、道助相傳知行無相違、而子息兵衛

三郎仁、限永代所讓渡也、隨相副鎮西御下知以下本證文

等平〔兼之〕、於関東御公事等者、任先例、可令勤仕之、如此面々

讓置之處、若自何子共中毛致違乱者、不可有子孫之儀、

仍爲後代之讓狀如件、

嘉曆四年卯月三日

沙弥道助

嫡子忠國

「助三郎忠親、法名道助、其子長門守忠國、法名惠忍トアリ」

1512 『本田兼阿傳』

嘉曆四年己巳卯月廿五日、得父道觀之讓、薩州山門院内領針原村田島曠野等并野角内野屋敷方四町・横峯四至境矣、

1513 『入來本田氏文書也』

ゆつりわたすさつまの國山門院内はりへらの村田島くわうや等、井のすみのうちの屋敷ほう四町内よこミネの四至さかい手継本證文等ニ見へたり、右、件のところへ、道觀相傳所領也、仍ちやくし孫二郎かところニ、永代をかきてゆつりわたすところなり、このゆつり狀ニまかせて、たのさまたけなくなりやうちすへき狀如件、

嘉曆四年卯月廿五日

沙弥道觀(花押)

「事同シキ故載此」

『全』

針原孫次郎久兼當知行之地事、任一同宣旨、管領不可有相違者、天氣如此、悉之、以狀、

元弘三年八月廿九日

權左少弁(花押)

1515 わたくしりやうのちうもん

合

一所 よこミネの村

一所 はりわらの村

一所 うちのゝ

一所 やなきのくほ

一所 いくいた

一所 はかたのこたへ

此内やなきのくほ・いくいた・はかたのこたへ三ヶ所のもんしよへ、をさへとゝめられ候了、

1516 『山田氏文書』

大隅式部孫五郎入道々慶子息(息能)諸三郎丸申、薩摩國谷山郡

山田・上別府兩村地頭職安堵事、申狀副具如此、早云當

知行之實否、云支申仁之有無、載起請之詞、可被注申也、

仍執達如件、

嘉曆四年五月廿三日

〔和泉殿〕
嶋津三郎兵衛尉殿

〔英時〕
修理亮〔花押〕

1517 「和泉實忠譜中」

嘉曆四年己巳五月、大隅式部孫五郎久入道慶息諸三郎

丸忠請襲父地頭職、安堵薩州谷山郡山田・上別府兩村、

於是二十三日、探題北條英時致實忠書、令以注進其實否

及支有無、原文收左、

1518 『入來院氏文書』

〔端裏書〕
「重名所進勘返状案」

勘返

澁谷孫三郎惟重所領等勘返事

合

一相模國吉田上庄寺尾村內

田地肆段

在家貳字內副同山野立野壹町

壹字中三郎入道屋敷

壹字後藤太郎屋敷

而如重廣注文者、貳字內壹字地頭屋敷云々、無跡

形不實也、貳字共往代百姓屋敷也、

在家伍字付山野在之、是者自法音寺押領之、

一薩摩國入來院內塔原郷

公田拾八町七反半

是者公田許也、莫太余剩雖在之、不持下地取帳之

間、不備進之、於重廣者雖令所持之、挾紆心、不

進取帳之上者、被配分公田、至下地余剩者、就于

分限、可被領之由、可被仰下于鎮西探題御方欵、

在家分

一所 地頭堀內

四ヶ所 城籠村

一字 淵脇 此內毗沙門堂并十二宮、同敷地・免田在之、

二字 借屋崎 當所仁有市庭、是則有得分之地也、尤欲有御配分、

一字 藤九郎入道

二字 大園 此內天神敷地・免田在之、

三ヶ所 中里內

一字 号圖六、宗万房一期分也、未來仁可被定之、在家、

三ヶ所 古家園內 此內仁藥師堂并三嶋社、同敷地・免田在之、

一字 權目 此內阿弥陀堂、同敷地・免田在之、

一字 中塚 此内若宮敷地・免田在之、

一字 横枕

一字 久目方

四字 宇津木浪 此内権現堂、同敷地・免田在之、

一字 塚原

一字 皮屋

三字 田代

一字 木葉

二字 金家 如重廣注文者、一字云々、争隠蜜之罪科可遁之哉

貳字 橋口

一字 樋脇

三字 村子田 當所仁観音堂一字、同敷地・免田在之、

二字 前土古 此内諏訪社、同敷地・免田在之、

一字 柿木原

一字 峯越

一字 松丸

重廣一向令隠島分

一字 藤次

一字 永吉入道

一字 五郎太郎入道

一字 赤崎入道

一字 皆原

正作分

一段 井尻 二段 月方 三段 桜木

三段 榊目 一町口町 一町 頭田、此内神田在之、

此外山野河莫太在之、就于分限、可被分付之歟、

又在之、号榊木田、名主押領之間、相論最中也、

一筑前國早良郡下長尾庄内

田地 二丁

畠 二段

屋敷 一所

一筑後國三奈木庄内

畠 一丁

一伊勢國大工田内

田 一町

右、注進如件、

嘉曆四年五月 日

平重名(裏書)
(裏書)

(本文書寫字誤脱多シ、入来院文書ニヨリ補訂ヲ加エタリ)

1519の1

『山田氏文書』

嶋津大隅式部孫五郎入道々慶子息藤原諸三郎丸重言上

薩摩國谷山郡山田・上別符兩村以下地頭職安堵事

副進

三通御教書案

右、云當知行之篇、云被支申仁之有無、可被尋注進之由、

爲仰【和泉元祖】嶋津三郎兵衛尉「實忠」嶋津三郎兵衛尉「實忠」之處、于今無音之上者、任傍例、

爲預御注進、重言上如件、

嘉曆四年六月 日

【此判ウラニアリ】
(花押)

【和泉忠氏譜中】

1519の2 匪独實忠、探題別致鮫島彦次郎入道蓮道・智覽郡司四郎

忠世書亦如之、各皆注進遷延、六月、諸三郎丸忠能上表、

復請之、

1520 『山田文書』

大隅式部孫五郎入道々慶申候當郡内山田・上別符兩村地頭職安堵事、御使節之由承及候、於件地頭職者、以和与之儀令治定、得分等兩方預鎮西御下知候之處、如所務管

領、子息相傳之條、存外之次第候、仍御下知并和与狀案

文進之候、御注進此等之子細候者、爲悅存候、恐々謹言、

七月一日
【嘉曆四年秋】
【谷山五郎實忠法師】
沙弥覺信(花押)

謹上 智覽殿

【谷山五郎入道譜文】

【二五二九の二号・一五二〇号文書ハ底本ニ欠ク、鹿兒島県立図書館本ニヨリ補フ】

1521 「在伊作家文書中」 「伊作家二代宗久譜中正文有之トアリ」

薩摩國比志嶋孫太郎忠範法師法名与大隅左京進宗久法

師法名道愍代道慶相論追捕刃傷打擲以下事

右、守護人退座之間、所有其沙汰也、爰佛念、則宗久令

請所比志嶋名惣地頭職致所務、去嘉元四年正月廿七日、

差遣數百人大勢於佛念許、押取稻參佰七拾余束・米佰三

拾余石・錢拾三貫文・小袖十八・其外色々資財物、刃傷下

人藤四郎男、令打擲太郎以下所從等之由、備進追捕物注

文并下手交名等、可被行其咎之由、雖申之、胸臆不實之

旨、道慶論申之處、不立申實證款、是一、且彼比志嶋名

事、爲地頭進止之否、前地頭大炊助入道教佛与佛念相論

之處、教佛他界之間、彼跡下野前可入道道義相續知行之

處、道義亦死去畢、教佛存生之時、狼籍有無事、今更不

1522

〔臺明寺文書〕

可及沙汰之由、道慶所申、亦以非無子細欵、是二、加之、如道慶所進四月廿三日付延慶佛念于時狀者、伊作殿比（余久）志嶋惣地頭職、爲請所知行之時、就被致非法狼籍、雖訴申、御口入之間、止訴訟畢、向後不可有子細、且奉行所仁毛、此樣可申入泰兵衛入道殿云云、止訴訟之旨、先年乍出狀、立還及紆訴之條、無謂之由、道慶申之處、不實之旨、載重狀之間、於引付之座、被披見之處、爲私和與之間、難被許容云云、而於彼狀者、亦奉行山城彦太郎盛倫披見之由、道慶雖申之、盛倫者在鎌倉之間、不及被尋問、然而始則不實之由申之、問答之時、亦承伏之上、追捕狼籍爲實事者、爭依他人口入、輒止訴訟之由、可出狀哉、不實之條、令露顯欵、是三、然則、所被弃捐佛念訴訟也者、依仰下知如件、

嘉曆四年七月五日

修理亮平朝臣（英時）（花押）

〔統目異判〕（花押）

仰給候主丸名内竹原田公事等間事、就于當知行令勤仕候條、國衙傍例候、次先祖之狀事、曾令存知候、恐々謹言、

1523の1

〔山田氏文書〕

〔嘉曆四〕
七月廿日
沙弥覺阿（花押）

大隅式部孫五郎入道之慶子息（忠能）諸三郎丸申、薩摩國谷山郡山田・上別符兩村地頭職安堵事、重申狀如此、早云當知行之實否、云支申仁之有無、可注申之由、先度被仰訖、早速可被申左右也、仍執達如件、

嘉曆四年七月廿七日
修理亮（英時）（花押）

嶋津三郎兵衛尉殿（実忠）

1523の2

〔和泉實忠譜中〕

七月二十七日、探題英時致實忠書、令以示右狀、復促速報、

1524

〔高岡士河上氏藏〕

薩摩國橋口次郎入道道一女子大藏氏代道圓重言上（家光）

同國河上平次郎入道跡又次郎入道道違背數ヶ度召文、不（家光）

及參陳上者、欲蒙御成敗、河上名内田園等事、

副進

三通御教書安（案） 二通先進早、

右、又次郎入道召文違背至極之上者、任定法、爲蒙御成敗、重言上如件、

嘉曆四年七月 日

〔道鑑公御譜中〕

〔正文在田布施衆二階堂三左衛門定行〕

〔校正了〕

隱岐（二階堂行忠）三郎左衛門尉法師（法名）代顯雄申、薩摩國阿多郡北

方内高橋郷御所用途事、

右、如所進被下（二階堂行忠）隱岐入道後家之正應五季十二月七日関東

御教書者、異賊警固事、嚴密有沙汰之上、任申請、可令

差下子息（兼行）三郎左衛門尉於所領阿多北方云云、如被宛同人

之永仁貳季十二月廿七日同御教書者、薩摩國阿多北方年

貢事、當所之外、無知行地之處、依異國警固、差下子

息云々、仍所有御免也云云、如尼忍照正和三年二月廿八

日置文者、薩摩國阿多北方御所用途佰伍拾貫文每季仁鎌

倉江沙汰志滿伊良須留登雖登母、故左衛門入道殿（兼行）鎮西警

固仁依天御免阿留上者、高橋能郷仁每季柒拾伍貫文仁當

留用途於波、尼一期能後者面々庶子知行能分限仁隨天、

彼用途於惣領能方江可弁也、何母孫多利登雖登母、故三郎

左衛門入道能身仁向天御免阿留間、尼賀心仁任世奴仁依天、置文於加樣尔書置候也、若懈怠乎致佐牟輩者、下地於可

申給也、又庶子等咎無加良牟於惣領方与利煩和須滿志幾也云

々、捧彼狀等亡父三郎左衛門入道（兼行）忍、爲異國警固下向

之間、依其勞、當方御年貢蒙御免之間、祖母忍照書置子

細之處、庶子等對捍之上者、任誠句、可被付下地於惣領之

由就訴申、嘉曆貳季十一月以後度々遣召文之上、仰市來

孫太郎時家、尋問難澁實否處、如執進一分庶子近江四郎

左衛門尉後家代道阿今季正月廿八日請文者、彼御所用途

事、致沙汰、請取明白候、將亦正員在鎌倉候、企參上可

明申云云、所詮者、道阿進請文之後、于今不參、不遁難

澁谷之上、帶返抄云云、可致沙汰之條勿論坎、然則於件

用途者、遂結解、有未進者可究濟矣者、依仰下知如件、

嘉曆四季九月廿日

修理亮平朝臣（英時）（花押）

『山田文書』

大隅式部孫五郎入道々慶子息（忠能）諸三郎丸申、薩摩國谷山郡

山田・上別符兩村地頭職安堵事、道慶當知行之間、讓与

諸三郎丸之條、無異儀候、又無支申仁候、此條若爲申候

者、日本國中佛神御爵於可罷蒙候、以此旨、可有御披露候、恐惶謹言、

嘉曆四年九月廿五日

〔此判裏ニアリ、和泉殿判トアリ〕
左兵衛尉實忠(花押)

〔下野三郎兵衛尉請文ト上書ニ有之〕

1527

九月、前此實忠任左兵衛尉、至是二十五日呈探題書、答執達狀、因誓曰、若此渝詞、神佛其殛之、

1528

『山田氏文書』

大隅式部孫五郎入道〔宗久〕慶子息諸三郎九申、薩摩國谷山郡

内山田・上別符兩村地頭職安堵事、去五月廿三日御教書

謹拜見仕候畢、抑谷山五郎入道覺信捧和与狀并御下知案

文、令申子細候、仍覺信書狀謹令進上候、此條偽申候者、

日本國中神祇冥道御爵可罷蒙候、以此旨、可有御披露候、

恐惶謹言、

嘉曆四年九月廿七日

〔知覽〕
平忠世請文
〔此判裏ニアリ〕(花押)

〔上カキ〕
〔智覽院郡司請文〕

1529

〔在文庫伊作家文書中〕「伊作家二代宗久譜中正文有之トアリ」

薩摩國日置北郷弥勒寺庄下司宗太郎眞忠与當郷一方地

頭大隅左京進宗久法師〔法名〕道惠代道慶相論同郷内吉利名事

右、訴陳之趣、子細雖多、所詮、眞忠、則於當名者、爲

日置庄内、本主日置太郎家綱以來、帶藤内民部遠景下文

以下御公事勤仕狀等、代々知行之間、有限所務之外、不

可相綺下地之處、道惠号地頭、押領之上者、可預別納下

知之由、訴之、道慶亦伊作庄日置北郷下司職者、爲領家

進止所職之條、重澄・弘純・有純等狀分明也、而於地頭

職者、道惠高祖父忠久、建久三年預御下文之後、領家地

頭雖爲所務各別、就令折中下地、預御下知狀之間、當名

者爲北郷内、一圓知行之旨陳之、爰如眞忠所進文治五年

七月十九日藤内民部遠景下文者、薩摩國日置庄下、當庄

地頭大江家綱訴申、万陽房覺弁不帶一紙狀、恣相語新田

宮神人等、令追出庄内事、右、家綱相傳譜代所知、横依

望申、不決子細、成与下文於新田宮執印哉、先馬允宗信

中宮政所等、又相具神人、被追出、難堪愁狀者、九州地

頭者、鎌倉殿御成敗也、何不帶彼御下知、相語神人可追

出重代地頭哉、早令安堵、於有限本所年貢等者、任先例、

可令動濟云云、如元久二年十月五日関東御教書者、薩摩

國住人日置江太家重、當時雖無訴申之旨、入鎌倉殿見參

訖云云、如遣眞忠曾祖父弘純、建長四年五月六日當國守

護人大隅守忠時法師法名道佛狀者、京都大番役六箇月勤仕畢、

於歸國者可任意云云、如違同人文永九年八月十一日大宰

少貳入道實能覺惠狀者、被下關東御教書異國警固事、博多津

番役勤仕畢云云、如違眞忠祖父日置兵衛太郎賴純正應二

年七月十五日、永仁二年七月卅日、同四年八月卅日、同五

年七月五日、同年六月卅日、守護人下野前司入道義時忠宗、

狀者、異國警固番役令勤仕畢云云、如道慶所進文

治三年三月日重澄寄進狀案者、相傳所領三箇所、在薩摩

國內伊作并日置北郷、同南郷外小野、副進次第調度文書

等、右件所領田島等者、年來嶋津庄寄郡也、而百姓逃散

之間、庄國兩方課役難勤仕之間、於今者寄進御庄領訖、

下司郡司惣公文職者、以重澄子孫不可有相違云云、

取取 如同四年十月日立券狀案者、薩摩國寄郡內殿下新御

領四至事、右、伊作郡日置北郷、除弥勒寺庄、右、依

重澄寄進證文、被成下政所下文并國司廳宣訖、任庄國施

行之旨、立券如件云云、取要 如文永六年五月十三日有純

起請文案者、伊作新庄下司、同名田島以下事、領家進止

之條、關東御下知炳焉也、而於彼名田等者、自領家宛賜

畢、自今以後、爲領家、不可有不忠之儀云云、取證 如建

治三年七月日弘純起請文案者、爲本所不可有不忠條、

一乍給下文、致不忠之時者、可被召所職事、右弘純雖被

改易所職、不誤之由依陳申、如元還補當職之上者、全以

不可有不忠云云、取要 如建久三年十月廿二日御下文者、

薩摩國阿多四郎宣澄所領谷山郡・伊作郡・日置南郷・同

北郷新御領名田等事、彼宣澄者、平家謀叛之時、張本其

一也、仍令停止件職訖、早可地頭知行云云、如弘安八年

四月廿七日關東御下知狀者、嶋津下野前司久經子息久忠壽

丸代了意与八幡宮領薩摩國日置弥勒寺庄下司弘純、相論

弥勒寺庄事、右如弘純所進文治立券狀并建永・嘉禎手繼

狀等者、日置庄領与弥勒寺爲各別之由所見也、隨而如寶治

以後守護人忠時同代官等狀者、弘純爲弥勒寺庄下司之間、

宛其身、令勤仕大番以下公事之條、無異儀欵、加之、日

置者嶋津庄也、其内弥勒寺者八幡宮領也云云、取證 如建

久八年圖田帳者、日置庄三十町北郷内下司家綱云云、如

文治三年九月九日御下文者、下嶋津庄、可早停止藤内民

部遠景使入部、以庄目代忠久爲押領使、致沙汰事、右、

号惣追捕使遠景下知、放入使者、冤凌庄家之由、有其聞、

事實者、甚以無道也、自今以後、停止遠景使入部、以彼

忠久爲押領使、可令致其沙汰云云、如元亨四年八月廿一

日領家代憲俊注文者、伊作日置文書事、文治寄進狀案、

日置下司弘純起請文案、立券庄号文書案、所進地頭方也云云、如正中二年十月七日関東御下知狀者、嶋津庄薩摩方伊作庄、同日置北郷雜掌憲俊与地頭大隅左京進宗久代道慶相論所務事、右、如去年八月廿一日連署和与狀者、伊作庄日置北郷下地田島山野河海檢断所務、領家一乘院雜掌憲俊与地頭大隅左京進宗久代道慶、下地中分以下和与條之事、日置北郷條々、一兩方堺事、右堺者、融于東西所立也、仍西者自帆湊海、向東至于河登苔田橋(考)、自彼橋南假屋崎、東道於世戸江千手堂乃道於東江、自久留美野之大世多和、向東至于伊集院堺、但七曲道也兩方堅守此旨爲堺、北者爲領家分、南者爲地頭領、相互無異越、各一円可進止之條、同于伊作庄云云、自余者、於當名者、先祖家綱以來、勤仕京都大番、異國警固以下御公事、知行無相違之處、道惠号地頭、有限所務之外、致條々非法、剩押領下地之上者、任傍例、可預別納下知之由、眞忠申之處、於伊作日置南北郷下司職者、本主重澄、文治三年寄進領家訖、而重純跡有純、爲本所現不忠之間、被改易所職之時、建治三年書遣起請文於領家之間、自安堵本職以來、當名下司職者、領家進止之地也、將又、於谷山伊作日置南北郷地頭職者、爲平家沒收之地、高祖父忠久、建久三

年拜領訖、女子傳領之時、就雜掌訴訟、被付下司名主兩職於本所之間、地頭代々致越訴之刻、以和与之儀、依避与當庄内宮内・伊与倉・今田三箇村名主職於地頭、去正應六年、雖被成関東御下知、猶以所務相論不断絶之間、爲止向後非論、重差伊作日置兩方四至堺、令折中下地、正中二年預関東御下知訖、當名者一圓進止之上者、眞忠難敵對於地頭之由、道慶陳答有其謂、是、次伊作日置者、非沒收之地、本主子孫等、于今所令知行也、就中、谷山郡者、依惣地頭非法、被付所務於郡司訖、當名不可有差別之由、眞忠申之處、云相論之旨趣、云文書之議理、爲各別之間、非當名准據之由、道慶陳申之上、地頭進止之條、見先段、是、次如文保三年久長道惠訴狀者、隱蜜密當名百姓一人跡、令對捍其分公事云云、而沙汰最中、不相待彼落居、押領下地之間、中間狼藉之咎難遁之由、眞忠雖稱之、就抑留地頭得分令訴申欵、其上中分以前事、今更非沙汰之限、是、次如文治五年遠景下文者、下薩摩國日置庄云云、件吉利名者、爲當庄内、數代知行之間、道惠難進止之由、眞忠雖申之、彼日置庄者、爲北郷内弥勒寺庄事欵、隨而如狀者、新田宮執印并先馬允宗信中宮政所等、相具神人、令追出地頭大江家綱之條無謂、早令安

堵、於有限本所年貢課役者、可令弁濟云云、弥勒寺庄者、依爲八幡宮領、當宮執印等、進止下地之由所見也、當名者、爲本所一乘院領之處、以領家各別弥勒寺庄文書、擬令混領之條、無其謂、加之、眞忠始則爲右大將家御下文之旨申之、後亦遠景下文之由稱之、前後參差之詞、巨兩端之上、非論所事、是四、次曩祖家重帶元久二年御下文、知行當名之由、眞忠雖稱之、如狀者、日置江太家重、入鎌倉殿見參畢云云、無論所名字之上、難稱御下文、是五、次道惠祖父道佛、爲當國守護人加催促之間、弘純令勤仕京都大番役訖、其上或大宰少貳入道覺惠、可致博多津警固之由、成与奉書、或守護人道義、永仁以來連々催促警固役畢、是則爲當名各別證跡之由、眞忠雖申之、如弘純所給弘安八年閏東御下知狀者、於寶治以後守護人忠時同代官等狀者、弘純爲弥勒寺庄下司之間、宛其身、勤仕大番以下公事之條、無異儀云云、難号吉利名證文、是六、次日置者惣名字也、其内北郷吉利弥勒寺古垣山里以下名々、家綱跡庶子等、于今知行之上、如道惠祖父久經所給建治御下文者、日置庄云云、背自身帶持狀文、以當庄下文、爲弥勒寺庄事之旨、道慶申之條、無謂之由、眞忠雖申之、北郷者、文治四年被立券庄号之後、或号庄、或稱郷云云、

而被載久經所給御下文之日置庄者、北郷事歟、所載眞忠所持遠景狀之日置庄者、爲弥勒寺事之由所見也、是七、次重澄寄進狀并有純・弘純起請文事、爲伊作庄事之間、非論所證文之上、無正文之由、眞忠雖稱之、伊作日置共載一紙狀、重澄寄進領家訖、有純・弘純又爲重澄跡之間、不可有差別、就中、於彼狀等者、依領家帶持、雜掌憲後相副注文、出帶之上者、難稱案文之由、道慶陳謝之處、眞忠重無申旨之間、頗雌伏歟、是八、次如建久八年圖田帳者、日置庄三十町^{北郷内}弥勒寺、下司家綱云云、家綱非常名領主之條、分明也、而爲彼跡相傳來之由、眞忠申之條、令參差歟、是九、次文治遠景狀事、縱雖爲吉利名文書、同三年停止遠景使入部、以忠久爲押領使、可致沙汰之旨、預御下文訖、况遠景狀非論所事之間、難稱眞忠規模、是十、然則於當名者、停止眞忠濫訴、任正中御下知狀、道惠知行不可有相違者、依仰下知如件、

元德元年十月五日

修理亮平朝臣(花押)

〔親自撰判〕(花押)

〔端書〕
一六

可令早平重見領知薩摩國入來院内塔原郷田壹町・在家
貳字見坪付配分狀、事

右、以亡父澁谷孫三郎惟重跡、所被配分也者、早守先例、
可令領掌之狀、依仰下知如件、

元徳元年十月廿日

相模守平朝臣〔守時〕

1531
〔端書〕
一八

可早以平氏字領知薩摩國入來院内塔原郷田參段・在家
壹字坪付見配分狀、事

右、以亡父澁谷孫三郎惟重跡、所被配分也者、早守先例、
可令領掌之狀、依仰下知如件、

元徳元年十月廿日

相模守平朝臣〔守時〕

1532
〔端書〕
二二

可令早別當二郎丸領知薩摩國入來院内塔原郷田貳町玖
事、

段・在家玖字坪付見配分狀、事

右、以亡父澁谷孫三郎惟重跡、所被配分也者、早守先例、
可令領掌之狀、依仰下知如件、

元徳元年十月廿日

相模守平朝臣〔守時〕

1533
〔端書〕
一七

可令早鶴王丸領知薩摩國入來院内塔原郷田伍段半・在
家壹字坪付見配分狀、事

右、以亡父澁谷孫三郎惟重跡、所被配分也者、早守先例、
可令領掌之狀、依仰下知如件、

元徳元年十月廿日

相模守平朝臣〔守時〕

1534
〔端書〕
二一

可令早平重廣領知相模國澁谷庄寺尾村内田肆段在家貳
字、薩摩國入來院内塔原郷田陸町・在家拾貳字坪付見配分狀、

事、

右、以亡父澁谷孫三郎惟重跡、所被配分也者、早守先例、可令領掌之狀、依仰下知如件、

元德元年十月廿日

相模守平朝臣(守時)

1535

『公』
『三』
『端書』

可令早平重名領知薩摩國入來院內塔原郷田貳町玖段・在家玖字坪付見配分狀、事

右、以亡父澁谷孫三郎惟重跡、所被配分也者、早守先例、可令領掌之狀、依仰下知如件、

元德元年十月廿日

相模守平朝臣(守時)

1536

『入來院氏文書』
『端書』
『四』

可早以尼妙智領知薩摩國入來院內塔原郷田貳町伍段・在家伍字坪付見配分狀、事

右、以亡夫澁谷孫三郎惟重跡、所被配分也者、早守先例、可令領掌之狀、依仰下知如件、

元德元年十月廿日

相模守平朝臣(守時)

1537

『端書』
『一五』

可令早平內重領知薩摩國入來院內塔原郷田壹町捌段・在家參字坪付見配分狀、事

右、以亡父澁谷孫三郎惟重跡、所被配分也者、早守先例、可令領掌之狀、依仰下知如件、

元德元年十月廿日

相模守平朝臣(守時)

1538

『山田氏文書』

嶋津式部孫五郎入道之慶申、上野平九郎入道禪意背下知狀、不弁農具牛馬事、請文披露畢、於論物者、不日可糺渡、至罪科者、所被分召所殘之所領四分壹也、仍執達如件、

元德元年十二月五日

修理亮(英時)(花押)

智覽(忠世)又四郎殿

〔知覽氏高望王之子裔而平族也、王第七子白平良文、良文曾孫曰伊佐平次貞

時、其子孫米分領谷山以南給黎・指宿・顯雄・智覽・加世田・河辺等、各以其邑為氏、即其一也、古城主由米云、顯雄三郎忠長カ三男智覽四郎忠信ト云、忠久公就對ノ時ト也、二代次郎忠益・三代四郎忠家・四代四郎忠光・五代忠合、嘉曆ノ比ノ日記ニ、薩摩知寛院郡司平忠世トアリトミニ、忠世ハ又四郎トモ四郎トモ云タル筋ニテ、忠合ノ子弟ナラン、其子忠元ト云タルニアラスヤ、忠元ノ子ヲ知寛美濃權守忠泰ト云タル事ハ、下ノ建徳元年十一月ノ令旨ニ見ヘタリ、嘗テ佐多氏ノ譜中ニ季安君注シ置レシヲ、此ニ標注シ置候也」

1539 『比志島氏文書』

薩摩國比志嶋孫太郎忠範申、千与王女母子事、重申狀如
此、蒲生彦太郎背度々下知狀
渡之由相觸之、

載起請之詞、仍執達如件、

〔嘉曆カ〕

四年十二月十日

〔北条英時〕
修理亮(花押)

郷三郎右衛門入道殿

1540 『山田氏文書』
和与

薩摩國伊集院内田園等事

右、當院内式部孫五郎入道々慶知行田地壹町肆段内
一丁

渡、貳段柳田内、并園貳ヶ所内
一所号古江園、令取本錢返質券
貳段号世戸口、一所号源太迫、

之處、被致煩之間、雖經上訴、以和与之儀、此内田地四
段、柳田内貳段、并園一ヶ所、号源永代被去与之上者、永所止
訴訟也、号馬残田地一町、号馬蘭壹ヶ所、号古道覺不可相綺
之、道慶如元可有知行者也、若背彼狀、相互致違乱煩者、
可被申行其咎也、仍和与之狀如件、

元徳元年十二月九日 沙弥道覺代重俊(花押)
〔右裏書〕
「爲後證、奉行人所加署判也、

元徳元年十二月廿五日 縫殿允(花押)

三善(花押)」

1541 「在御文庫二番箱他家文書中」

隱岐三郎左衛門尉行雄法師〔二種卷〕代顯雄与同孫三郎定氏
行存〔兼行〕代妙性相論薩摩國阿多郡北方高橋郷事

右、訴陳二問答之上、於引付之座召決之處、〔捨恰〕所申枝

葉雖多、所詮、顯雄則彼北方者、祖母忍昭所領也、而爲異
賊警固、可差下子息隱岐左衛門入道々忍〔兼行〕于時在倫、於鎮西

之由、正應五年依被成御教書、道忍下向之刻、當方御年
貢每年佰伍拾貫文蒙御免之間、於下地者、雖分讓之、至

年貢者、可弁惣領之條、忍昭置文分明之處、定氏對押之
上者、任誠句、可被付下地之由、訴之、妙性亦忍昭遺領

者、數輩知行之間、於警固役者、各令勤仕畢、爭可弁御免年貢於惣領之由、書置哉、眼前之謀書也、可被奇捐濫訴之旨、陳之、爰如顯雄所進被下隱岐入道後家之正應五年十二月七日関東御教書者、異賊警固事、嚴蜜有沙汰之上、任申請、可令差下子息三郎左衛門尉於所領阿多北方云云、如被宛同人之永仁二年十二月廿七日同御教書者、薩摩國阿多北方年貢事、當所之外無知行地之處、依異國警固差下子息云々、仍所有御免也云々、如忍昭正和三年二月廿八日置文者、薩摩國阿多北方御用途佰伍拾貫、每年仁鎌倉江沙汰志進須留登雖登母、故左衛門入道殿鎮西警固尔依且、御免阿留上者、高橋郷仁每年柒拾伍貫文仁當流用途於波、尼一期乃後者、面々庶子知行乃分限尔隨天、彼用途惣領乃方尔可弁也、何毛孫他利登雖登母、故三郎左衛門入道身尔向天御免安留間、尼賀心仁任世奴尔依天、置文乎加様仁書置也、若懈怠乎致佐牟輩者、下地於可申給也、又庶子等咎無加良牟於、惣領方与利謂煩波須未志幾也云々者、後家女子知行之鎮西所領者、非警固要器之間、可被收公之由、正應年中有沙汰刻、當方者、就差下子息道忍、全知行之上、依彼勞効蒙年貢御免之間、存其由緒、於高橋郷分柒拾伍貫文者、可惣領行存之條、忍昭置文分

明之旨、顯雄申之處、以忍昭所給御教書、号道忍拜領之條、參差由、妙性雖稱之、可差下道忍于時在俗之旨、御教書柄焉之間、加了見坎、而於正應御教書者、被宛忍昭之處、不任意之旨、載置文之條、爲謀書之由、妙性又雖申之、依道忍下向、蒙御免之間、令書表子細坎、不足繆難、隨而如御教書者、年貢也、号置文者、御用途云々、名目相違之旨、妙性申之處、進御所之間、御用途之由、令書坎之旨、顯雄稱之、非無會釋哉、加之、異賊番役者、面々所令勤仕也、道忍一人難募其勞之由、妙性雖申之、無支證之上、彼役者、嘉元以來被止畢、忍昭死去者、正和年中也、本主存日不可各別間、不及沙汰、且件年貢可弁惣領者、尤可載子細於讓狀處、無其儀之旨、妙性雖稱之、如然事、就置文有沙汰之條、爲常例坎、將又彼年貢事不實也、可被召出御免以前證狀之由、依妙性申、如顯雄出帶正嘉二年十二月十六日関東御教書者、阿多北方御年貢錢貨佰伍拾貫文、每年無懈怠可進云々、子細柄焉之上、或忍昭蒙御免之由、稱之、或不存知之旨、妙性申之間、陳詞亘兩端畢、所詮、置文謀書之由、妙性雖稱之、於顯雄差申行存弟六郎左衛門尉成藤・又三郎行武所帶忍昭讓狀者、号一味之仁、妙性嫌申訖、至妙性引申近江四

郎左衛門尉後家所持狀者、就行存訴、弁彼用途之由、代官道阿依進請文、先日裁許之上、承伏狀不及召出之、宮内少輔入道妻者、載陳狀之間對決之時、被尋問之處、不知在所之旨、妙性申畢、旁難及類書之沙汰之上者、置文實書之條勿論欵、凡如彼狀者、致懈怠之輩分、猶惣領可申給之由、書載之處、以行存所帶祖母忍昭置文、定氏加謀作難之條、不遁其咎欵、然則任傍例、就誠句、於當郷内定氏分領者、所被付于行存也矣者、依仰下知如件、

元徳元年十二月廿五日

修理亮平朝臣(英時)在判

〔此写読ヘカラサル多シ、誤字多カラン、後人ノ考ニ供ス〕

〔本文書ニ階堂文書ニ正文アリ〕

1542

〔山田氏譜中〕

〔正文在山田七郎右衛門久通〕

大隅式部又三郎入道、覺与嶋津式部孫五郎入道、慶相論薩摩國伊集院内田園事

右、就訴狀尋下之處、兩方和与畢、如道慶今月九日狀者、

伊集院田地四段柳田世戸并園壹所源太者、所去渡道覺也、

有限公事隨分限可勤仕云、如道覺代重俊同日狀者、田

1543

〔正文在國分宮内澤氏〕

地壹町馬渡園壹所古江者、如元道慶可知行之間、不可相綺云者、此上不及異儀、守彼狀、相互可領知者、依仰下知如件、

元徳元年十二月廿五日

修理亮平朝臣(英時)(花押)

〔円也方畢矣、

有里名大下符米事、

右、大下符米、年來雖有員數相論、是又相互令承諾之間、

至于向後者、每年伍斗陸舛加桑丁可被弁濟之也、

同名方々御公事濟物等事、

右、御公事濟物等、雖有田數相論、是又相互令承諾間、

至于向後者、每年濟物并臨時所役、以陸町可被勤仕之也、

但於正宮御修理役者、任先例、可被勤仕之矣、

和与地御公事濟物等事、

右地者、溝部内本田七段分可弁勤之由、円也被申之上者、

可存其旨也矣、

以前糸々、承諾和与之子細如斯、若有變改之儀者、正八

幡三所大菩薩御罰各可罷蒙也、又子孫等中有破彼狀之輩

者、可爲死骸敵對之間、不可令知行爲治遺領、仍爲後日
和与之狀如件、

元徳元年十二月廿六日 修理所檢校酒井爲治(花押)

沙弥蓮意(花押)

(表紙)

貞久公
自元德二年
至正慶元年

前編
舊記雜錄
卷十六

1544

「正文在文庫伊作家文書」伊作家二代宗久譜中正文在手鏡トアリ」

坂本刑部房澄圓与大隅左京進入道道惠代道慶相論薩摩(宗久)

國伊作庄内坂本堀内屋敷例進布代錢捌百文事

右、訴陳三問答之上、於引付被召決畢、爰澄圓則於彼屋

敷者、爲坂本寺吉永名内、被止万雜公事之條、御下知以

下證文等分明也、而道惠爲地頭、非法張行之餘、備例進

布代、令押取錢貨捌佰文之条、無謂之上者、可被糺返之

由、訴之、道慶亦於當庄者、領家地頭代々所務相論不斷

絶之間、就令中分下地、正中貳年預関東御下知訖、坂本

寺者、爲領家分、預所知行也、至屋敷付布代者、任先規、

1545

『藤野氏文書』

致弁雖經年紀、不申子細之處、不知行之後、以前所務非法之由、訴申之条、紆曲之旨、陳之者、於當庄者、領家地頭就令折中下地、正中貳年十月七日、被成関東御下知訖、坂本寺爲領家方之条、無異儀欵、而中分以後、嘉曆貳年始、以前所務非法之由訴申之条、爲非據之間、所被弃捐澄圓訴訟也者、依仰下知如件、

元德二年二月廿九日

修理亮平朝臣(案時)(花押)

山田野孫六入道覺心申、肥後國天草嶋内山田□以下所々

事、今月八日御教書□如此、早任被仰下之旨、豊福彦

五郎入道相共、可致其沙汰之狀如件、

元德二年三月十一日

(親矩高啓)
掃部助御判

守護代

「右ノ親書」
「於正文者、爲後證付候畢、

元德二年三月十九日

覺□」

「在御文庫二番箱他家文書中糺合ス」

1546

『山田氏文書』

去年十二月十六日御教書今年三月五日到來、謹拜見仕候事、

抑嶋津式部孫五郎入道、慶申、薩摩國伊集院用丸名内原

田垣本證文事、道智【五郎太郎久親、法名道智也】亡父等、在津之時、彼文書之案三通所

持之間、進覽之、於正文者、仰于當惣領主大隅助三郎

入道【惣惣】助久、可被尋下候欵、此外文書等事、不令存知

候、以此旨、可有御披露候、恐惶謹言、

元徳二年三月十四日

【庚午】
伊集院助三郎忠親ノ弟
左兵衛尉助久請文
【名乗ノ下裡ニアリ】
(花押)

1547

『山田氏文書』

大隅式部孫五郎入道、慶子息諸三郎丸申、薩摩國谷山郡

内山田・上別府兩村地頭職安堵事、申狀如此、爲訴人不

終沙汰之篇云々、所詮、來月廿日以前可參決也、仍執達

如件、

元徳二年四月廿日

谷山五郎入道殿

【英時】
修理亮(花押)

1548

『藤野家文書』

『ウラ引返シニ』
「肥後國守護代請文 正貞執筆之」

去三月八日御教書并御施行謹拜見仕候了、
抑肥後國天草山田野孫六入道覺心申長嶋山田野以下所

地頭職事、任被仰下之旨、豊福彦五郎入道相共茲彼所、

令擬沙汰付覺心候之處、論人馬次郎入道帶兵具、引率數

多人勢、出向賀志多尾浦、就是非不可避退之旨申之、不

入立陣内候之間、不及打渡之候、若此条僞申候者、日

本六十余州大小神祇冥道御討可罷蒙候、此旨可有御披露

候、恐惶謹言、

元徳二年五月一日

肥後國守護代
藤原秀種請文
【裏判】
(花押)

1549

「水引權執印文書」

蓮花王院領肥前國長嶋庄雜掌左衛門尉重幸与庄下村地

頭薩摩十郎公【義字】有傳、代子息左衛門尉公村□条々、自余

略之、

一 下地事、

所務者、可依先例之間、任元久以往狀、於下地者、可

爲領家進止矣、取要、

文永三年八月廿六日

相模守御判
【時宗】

『右之通見ユレハ、長島ハ肥前國ニ屬セシ事明ケン』

(本文書ハ五〇七号文書ト同文ナレドモ再出)

(教付) 左京權太夫御判』

1550

『權執印文書』

(端裏書)

〔新田宮雜掌申 元徳二八五〕

薩摩國八幡新田宮雜掌道海謹言上

爲當宮御領阿多五大院田内弥平太入道跡名主大隅新三

郎(久賜)

〔(當米)〕違背領家御下知并執印催促狀、抑留四土陸段所

有差(合所)〔令言上公方也、然且依先例、且任領家御下知

并執印催促狀旨、欲蒙御成敗事、

副進

一通 鎮西御教書

守護差合所見備之、正和四年七月廿四日

二通 領家御下知

元亨四年八月廿八日 同年同月同日

一通 執印催促狀

延慶二年十月晦日

〔裏判〕 (花押)

一通 書生得分支配狀

一通 可弁書生得分等由名主蓮道狀

右、院田者、於毎年檢注地、書生權執印 重代職引募竿失段米等之

条先例也、爰彼院田名主田所次郎入道蓮道止檢注使入部、

有限り可弁書生得分等之由、自請申之以來、迄于當名主等、

致其沙汰之處、限久顯抑留彼得分物等之間、於社家公文

所相番訴陳、被注進彼狀等於領家、雖蒙裁断御下知、久

顯募武威、不致其弁之上者、且任先規例、且依御下知等

之道理、云々、抑留分、云向後段、可究濟之由欲蒙御成

敗矣、次四土陸段所當米久顯押取事、子細雖多之、所詮、

任相傳知行之旨、停止久顯濫妨、任元應御下知、熊丸可

令知行、所押取之所當米者、遂結解任員數、可究濟熊丸

之由、雖預領家御下知、爲久顯非分知行名主、不及其沙

汰之条、罪科不輕者哉、然早任彼御下知等之旨、爲蒙御

成敗、粗言上如件、

元徳二年六月 日

1551

『臺明寺文書』

奉寄進 大隅國曾野郡内萩峯田地事

右、田地者、雖用松名内、爲和与之地令相傳之間、印惠存

生之時、貳段者相博于垣本田、五段者擬臺明寺山王燈油

田寄進之、觀音堂前大丸先日觀音堂寄進之、所殘貳段半

者、敦直爲現當所願成就、重所寄進山王御寶前也、但至

于四至者、東崩渡小田繩手、南御幣田、西萩峯松尾横

道、北救案、於此內者、曾不可有他妨、万雜公事臨時課役悉止之畢、永代守此之趣、不可有相違、仍寄進之狀如件、

元德二年六月一日

大介兼稅所藤原敦直(花押)

〔「ロツラ」
「稅所介敦直寄進狀」〕

1552 『山田氏文書』

去五月廿五日御教書案并去月廿七日御催促狀、謹拜見仕

候畢、抑大隅式部孫五郎入道道慶子息諸三郎丸申薩摩國

谷山郡内山田・上別府兩村惣地頭職安堵事、道慶背御下

知井和与狀等、掠申御教書候之條、存外之次第候、所詮、

此等之子細、在津代官可明申候、以此旨、可有御披露候、

恐惶謹言、

元德二年壬六月二日

沙弥覺信請文

〔名乘ノ下裏ニアリ〕
(花押)

〔「上書ニ有之」
「谷山五郎入道請文」〕

1553 『山田氏文書』

大隅式部孫五郎入道道慶子息諸三郎丸申、薩摩國谷山郡

内山田・上別府兩村地頭職安堵事、就去五月廿五日御教

書、相觸谷山(覺信)五郎入道候之處、捧請文候、謹令執進上候、以此旨、可有御披露候、恐惶謹言、

元德二年後六月八日

沙弥定圓請文

〔「上書ニ有之」
「洪谷新平次入道請文」
〔名乘ノ下裏ニ有之〕
(花押)〕

1554 『貞久公御譜中』

〔正文在垂水衆遠矢喜之助〕

(花押)

鹿兒嶋郡荒田庄内用作田貳町事、自今年爲御恩所宛行也、早一円可領掌之狀、依仰執達如件、

元德二年六月十八日

道壯奉

伊賀法橋房所

1555 『全上』

後是年號、元弘 正慶 建武 延元 曆應 康永 貞和

觀應 文和 延文 康安 貞治 應安 永和 康曆 永

德 至德 嘉慶 康應 明德之交共六十箇年也、且復吉

野年號、正平 建德 文中 天授 弘和 元中亦雜乱于

其間矣、能不考之則宛如無次序、然若有看此錄人者、考

之於和漢合運、而宜詳可否、

1556 「山田氏文書」

〔山田忠盛〕

大隅式部孫五郎入道々慶子息諸三郎丸申、薩摩國谷山郡山田・上別府兩村地頭職安堵事、嘉曆四年九月十日御教書案并去月廿九日御催促狀、謹拜見仕候畢、抑此事、被成嘉曆四年五月廿三日御教書候之處、捧谷山五郎入道覺信支狀候之間、同以七月十一日令注進候畢、若此條偽申候者、日本國中佛神御罰可罷蒙候、以此旨、可有御披露候、恐惶謹言、

元徳二年後六月廿五日

〔朱カキ〕

〔鮫島彦二郎入道〕

沙弥蓮道請文

〔名乗下ウラニアリ〕

(花押)

〔上書〕
「鮫島彦次郎入道請文」

1557 「山田氏文書」

大隅式部孫五郎入道々慶子息諸三郎丸申、薩摩國谷山郡山田・上別府兩村地頭職安堵事、任被仰下候之旨、相觸鮫島彦次郎入道候之處、請文如此候、以此旨、可有御披露候、恐惶謹言、

元徳二年七月五日

〔朱カキ〕「渋谷弥平三入道」

沙弥元祐請文

〔名乗下ウラニアリ〕

(花押)

〔上カキ〕
「渋谷弥平三入道請文」

1558 「蒲生士山内氏文書」

ゆつりたてまつるさつまこほりのうち、ひられいし寺の水田畠地等事、

たゝし四しにをいてハ、ほんせうもん

〔にみえたりカ〕

右、件の寺りやうハ、兼義ちうたいさうてんの所りやうなり、しかるにやうしひこいぬまろに、代々のゆつりたてまつるの正文をくそくして、やうたいをかきて、ゆつりたてまつるところしかりなり、このうゑハ、きやうこうにをいて、またくた人のさまたけあるへからさる狀如件、

元徳貳年七月十八日 源兼義(花押)

1559 『鹿屋氏文書』

嶋津御庄大隅方鹿屋院雜掌兼信謹言上

欲早領家一乘院鎮西御代管領匠作退座上者、當院惣地頭名越尾張孫次郎殿代官、有限領家御進止地、令押作六十余町水田并在家山野等、抑留追年領家御年貢濟物

等上、適僅遂内檢地、重令押作三十余町水田・同在家

山野等、毎年貢濟物抑留間、彼是年積不可勝計上者、所詮、康元之年以后悉遂結解、云御年貢、云下地、

被糺返子細事、

副進

一通 地頭代官等年貢抑留注文

一通 同下地押領注文

右、於當院者、爲領家一圓所務、至下地者、并濟使進止也、佛神事之重色、公家武家之所課、異于他、仍雖爲地

頭名、領家年貢不可有對捍之由、貞應・嘉祿・寬喜代、

御下知炳焉也、況以領家御進止地、不相綺領家御使并弁

濟使、追年貢一向抑留之上、適所遂内檢下地等、同押

作之、令抑留御年貢、剩押止田貫社御米之間、年積不

可勝計、所詮、康元以後、悉遂結解、云御年貢、云下地、

可被糺返之由、爲蒙御成敗、粗言上如件、

元德二年八月 日

1560 注進

嶋津御庄大隅方鹿屋院惣地頭代官等、領家御年貢色、

濟物抑留并下地押領坪、在家山野等注文、

合

一押作田三十二町五段貳杖仲 四八代(斗)

御米一万一千五百六十一石七斗六舂、此内可除地頭加

徵米也、

是者令押作下地、不并御年貢坪之分、自康元之年至元

德二年、一年別百五十六石二斗四舂宛

一田貫社水田九町九段 六斗代

御米二千百九十七石八斗、除地頭得分半分定、

是者近年打止内檢、所令抑留年貢也、自康元之年至

元德二年、一年別廿九石七斗宛

一大窪田六段四丈 五斗代

御米百五十九石八斗、此内可除地頭加徵米也、

是者貞津守地頭代官、自弘安八年至元德二年、四十七

ケ年間一向抑留、一年別三石四斗宛

一上加伊多田二町二段文永二年取帳定 五斗代

是者當院定蓮寺別當兼地頭雜掌宰相殿明賢、正應三年

以後抑留分、一年別十一石宛

一馬庭田六段四丈 四斗代

御米十三石六斗

是者中村地頭代官、嘉曆元年以後初五ケ年間押作分、

一年別二石七斗二舛宛

一以有限領家御進止下地令押領之、不及領家御内檢坪之

田數六十餘町分、三斗代

御米一万三千三百二十石、除地頭加徵米定、

康元之年以後、一年別百八十石宛

一同野稻島百餘町 一三代

御米七千四百餘石

是者野原三十三ヶ所内、除當知行分定、康元之年以

後、一年別百餘石宛

一在家園之濟物代事

錢七千四百餘貫文

是者園百餘字分、康元之年以後、一年別百餘貫文宛

一久木本市地祈事

錢百十四貫文

是者下村地頭代官、自正和元年至元徳二年十九ヶ年

抑留分、一年別六貫文宛

一狩倉事

皮三千七百枚

是者領家御狩者打止之、地頭お爲宗、或狩倉跡在家
等仁不被相綺雜掌之間、所懸申于地頭也、康元之年

以後七十四ヶ年、一年別五十枚宛

都合

御米三万五千九十二石九斗六舛

錢貨七千五百十四貫文

狩皮三千七百枚

一押作田坪之事

但依為公田、每坪余田雖在之、
取帳面所注申也。

合

宮前田六反冊

上板吹田六反冊

鏡田九反冊

榎田三反

桑原田八反

樋渡四反

柚木田二反

霧田一丁二反

田代田八反

新開二反冊

柚木田一反冊

加津根田八反

小田代六反

唯念跡一丁二反

山口三反

田上田一丁一反

篠原三反冊

仲田六反

加之留二反冊

萩原田四反

始娘田三反冊

垣本二反

寒水尻四反

新開一丁

田代田四反

大池田四反冊

荻原新一反

小永田十

窪田十口

小前田一反廿

崩下十

雜色新口

助則新三反

河良田卅

始娘田六反十口

加那乃木三丁六反

上橋口三反

下渡瀬田四反

田部田一反卅口

須久保田九反

鳥越田一丁一反

口町五反十

池上新廿

河良新六反

下牛垣四反

上牛垣三反卅

大曲新一反

庄司口

永水取二反廿

平田一丁二反卅

福定七反

新上覺作一反十

上鼻田二反

牟呂田三反

得万新十

黒太郎作十

大窪田六反卅

上加伊多田二丁二反

北田二反

古世城田十

馬田六反卅切

渡瀬田廿

久木本廿

一田貫社田九丁九反

小牟多田五反

寺前五反

一押領田六十余丁村分

松本五反

樋渡五反

一藪注文

池尻二反卅

同坪一反卅

一所藤三郎則光藪

一所高井田二郎

曾田一丁一反

牛込一反卅

一所物太郎

一所新源太細工重房

同坪一反廿

荒蒔田五反

一所藤五別當

一所藤平次

新一反

新一反廿

二所下津岳

一所崩内行松弥二郎宗弘

同新一反

小種卅

一所紀三宗吉

一所田上名頭紀藤別當成久

小牟多田四反十

古河新口

一所狩窪紀藤別當清宗

池頭一反

松本二反卅

一所大明神

一所皮籠四郎清平

中嶋二反

松本卅

一所中村源太郎

一所大窪小藤太別當

- 一所福礼命婦〃
- 一所彌中次〃
- 一所時取庄司〃
- 一所瀨貫〃
- 一所皮籠弥太郎清房〃
- 一所佐加利山六太夫〃
- 一所六郎〃
- 一所田崎弥藤太郎〃
- 一所踏繼弥二郎〃
- 一所宮仕五郎〃
- 一所草七太夫利友〃
- 一所高岳宮原〃
- 一所得万原〃
- 一所馬庭新太郎別當〃
- 一所長崎權次郎〃
- 一所權次郎別當〃
- 一所弥平太檢校守圓〃
- 一所權大夫貞正〃
- 一所野間尼〃
- 一所窪田崎蘭河内太夫守近〃
- 一所幡麻房西信房〃 元弁濟使堀内
- 一所二郎大夫〃
- 一所吹上權別當則安〃
- 一所律迫梶取房〃
- 一所池上弥五別當〃
- 一所郷原武重〃 脇在家
- 一所細工房〃
- 一所小藤太郎〃
- 一所羽伊師弥太郎〃
- 一所田崎藤伴太郎〃
- 一所清水弥二郎〃
- 一所加津根田〃
- 一所新二郎〃
- 一所專當守重〃
- 一所加伊多田溝口〃
- 一所綱丁三郎〃
- 一所久木本源藤次〃
- 一所古世城〃
- 一所弥太夫〃
- 一所紙漉〃

- 一所老弥林七二郎國道〃
- 一所青木〃
- 一所王平末平〃
- 一所中三郎〃
- 一所大曲覺文〃
- 一所曾田河内五郎弘用〃
- 廿八ヶ字加横山木原定
- 笠野岩屋迫數字
- 桶工六ヶ字
- 茗荷迫數字
- 一所野原注文
- 立山原 平見〃
- 福岳 肥迫〃
- 紙漉 板吹〃
- 阿内木 行走(符之)
- 堀内 打門〃
- 北野 小牧〃
- 吉別府 鳥越〃
- 横山 田崎〃
- 一所 狩倉注文
- 一所五郎別當貞正〃
- 一所圖師覺印〃 四ヶ所
- 一所梶取房〃 多祿平六居
- 一所和田新太郎〃
- 一所當時地頭所池上
- 二所白崎
- 二所加那乃木
- 吉別府數字
- 行走數字
- 竹山 得万〃
- 牧内 谷田〃
- 茗荷迫 中〃
- 桶工 柿〃
- 大曲 笠野〃
- 白鷺 加那乃木〃
- 船岳 木原〃
- 郷 立神〃

1562

〔和泉氏系圖〕

忠氏

初實忠 三郎兵衛尉 左兵衛尉 豊後守 下野守

○四代之 太守下野守忠宗公之二男也、

○建武年間、高越後守師泰・齋藤弥四郎左衛門尉利泰・

實忠三輩爲鎮西成敗職、在于筑前州博多也、

右、水田在家蘭之山野大略如斯、此外尚以押作在家以下在之、且注文如件、

1561

〔延時氏文書〕

(端裏書)

〔新田宮雜掌〕

八幡薩摩國新田宮雜掌道海重言上

同國延時又三郎入道(法也)不知(法也)背而度之御下知、令抑留當

宮御神拜内肆石御供米間、仰于使節澁谷又次郎入道覺

禪、雖尋問違背實否、恐于自專答、不及是非散狀、難

澁至極上者、任定法、被經御沙汰、欲蒙御成敗子細事、

副進

一通 御教書案數通先進畢、

右子細、先之言上事舊訖、然早任定法、被經御沙汰、爲

預申御裁許、言上如件、

元德二年九月 日

1563

〔和泉忠氏譜中〕

元德二年庚午、先是實忠任所仰神領者、不貢御供米、八

幡雜掌道海上表訴之、實忠既服、於是十月廿五日、探題

英時致實忠書、令以弁濟焉、

1564

〔日新公御譜中写在隈之城衆上村勝吉〕

八幡新田宮雜掌道海申、嶋津三郎兵衛尉實忠當宮免田

壹町御供米對捍事、

右、如解狀者、當宮常見立用内、勢万勤免田御供米、南

郷地頭實忠元亨三年以來對捍之條無謂、中間略之、任實忠

承狀(伏脱之)、遂結解、可令弁濟矣者、依仰下知如件、

元德二年十月廿五日

修理亮平朝臣御判

「此文書、和泉氏譜中ニアリ」

1565 『正文權執印藏』

薩摩國新田宮雜掌申、段米以下事、重申狀如此、先度催促之處、無音之者、所詮、來月廿五日以前、可明申也、仍執達如件、

元德二年十月廿五日

(英時)
修理亮御判

大隅新三郎殿

1566 「延時氏文書」

薩摩國八幡新田宮雜掌申、御神拜内神馬并供米等事、御教書并重訴狀如此、早任被仰下候之旨、可被明申候、仍執達如件、

元德二年十月廿六日

「東郷氏六世峯谷又次郎氏重入道」
沙弥覺禪(花押)

延時(法也)又三郎入道殿

1567 『水引執印文書』

薩摩國八幡新田宮雜掌道海申、當宮正月七日若菜御供米事、

右、供米者、爲當國給黎院所役之處、一分地頭給黎院三郎

入道保宇、去元亨三年以後抑留之旨、雜掌就訴申之、嘉曆三年七月七日、八月十七日兩度雖遣召文、無音之間、

同年九月廿九日以市來孫太郎時家、尋問實否之刻、如執

進保宇請文者、每年無懈怠致其弁、帶請取之處、掠申之条

奸曲也、將又不付本解之間、巨細不存知、乍給彼狀、可明

申云々、而保宇捧自由請文不參之間、欲被裁許雜掌之處、

沙汰依中絶、重相觸子細於論人、可注進之由、去年十二月

廿二日被仰時家之刻、相觸給黎院三郎入道之處、不及請

文之旨、今年八月廿二日時家進起請文訖、頗不遁難澁之

咎、然則於彼所役者、任先規、可弁勤者、依仰下知如件、

元德二年十月廿九日

(英時)
修理亮平朝臣(花押)

1568 『山田氏文書』

上野平九郎入道禪意与大隅式部孫五郎入道道慶相論薩摩國伊集院土橋名一分警固用途事

右、禪意則於福山田・馬渡・嶋廻田地三町余者、爲久得名

内、惣領主備前房隆賀知行之處、彼所役等無沙汰之間、

被經御沙汰之刻、隆賀依不合期、禪意先就經替之、於庶

子分警固用途者、可爲禪意計之由、隆賀出狀畢、而庶子

道慶抑留彼所役之上者、可預裁許之由訴之、道慶亦件田地等非久得名内、爲土橋名内各別知行之處、以他名所役

掠申之条、無謂之旨陳之、仍訴陳一問答之後、禪意爲訴人依不終沙汰之篇、雖遣還召文無音之間、以智覽院郡司

忠世重加催促之處、如今年六月三日忠世請文者、道慶申警固用途事、任被仰下之旨、雖相觸禪意、不及散狀云、

略讀詞者、禪意以久得名所役、懸申土橋名内田地之条、背理致欵、就中帶惣領隆賀契狀之由雖申之、不出帶正文

之間、旁爲胸臆之上、爲訴人違背召文之条、不遁難澁之咎歟、然則所弃捐禪意訴訟也者、依仰下知如件、

元德二年十一月十六日

修理亮平朝臣(英時)(花押)

1569

〔延時氏文書〕

薩摩郡延時名

交名注文事次第不同

吉富又太郎入道

延時孫三郎入道

延時
同四郎入道

同大夫房

東郷入道

東郷
同妹中左

同六郎入道

在國司入道

山田九郎入道

白濱五郎入道

山口平四郎
右、注文如斯、
元德二年十一月 日
大迫孫八

1570

『載山田譜』

〔上カキ〕
三問狀案 諸三郎丸申安堵事

谷山五郎入道代重狀

元德二十一年廿五日

谷山五郎入道覺信代教信重言上

欲早召出式部孫五郎入道、慶子息諸三郎丸、自稱延應狀、且被處惡口奸訴罪科、且任御下知并和与狀冒、蒙御成敗、薩摩國谷山郡内山田・上別府兩村惣地頭職安

堵所望無謂子細事、

右、當郡、可以下所職所帶等者、爲覺信先祖開發領主、去建仁三年十二月廿五日令拜領東御下文以來、代々無

相違之子細、先進狀等炳焉也、爰諸三郎丸先陳云、高祖父豐後守忠久拜領之處、信忠覺信曾祖爲忠久芳志令知行之条、

忠光覺信祖父延應二年狀顯然也、覺信亡父祖代々芳志之跡、捧存外推參之支狀云々、取詮、此条覺信曾祖父信忠當郡補任之

条、御下文等嚴重之處、爲忠久之芳志、令知行之由、構申不實之間、可被召證跡旨雖申之、不及出帶、以傍輩爲忠

久芳志當郡知行之由載陳狀之上者、偏稱恩顧之由欵、爭可遁其咎哉、次重陳狀、云掠論之由緒、云芳志之子細、非當論肝要之間、所闕筆也云、就之案之、云延應狀、

云芳志所見、爲不實之間、寄事於關東御下知、雖遁申之、召出彼狀、被經細碎御沙汰、欲被處奸訴惡口罪科、次同（云脱少）陳覺信者、爲外戚縁者之條、無子細、諸三郎丸者忠久正

流也、不可依年少、爲覺信郡司身支申安堵、止地頭名字、可被召得分讓之由載訴狀之條、自由推參過分云、此條

於國領者、以郡司号地頭、至庄園者、以下司稱地頭、所謂本補地頭是也、就中右大將家御代、文治年中諸國守護地頭職御進止之間、被補御家人、承久以來被定新補率法訖、仍本新共以關東御成敗也、覺信或宛給郡司職御下文、或預別納御下知、令兼帶兩職、度々抽軍忠、所領勲功賞也、忠久者令拜領惣地頭職之間、令取段別五升加徵米之外、不相綺下地者也、覺信者爲開發領主、預關東御下知御下文等之上者、何可有差別之儀哉、而諸三郎丸覺信爲郡司之身、自由過分推參之由、書載乎怪詞於陳狀之條、招其咎者哉、凡不謂内外戚、對於叔父致礼節者尋常法也、道慶書与和与以前讓狀於諸三郎丸、望申安堵、擬成後日煩之間、支申之條、何可爲自由過分推參之儀哉、爭可相

遁過言奸訴之咎哉、次同陳云、忠久守護地頭兩職拜領以來、云一圓領知之所々、云郡司名主相交之地、帶地頭職御下文等所知行也、覺信与道慶相論關東鎮西御下知和与狀等、皆悉山田・上別府兩村地頭之由、被載下畢、依何可載惣地頭詞之由可支申哉云、取此條如載先段、忠

久拜領者惣地頭職也、非下地領主之處、不載惣字、如下地管領之地頭、差四至墾於讓狀、可望申安堵之條、奸謀至極也、隨而相分當郡惣地頭職之後、忠實・道慶等未給安堵御下文之上、一向止惣地頭之綺、定米錢員數、於郡司所倉本可請取之由、就出和与狀、被成御下知之間、道慶有限得分物可請取之條、狀文分明也、不載惣地頭詞、申給御外題、稱後日御下文、擬破申和与御下知之條、造意顯然也、加之、不可載惣地頭字之旨令申上者、奸曲之至爲顯然者哉、次兩村事、非永代和与之儀、暫令契約得分云、是亦奸謀也、如和与狀者、一向止惣地頭之綺、定米錢相互不可有變改、爲將來龜鏡云、仍任彼狀、被成御下知之處、非永代和与之由構申上者、奸謀亦以露顯畢、又云、穎娃郡地頭御外題覺信承伏畢、穎娃谷山共道佛一人跡云、此條道佛知行者惣地頭職也、於下地者穎娃谷山各別領主之間、不可混亂之上者、何可号承伏哉、次

覺信不弁彼得分、而道慶不請取之由、企逆訴云々、此条道慶爲破和与、不請取得分之間、就訴申、御沙汰最中也、次掠給御教書、兩年不付之由事、即雖付之、不及陳答之間、申付度々御教書畢、不可依胸臆浮言、又云、支申地頭職安堵之条、云約月以後、云非分違乱、露顯之上者、於所務者、如本可被糺付道慶云々、此条諸三郎丸當

村讓得由稱之、於當御手望申安堵、以三番御引付御沙汰、可被糺付道慶之由、書載安堵相論陳狀之条、亘于兩樣訖、次支申安堵之条、不依違之子細、具于先訴先段、所詮、於惣地頭所務者、就和与被成御下知之間、諸三郎丸不可相綺之上者、依何可望申安堵哉、然早爲被停止非據濫訴、重言上如件、

元德二年十一月 日

1571 『山田文書』

嶋津式部孫五郎入道々慶申、薩摩國上野平九郎入道禪意不糺返農具以下事、請文披露畢、所詮、禪意背度々下知狀無沙汰云々、於論物者守彼狀、可糺渡、至違背之答者、先度被分召所領五分貳之間、參相殘畢、重壹分所被召上也者、仍執達如件、

元德二年十二月十日
智覽院又四郎殿（忠世）
修理亮（英時）（花押）

1572 「正文在文庫伊作家文書」「伊作久長譜中ニ在リ正文在卷本トアリ」

坂本刑部房澄円与嶋津大隅前司入道道意代道慶相論薩摩國伊作庄内井面田壹町伍段、馬門田壹町伍段、屋形園、香六園、市場在家等押領物事、

右、澄圓爲訴人、不終沙汰篇之間、雖遣還石文無音、仍以住吉神主政忠、重加催促之處、如執進去年五月十五日澄円請文者、道意申井面田以下押領物事、可進覽本解狀云云、彼請文以後、澄円令參對、捧訴狀訖、如狀者、於件田園等者、爲當庄坂本寺号吉永名内、預鎮西度々下知狀之處、道意背裁許、不糺返年々押領物之條、無謂云々、如道慶陳狀者、於當庄地頭職者、去建久年中、爲沒收之地、曾祖父豊後守忠久拜領以後、建長・弘安被付下司名主兩職於領家之間、地頭代々致越訴之刻、依避与當庄内今田・宮内・伊与倉三箇名於地頭、正應六年自預關東御下知狀以來、知行經廿余年之處、以彼三箇名内井面馬門以下田園屋敷等、爲坂本寺内之由、澄円正和二年始及訴訟之間、爲他名各別之子細、捧請文畢、而下地相論未断

之處、澄円又嘉曆元年、致押領物訴訟之條、一事兩樣之
 奸訴、難遁其咎欵、就中、領家与地頭所務相論依不斷
 絶、爲止向後異論、令折中當庄、北方者領家分、南方者
 爲地頭分、去正中二年十月七日、兩方預關東御下知畢、
 於件三箇名者、爲北方内、領家當知行之上、坂本寺同爲
 北方内之間、領家雜掌承信与澄円、於宰府相論最中也、
 澄円以領家知行井面田等、對不知行道意、及押領物訴訟
 之條、奸謀也云云者、於井面田以下者、爲坂本寺内之
 間、可被付之由、正和二年澄円乍致訴訟、下地相論未斷
 最中、及押領物訴訟之條、一事兩樣之旨、道慶所申有其
 謂欵、隨而於今田・宮内・伊与倉三箇名者、正應六年雖
 被付地頭、就所務相論、令折中惣庄之後、於彼三ヶ名者、
 爲北方内、正中二年、被付領家畢、而井面田等爲當名
 内、領家知行之處、澄円對不知行道意、中分以後經訴訟
 之條、奸曲之由、道慶所難不背理致欵、加之、訴陳二問
 答之後、澄円爲訴人無音之間、可遂對決之由、去月九日
 同廿一日、兩度雖成書下、于今不參、不遁難澁之咎欵、
 然則、所被弃置澄円訴訟也者、依仰下知如件、

元德二年十二月廿日

修理亮平朝臣(英時)(花押)

1573

『山田文書』

請取 日置伊作御文書正文等事

合

一通 正應五年十一月卅日伊作庄三ヶ名和与狀正文

一通 同六年正月十三日三ヶ名和与御下知正文但關東也

一卷 日置伊作下地中分狀正文

一卷 伊作日置下地中分ニ付天關東御下知正文

一卷 日置北郷内吉利名御下知但鎮西也、元德元年十月五日

一通 伊作庄坂本刑部房澄円申公事用途御下知正文元

德二年二月廿九日

一通 比志嶋孫太郎入道佛念檢断和与狀正文四月廿三日

一通 就彼沙汰鎮西御下知正文嘉曆四年七月五日

右、御文書等正文、自山田殿所請取也、但山田殿文書正

文請取ハ、以後日撰出之、可返遣之狀如件、

元德三年正月八日【辛未】 教日(花押)

道性(花押)

1574

『權執印文書』

薩摩國八幡新田宮雜掌道海申、免田壹町御供米事、重訴
 狀如此、不應裁許云々、無謂、任先下知狀、遂結解、可

被究濟也、仍執達如件、

元德三年五月十日

(英時)
修理亮御判

島津下野三郎兵衛尉殿

「実忠ノ事、後忠氏也」

1575

「和泉忠氏譜中」

三年辛未五月、實忠雖命以徵通租、佃者不辨、雜掌道海復訴探題、於是十日、英時又致實忠書、令究濟之、如去年文、

1576

『權執印文書』

(端裏書)

「新田宮雜掌」

薩摩國八幡新田宮雜掌道海重言上

嶋津三郎兵衛尉實忠令對捍當宮免田壹町御供米間、可被弁勤旨、就于訴申、以去年^{元德}十月廿五日、預御下知處、送而兩年不被遣其道^二上者、任定法、被經御沙汰、欲糺賜年之抑留御供米等子細事、

副進

一通 御下知要段

右、御裁許先訖、然早爲糺賜年之對捍御供米等、重言上如件、

元德三年五月 日

『和泉實忠譜中』

1577の1

六月、免田通租未辨、道海復訴如左、

1577の2

(端裏書)
「新田宮雜掌」

薩摩國八幡新田宮雜掌道海重言上

嶋津下野三郎兵衛尉實忠背度之御下知、于今不被遣其道^二上者、任定法、被經御沙汰、欲糺賜年之抑留物、當宮免田壹町御供米等間事、

副進

一通 追御下知案

右、子細御裁許先訖、然早爲糺賜年之抑留御供米等、重言上如件、

元德三年六月 日

1578

「和泉實忠譜中」

七月、免田通租未辨、於是九日、探題英時致實忠書、令示訴狀復促究濟、如五月文、

1579

「正文在權執印」

薩摩國八幡新田宮雜掌申、免田御供米事、重訴狀如此、裁許之後雖催促、不叙用云々、無謂、任先下知狀等、遂結解、可被究濟也、仍執達如件、

元徳三年七月九日

(英時)
修理亮(花押)

(実忠)
島津下野三郎兵衛尉殿

「此文書、和泉氏譜中参照ス」

1580

『入來家臣武光氏文書』

讓与 三郎重兼所領所職事

一薩摩國高城郡吉枝名惣領

一同郡本万徳名内田園等惣領同弁濟使職

一同國宮里郷權二郎名惣領

一同郷清水寺別當職免田園山野等

一同國三番在廳職 在給田并牛屎院日置南郷書生等國領園二ヶ所

一蒙古合戰勲功賞筑前國七隈郷田園等

右、所帶所職等者、日妙重代相傳無相違者也、仍相副代

と手繼以下本證文等、子息重兼、限永代讓与畢、於所

當公事等者、任先例、可令勤仕、五郎三郎兼久、所分

田園等者、御公事配分之外、不可成違乱、仍爲後代讓狀

如件、

1581

元徳三年七月十三日

沙弥日妙(花押)

『入來家臣武光氏文書』

(本文書ハ一五八〇号文書ト同文ニツキ省略)

1582

「宗久公 幼字生御譜中元亨二年松丸成慶生」

「写在二三卷」

ゆつりわたす

ちやくし生松丸分 (宗久)

さつまの國さつまこほり

やまとのゐん

いちくのゐんちとうしき

かこしまの郡同なかよし 母一期ののちちやうすへし

十二嶋のちとうしき

さぬきの國くしなしの保 上村、一期之後可令知行之

同くもんみやう

同みつなりみやう (光成)

しなのゝ國太田の庄内南郷

ふせんの國そゑたの庄副田三郎次郎種信跡

しもつさの國さむまの郡内ふかわの村(符河)

同こほりの内おしての村(押手)

同かいのはうの村(甲斐屋)

同しもくろささきの郷(下 黒 橋)

同ほんとの村(発 戸)

右、於所領等者、生松を嫡子として所譲与也、若生松男子なくは、舍弟生駒知行すへし、凡道鑑か所領相傳輩分者、子と孫とのすゑまでも、後家并女子に永代不可譲之、至一期分者、不及誠、又他人をも子にして、一期永代不可譲之、於背此讓狀仁之知行分者、立惣領仁可申給、仍爲後證讓狀如件、

元徳三年八月九日 沙弥道鑑在判
「任此狀、可令領掌之由、依仰下知如件、
元徳三年十二月五日 左馬權頭在判
相模守在判(守時)

「二之巻統目裏判」
(花押)(今川了俊)
「三之巻統目裏判」
(花押)(赤川満頼)

「和泉實忠譜中」
八月、比志島亦係實忠地頭任所、蓋幕府命也、前此幸圓

領之、於是二十日、代官津性致比志島彦太郎入道書、令示案文以知焉、

1584 「正文在比志嶋氏」

比志嶋地頭所務事、和泉殿御書下如此、案文進之候、仍申付幸円候了、此旨を可有御存知候、恐々謹言、

元徳三年八月廿日 沙弥津性(花押)
進上 比志嶋彦太郎入道殿

1585 『入來家武光氏文書』

さつまのくに(高城)たきのこほり吉枝名内亡父きやうゑのゆつりしやう、ようく候によて、ようとう十五貫文に、そりやうたけ(武 光)みつとのに、やうたいをかきてうりわたしまいらせ候了、かの狀ニのせられ候つほく、御ちきやうあるへく候、このうへは、自余のつほいけ、そうしてきやうゑのふんのうちとかうして、なかくけいは(鏡 邊)うのきあるましく候、よてのちのためにしやう如件、
元徳三年八月廿一日 しゃみやうにん(花押)

「道鑑公御妹ノ譜中」

「正文在渋谷如兵衛重増」

嶋津下野前司入道義女子藤原氏代一也申、質券田地代米事、被裁許氏女之處、肥前國土黒吉岡四郎入道寂念下知以後不叙用度催促之条、依不遁其咎、被收公寂念所領五分壹畢、而捧自由請文、尚以不遣其道之間、重所被分召所帶五分壹也、於彼米者、任先御下知、不日可被沙汰渡一也、仍執達如件、

元徳三年八月廿五日
(英時) 修理亮(花押)

大村太郎殿

1587 『調所氏譜中敦恒傳』

元徳三年辛未、先是主神司世承繼領堂園一所、守護私領 正枝頭内、間歲有入道寂意者、其妻稱受諸故自心、法辛欲爲謀書以侵領之、於是八月、敦恒乃據遠藤新左衛門尉所、嘗令補書有以所請、晦日、守護代盛光遂命敦恒補任之、如先世時、

『公文書』

1588 大隅國守護私領正枝頭内堂園一所事

右園者、於主神司重代相傳之所職、帶遠藤新左衛門尉補任狀如此、(不脱之)可相違之處、公文入道寂意之妻女、号有故

主神司自心讓、雖令(領カ)彼園、於寂意等者、謀書以下重科

重疊之間、國中訖、而爲敦恒本主望申之條、尤有其謂、於彼堂者、任重代相傳之道理、所補任敦恒也、至御公事等者、任先例、可令勤仕之狀如件、

元徳三年八月卅日
守護代盛光

1589 「宗久公御譜中」

(本文書ハ一五八二号文書ト同文ニツキ省略ス)

1590 『比志島氏文書』

(本文書ハ一五八四号文書ト同文ニツキ省略ス)

1591 『入来院氏文書』

讓与 (重勝) 松壽丸所

薩摩國入来院清數北方内村尾

四至 東限 河床下渡瀬上小谷河のほりニ切、

南限 あつきのさきをつはきはゑのさかひ切、

西限 大野田とつはきはゑのさかい、(切)

北限 大道を符宿河のほりニ切、

右所者、(重勝)定円相傳所領北方内也、爰松壽丸依爲幼少養子、

限于永代所讓与也、但爲方之御(年貢カ)御公事物代米參斗、
毎年ニ惣領方可弁之、其外色之濟物等所令停止也、然早
至後之將(采カ)無他妨可令知行領掌、仍讓狀如件、

元弘元年辛未九月十一日 沙弥定円御判

1592 「正文在國分宮内澤氏」

栗野若宮政所職事、所申付也、以別儀被申之上者、任先
例、可有其沙汰也、仍執達如件、

元德參年九月廿二日 預所光然判

正宮田所檢校御房

1593 「比志嶋氏文書」

召人姫太郎男可被預置候、即請取可給候也、無其儀者、
雖爲何ケ日、不可渡他所候、仍執達如件、

元德三 十月十日 本性(花押)

比志嶋彦太郎殿

1594 「公」

召人姫太郎男事、任御奉書之旨、暫預置候、仍請取之狀

如件、

元德三 十月十五日

義氏(花押)

1595 「權執印文書」

依京都御騒動之事、任御教書之旨、薩摩國御家人宮里郷
一分領主權執印良遲子息三郎二郎俊正令馳參、就御着到、
迄于今月十七日在津仕候、以此旨、可有御披露候、恐惶
謹言、

元德三年十月十七日 紀俊正在裏判

承了在御判

1596 「高岡土河上氏文書」

依京都騒亂御事、薩摩國市來院河上又次郎入道家久導乘馳參
博多、罷入着到、于今令在津候、以此旨、可有御披露候、
恐惶謹言、

元德參年十月十九日 沙弥導乘(花押)

進上 御奉行所

探題修理亮英時
承候了(花押)

1597

『清水土上原喜八家蔵』

就京都騒動御事、大隅國御家人日置一方領主上原弥次郎
馳參、令付御着到候迄、〔此年五月、北条高時殺實朝等、八月後醍醐帝並置ニ幸ス、楠正成兵ヲ
率、九月高時兵ヲ遣シテ笠置ヲ陥ス、此事也〕以此旨、可有御披露候、恐惶謹
言、〔筑前博多ニ参着ノ事〕

元徳三年十月十九日

仲原尚友
〔上原弥次郎尚友ニテ中原姓也〕

進上 御奉行所
〔探題北条修理亮英時ノ役所也〕

1598

『池端文書』

依京都騒乱御事、大隅國御家人称寝弥次郎清種當病之間、
子息別當丸馳参博多、罷入御着到、于今令在津候、以此
旨、可有御披露候、恐惶謹言、

元徳三年十月廿日

建部別當丸上

進上 御奉行所

承了(花押)

1599

『比志島氏文書』

依今度京都騒乱事、被馳参間、奉付着到、注進申公方候
了、仍執達如件、

元徳三

十月廿九日

本性(花押)

比志嶋彦太郎殿
(義絶)

1600

『志布志寶満寺文書古写』

ほうまんしちんしゆ八幡の御こく田事

ほりのうち まんところやしき

ねゝのやしき くない二郎かやしき

合 たうせつなかやしき

はりれなかやしき

たうちなかやしき 六郎次郎入道かやしき

右神田ハ、資清かりやうふん也、たゝしむほんのきこゑ

ありて、くけふけさうとうのあひた、くわんとうしやう

くんけよりはしめまいらせて、さかみのかうの殿てん中

より、わたくし資清かあをんたい平心中そくわんかいり

やうまんそくのために、きしんするところなり、よてき

しん狀如件、

元弘元年つちのとの十月 日 源(花押)

1601

『全』

救仁院志布志内寶満寺地主八幡宮御供祈所屋敷等事、前
□領主源太資清寄進之子細承了、以此旨、可執申候、恐

惶謹言、

『年間未考』

六月廿三日

範郷判

〔但横折〕

快賀在判

常門在判

1602

『小根占池端文書』

大隅國御家人祢寢弥次郎清種代清成重言上

同國佐多弥七親經背度之御教書、不及參陣間、仰谷山

〔寛徳〕

五郎左衛門入道、雖被相尋實否、不被申左右上者、任傍

例、被經御沙汰欲預御裁許、同國佐多村田地屋敷等事、

副進

三通 御教書案 二通先進了、

右子細、度々言上訖、然早任傍例、被經御沙汰、爲預御

裁許、重言上如件、

元徳三年十二月 日

1603

『臺明寺文書』

この狀をあいそへてまいらせ候へく候へとも、ないけん

にて候あいた、案文をかい、うら（義）を（封）ふうしてまいらせ

候うへへ、正文おなしかるへく候、仍うらふ如件、

1604

〔國史道鑑公〕

元徳三年十二月二日

犬王丸(花押)

(花押)

元弘元年辛未、是年八月改元元弘、自七月以前猶是元徳三年、秋八月九日、公賜

嫡子生松丸讓狀曰、他日以此爲證、生松丸後稱三郎左

衛門尉、又稱大夫判官、名宗久、生於元亨二年、母大友

氏因幡守親時之女、拋宗久 拋宗久 拋宗久十月改元、拋大日 拋大日 拋大日九月二十

日、北條高時立

光嚴院、同筑紫探題北條修理亮英時、聞京都騷動、傳檄

募兵以爲之備、於是小山田景範・邊牟木兵庫頭義英・

斑目行惠行惠政、河上道乘道乘家、等復至博多、拋比志鳥集人

門・河上次郎左衛門家藏文書、按太平記、元弘元年八月、關東使者至

京師、欲廢後醍醐帝、帝如笠置、使大納言藤原師賢登比叡山、招誘衆

徒、召補正成於河内、命以討賊、拋比志義英、義隆之孫也、拋比志

事、此云京都騷動者、正謂此也、拋比志系図、刃牟木義隆、冬十月十五日、公會關東諸將、圍赤

坂城、此事不見本藩國志、今拋參考太平記所引光明寺藏書殘篇

二年壬申新朝正、春三月七日、後醍醐天皇如隱岐、拋大日冬十二月一日、政所下文、使

公領周防國楊井莊領家職、賞功勳也、拋道鑑公旧譜、政所

職、本妙法院宮所領邑、按太平記、正慶元年三月八日、流妙法院二品親王於讚岐、則取其邑、可以知矣、

三年癸酉春二月三日、勘解由次官奉

後醍醐帝綸旨、以公爲日向國守護職、拋道鑑、閏月二十

四日、

後醍醐帝自隱岐如伯耆船上山、拋大日、夏四月一日、探題

北條英時贈公書云、近聞、此間戍兵多遁逃者、果有此

輩、罪死不赦、其俾薩摩國地頭御家人等聞知、卽日、

公以書命薩摩國地頭御家人曰、探題令九州士卒奉守護

人約束成館舍、茲時告示、拋道鑑、二十八日、勘解由次

官奉

後醍醐帝綸旨、以公爲大隅守護職、同上、二十九日、足利

高氏與公書、令應官軍、同上、五月七日、高氏克六波羅、

二十二日、新田義貞克鎌倉、拋太平記、太平記、島津四郎幸

帽子子、是日、高時合出決一死戰、四郎奮然躍馬而出、臨陣免胄、降

義貞軍、或疑島津四郎爲島津四郎左衛門尉時久、按拋島津支流系圖、

地頭職、又賜時久守護裝束、與公並稱爲兩島津云、不言其曾降新田義

貞、又不言其嘗事北條高時、爲長崎入道島帽子子也、引何以知島津四

郎、又言其嘗事北條高時、又按參考太平記、則何出川家北條家

南都本云、是日降義貞者、曾我奧太郎時久者也、又引曾我家譜云、曾

我奧太郎時助、事久明親王、其子小次郎時之、事守邦親王、今降義貞

者、疑是時之、觀此則島津四郎不詳果爲何人也、世俗又有島津四郎即島

津久通恐其或採俗說也、親詣春香、極弁其非、以爲當時薩摩有新納四

光嚴院廢、拋大日本史、二十五日、公與少貳妙惠、筑後守貞

大友具簡、近江守貞、宗法名、共攻探題北條英時於博多館、英時自

殺、拋島津支、統本朝通鑑、按統本朝通鑑、書是年五月丁巳及

公事者、然是日也公與大友少貳并兵、攻探題北條英時而殺之、見島津

系圖、又宗久、忠經及仲等從攻英時、有戰功、見道鑑公旧譜、島津

支流系圖、公之与攻探題館也、亦可知矣、蓋統本朝通鑑、探太平記、而

久法手下獲敵數人、拋伊作、島津諸三郎忠能獲英時從者次

郎兵衛尉、拋島津支、指宿郡司彦次郎入道名忠篤、斬門眞

余三、二階堂隱岐三郎兵衛尉行久、門于北門、踰垣而

入、斬獲數人、拋道鑑、具簡、親時之子、拋大日本史、大

年、忠能、忠繼之曾孫、拋島津支流系圖、島津忠行久、泰行

之孫也、拋二階堂氏系圖、二階堂泰行、見第四卷正忠五年、指宿

日平良文、良文曾孫伊佐平次貞時、子孫分領谷山以南給黎、指初

宿、顯註、知賢、加世田、河邊、薩摩郡等處、各以其邑爲氏、

長門探題北條遠江守時直、將兵赴京師之難、舟至阿波

鳴渡、聞六波羅鎌倉已滅、而還、至赤間關、又聞北條

阿波ノ鳴渡マテ来ル所ニ、京鎌倉ノ様子ヲ聞、島津少貳ニツキ峯僧正俊雅置合

英時後、乃因公及少貳、詣峯僧正俊雅、拋道鑑公旧譜、

帝外戚、拋前ノ國ニ流サレテ御座アリシニ、今ハ時メキテ唐玉ニ嘆キ申タリシカ

國人推俊雅、權領九州事見太平記、六月五日、

後醍醐天皇還京師、去正慶年號、拋大日、十五日、右衛門

征夷大將軍守邦薨、大日本史、義貞克鎌倉、守邦繼薨、至是而薨、按親王將軍、自承尊至守邦、四世而絕

建武元年甲戌春正月二十九日改元、拋道鑑、本史、二月二十一

日、左衛門權佐奉 詔、以 公爲薩摩國市來院名主

職、豐後國井田鄉地頭職、賞功勳也、拋道鑑、夏四月二

十八日、勘解由次官奉 綸旨、使 公領大隅國守護職、

同上、

（頭注）『季安按、正応六年兼時爲探題、永仁四年東政代之、恐前後誤』

先是、北條實政始爲筑紫探題、惟康親王傳、其後兼時、

政顯・英時、遞爲探題、拋道鑑、英時既死、罷探題、秋

九月十二日、足利尊氏高氏、改名公及少貳・大友、共鎮

筑紫、拋道鑑公旧譜、尊氏建武元年九月時公領筑前州今津・本

岡・比加利・上妻、豐前州曾井莊、豐後州井田鄉、筑

後州小鹿莊、於是、公徙博多居松口、時人號稱松口

殿、拋道鑑公旧譜、二十九日、雜訴決斷所下文、使島津

道惠領薩摩伊作莊南方日置北鄉南方等地頭如故、拋伊作

冬十一月二十六日、左衛門權佐奉 綸旨、以島津道惠

爲志田三郎左衛門尉舊領筑後國小家莊地頭職、賞博多

之戰功也、同上、又使島津式部孫五郎入道道慶領豐前國

草美彦三郎入道舊邑、道慶名宗久、忠能之父也、拋島

津支

『建武』二年乙亥春三月十一日、公以本田孫次郎久兼爲山門

院本田左衛門次郎親兼舊領半分代官職、拋道鑑、久兼、

本田氏之支族也、按本田氏繪譜、以久兼爲本田貞親之長庶子、

於是年、百五十年矣、則貞親、然貞親從得佛公、來於薩摩實文治二年也、至

之子、不應猶在、繪譜恐誤、十七日、左衛門權佐奉 綸旨、

以 公爲大隅守護職、拋道鑑、秋七月六日、公與本田

久兼書曰、君遣針原・横峯・内野之衆守京師館舍、自

三月一日至七月一日而畢、以告、同上、按是時諸國守護、

舍、薩摩館舍、在三条万里小路南、本田氏領針原・横峯・内野、見入

來家臣本田仁右衛門家藏文書、針原在出水鄉下船淵村、横峯在高尾野

郷高尾野村、又高尾野村、冬十一月十七日、左衛門權佐奉

綸旨、以 公補大隅守護職、同上、十二月十一日、足利

尊氏以下野四郎時久爲日向國新納院地頭職、子孫因以

爲氏、拋島津支流系圖、時久、道義公之子、故稱下野四郎、凡稱下

野某者做此、其余山田氏、伊集院氏、町田氏、子孫稱大隅某

今不悉注、時久爲守護代、或如京師、或如鎌倉、軍功居

多、尊氏嘉之、特賜守護裝束、與 公並稱兩島津云、

同上、是年、足利尊氏與新田義貞相惡、

帝右義貞、詔討尊氏、不克而還、拋太平記、尊

氏時居鎌倉、

元弘二年辛未三月、關東執權北條相模守高時

後醍醐天皇を廢し奉る、初め北條氏世々天下の政を執て

權を專にすることを惡給ひ、高時を誅せんことを謀給ふ、

事發覺、

天皇遁て笠置山に幸し給ふ、高時兵を遣してこれを攻む、城終に陥る、追て

天皇を捕奉り、廢して隱岐國に流し奉る、於是大塔宮護

良親王及び楠判官正成・赤松圓心則村・足利左馬頭尊氏

・新田小太郎義貞等、各 勅命を奉て兵を起す、

天皇亦隱州を遁出て伯耆國に幸し給ひ、天下に 勅して

高時を誅せしむ、

1606

「國分宮内澤氏文書」

一けんせん名へんさいしの御米のうち、おもてミやくに

のりやうハしのなしものゝちうもんの事

一米六斗六舛六合 六丈ぬの一たんきりかわ三枚 代三舛

くんしハシ

一米四斗二舛きのふさ 四丈ぬの一たんきりかわ二枚 きり

かわ一枚 代一舛 代四百文 代二舛

一米一斗六舛 さくわん

一米一斗二舛ちやうつかい こてかわ三そく

一米一石きやうし米分

一米四斗二舛 こくふんし

一あまつら五舛 代五斗 きてハシ

以上三石三斗四舛六合

六りに延分米伍石參斗五舛三合五尺

正月くにのまつり事のきやうせんの事、

中六せん 代米三斗

二月御りやうゑのきやうせんの事、

中一せん せう一せん 代米八舛

四月あんこのはしめのきやうせんの事、

中一せん せう一せん 代米八舛

五月三丹つゆきやうせん 代米八舛

中一せん 小一せん

六月きをんのきやうせん 代米二斗

中四せん

七月あんこのいてけんせんのきやうしせん 代米八舛

中一せん 小一せん

八月十五日きやうせん 代米二斗四舛

中三せん 小三せん

九月九日きやうせん 九日てん三反

百せんニ

十月てうかく 代白米三斗四舛

中二せん 小八せん

同十月十五日六日はまのきやうせん 白米二斗
白米八舛

小十せん くだもの五合

三本たて 白米一斗

やすまく もくたいしやうれう一本 白米五斗

中二せん 白米一斗

小二せん 白米六舛

さけ二舛 代米六舛

まくさ二束代 一斗一舛

以上如件、以上貳石六斗一舛

五わり延分米参石九斗一舛六合

一たいはんによのそうせん米一斗六舛

一さまいゝ一斗延一斗六舛

以上延参斗二舛

そうつかう延分米九石伍石八舛九合五尺

元徳三年五月十五日 沙弥道源

1607 『正文小根占池端氏蔵』

衾寝弥二郎清種申大隅國佐多村内田圃等事、去年十二月

廿一日御教書并重申狀如此、早任被仰下之旨、可被申左

右也、仍執達如件、

元徳四年三月六日 沙弥(花押)

佐多弥七殿

1608 『入來臣武光氏文書』

薩摩國高城郡本万徳名内田圃并上村名弁濟使職事

合本万徳名内田圃坪付

一田地分 藏町六段 原田内三段廿東依 下字津木並八常荒

段 柏木卅 松本内二段卅六代東依 野本内二反廿中

小舎人迫四段十 涂町本坪内五段 權二郎作二反卅

世戸口二段 丸田四段 飾迫卅 樋口一段廿中 大猿

田三段卅 小猿田三反卅矣

一圃分 一所孫太郎圃葦原 一所同外圃 一所新二郎圃

一所同外圃 一所弥太郎圃 一所中圃 一所原口圃

一所南圃 一所櫻井籠本圃 一所同外圃南依 一所草

三郎圃 一所榎丁三分一東依 一所借屋圃四分参矣
小四郎唐圃 東依

右、於弁濟使職者、以去乾元二年、奉沽却早、而本銭内

十五貫五百文依奉返候、於彼田圃并上村万徳名計弁濟使

職者、避給候早、仍所殘本万徳田圃并久能弁濟使職者、

任乾元二年沽却狀、如元武光殿可令所務給候、本万徳御

年貢内請料四百六十貳文、桑代百六十文、脚力用途八十

文、御米二斗三舛一合、大豆一斗一舛三合、并上村御年

貢等者、兼快可爲沙汰者也、所殘本方德御年貢内請料六

百九十三文、脚力用途百二十文、桑代二百四十文、御米

三斗四舛五合五夕、大豆一斗七舛一合、并久能分御年貢

錢百四十一文、米一斗九舛一合者、每年三月中、對於兼

快、可令沙汰給候、將又、就弁濟使職、御公事出來之時

者、於五分參者、可令勤仕給候、五分貳者、兼快可勤仕

也、每納者、以乾元沽券之狀、可被所務也、仍爲後日狀

如件、

元德四年三月十日

弁濟使兼快(花押)

1609 『正文在權執印』

田宮雜掌道海言上狀

國 八幡新田宮雜掌道海謹言上

同國薩摩郡光富又次郎入道頼円同子息 免田伍段

不知 自去嘉曆三年抑留當宮御立用内勢 田者、爲天

所當米每年壹石二斗伍舛無謂子細事 頼圓同子息孫三郎入道

長地久御祈禱料、自往古于 御祈禱忽擬令退轉之条、難

不知等、令對押彼免田 測神慮、然早被 抑留所當米、於向後者致未進懈怠

測神慮、然早被 抑留所當米、於向後者致未進懈怠

者、可 處爲預御裁許、恐言上如件、

元德四年七月 日

1610 『入来院氏文書』

阿波國大野新庄内北方田畠在家山海荒野八等分三方御使

分帳事、去文保二年燒失之時、彼正文粉失候之由承候早、

御尋候之時者、可申其子細候、仍連署狀如件、

正慶元年八月 日

願證(花押)

定意(花押)

定阿(花押)

重頼(花押)

1611 『牛屎文書』

讓与 嫡子太郎高元所

在薩摩國牛屎院惣領郡司職并永松木崎兩名下地事、

一永松名田畠在家以下里、荒野并山野狩倉等事、

一木崎名田畠在家等事、

副渡代、本證文并里、坪付事、

右、件所者、惠佛重代相傳之所領也、而高元爲嫡子之上、

親子之志異他之間、所讓与也、任先例、可令領掌也、且

郡内下地知行之輩、皆以惠佛庶子也、所領お他人讓券却

事出來者、可爲惣領沙汰之由、先祖代々置文明白也、可

令存知其旨候、次高元母并舍弟武元・元清・御房丸等仁

指色目、可讓与之地有之、不可有違乱、仍爲後代、以自

筆可書与也、將又讓与于高元之地、不可分与子孫、可讓

于惣領一人也、仍爲末代讓狀如件、

元弘二年十月十日

沙弥惠佛判

1612

「正文有之」

將軍家政所下

可令早嶋津上總介貞久法師法名道鑑領知周防國楊井庄領家

職妙法院宮御跡事

右、爲勲功賞、所被充行也者、早守先例、可致沙汰之

狀、所仰如件、以下、

正慶元年十二月一日

安主菅野

令左衛門少尉藤原

別當相模守平朝臣(北条守時)(花押)

右馬權頭平朝臣(北条茂時)(花押)

「右ノ正文、旧御番所御文書ニ番箱中御宝鑑三帖之中ニアリ」

1613

「貞久公御譜中」

「正文有之」

(本文書ハ一六一二号文書ト同文ニツキ省略ス)

1614

「載于山田忠經譜中」

谷山五郎資忠法師法名覚信与大隅式部孫五郎宗久法師法名道慶

子息諸(忠經)三郎丸相論條々

一 薩摩國谷山郡内山田・上別府兩村地頭職安堵事、

右、於彼地頭職者、道慶相副代々御下文以下證文、讓

与諸三郎丸之間、可預安堵御下文之由、就申之、有其

沙汰之刻、覺信依支申、所相番訴陳也、爰兩方所申枝

葉雖多、所詮、覺信則於當村者、爲重代相傳之私領、

郡司進止之間、右大將家以後代々帶御下文御下知狀等、

知行無相違之地也、而惣地頭者、有限加微檢断之外、

不相綺下地之處、諸三郎丸親父道慶非法張行之間、及

訴訟之刻、恐自科、可停止惣地頭綺之由、就出和与

狀、正中二年十月十日預下知訖、道慶書与彼下知以前

讓狀于子息等、掠給安堵外題、擬致違乱之由訴之、諸

三郎丸亦背閔東鎮西度々下知狀、濫妨地頭所務、抑留

得分物之間、多年雖及訴訟、覺信恐謀書以下罪科、依

致懇望、定地頭得分員數、令和与訖、於地頭職者、高祖父豊後守忠久以來代々預御下文之間、帶親父道慶讓狀、申安堵之處、覺信爲郡司之身、寄事於所務和与下知、支申地頭職安堵之條、無謂之旨、陳之者、於惣地頭者、加徵米以下得分管領之仁也、郡司者下地進止之上、可停止地頭綺之由、令和与、預下知之間、道慶縱雖分讓子息等、可配分地頭得分內歟、諸三郎丸号地頭、申安堵之條、無其謂之旨、覺信雖稱之、彼下知者、閔所務相論、爲郡司之沙汰、令弁濟地頭得分之由、所見也、更止地頭之綺、一円可郡司進止之条、無證據、一、次就道慶和与、預下知事者、正中二年十月十日也、諸三郎丸所帶道慶讓狀者、爲同四月十九日歟、以和与以前狀、掠給安堵、擬致違乱之由、覺信申之處、高祖父忠久跡所領、一族等知行之所々、云惣領分、云庶子分、大略郡司相並之地雖在之、皆以預地頭職御下文訖、就中、地頭与郡司和与所務、雖令契約得分物、就彼和与、支申地頭安堵之條、無其例歟、就覺信支狀、於被閔安堵所望者、向後不可有地頭之号歟、隨而讓狀前後覺信難綺申之旨、諸三郎丸陳答叶理致歟、是次如道慶狀者、山田・上別府地頭職事、相副亡父忠實讓狀并

閔東御下知以下證文等、讓与諸三郎丸訖、但上別府内横手・駒走・釘野以上三箇所四至堺各見取帳面者、所讓与次男龜三郎丸也云々、不載惣地頭之詞、如下地進止、定四至堺、書与讓狀於子息等之條、一、奸曲之旨、覺信雖申之、分讓所領於子孫之時、就分限多少、書分四至堺之條、爲通例之間、不足其難歟、云閔東御下文、云父祖手繼狀等、代々爲地頭職諸三郎丸知行之上者、今更可書載惣地頭之詞於讓狀哉、覺信爲郡司之身、難支申地頭職相傳歟、三、次於當國穎娃郡地頭所務者、大炊助入道教佛知行之時、止代官入部、令和与所務、雖被成下知、惣領下野前司入道今者死去、傳領之間、依讓与子息豊後守實忠、申給安堵外題訖、然而郡司敢不申子細歟、穎娃谷山共以曾祖父道佛之跡也、所務之跡、又爲同前之間、覺信支狀旁以難被許容之由、諸三郎丸載陳狀之處、覺信無重申旨之間、頗雌伏歟、四、次覺信帶建仁三年以來閔東御下文以下御公事勤仕狀等、雖申子細、彼狀皆以爲郡司職知行所見之間、不足當論證文之上、以得分和与下知、一向擬停止地頭名字之條、覺信造意非無奸曲歟、五、然則、於彼兩村地頭職安堵者、覺信所支申不及沙汰焉、

一 惡口事

右、覺信則如諸三郎丸陳狀者、於當郡之可職者、高祖父忠久地頭職拜領之時、覺信曾祖父信忠爲忠久芳志、令知行之條、覺信祖父忠光延應二年狀分明也、覺信忘父祖代之芳志、支申地頭職安堵云、於當郡者、信忠帶補任御下文、領掌于今無相違之處、爲芳志知行之由、令申之上者、偏爲恩顧之旨、稱之欵、可被處惡口咎之由訴之、諸三郎丸亦於當郡地頭職者、爲平家沒收之地、忠久拜領之間、本補地頭也、覺信者爲郡司、相從地頭所務、令弁勤所當公事之職也、而覺信爲郡司、支申地頭職安堵之條、過分之造意也、隨而忠光延應狀事、被引載關東御下知之上者、芳志之詞非惡口之旨、陳之者、如弘安十年十月三日關東御下知案者、薩摩國御家人谷山五郎資忠与當郡内山田・上別府兩村地頭大隅式部太郎忠一実字有傳、子息二郎丸代養父道智相論條、一惡口事、資忠則爲恩顧仁之由、久親載訴狀訖、爲惡口之由申之、久親亦資忠先祖忠光得當郡代官職訖、何可爲惡口哉之旨稱之、爰如久親所進忠光七月八日付延應二年狀者、谷山地頭御方御代官職事、如元所申請也、御代官職給天候波牟間波、別御志仁代官一人立候天、時々波御送向申

1615

『池端文書』

枕寝弥二郎清種申、大隅國枕寝院佐多村田地七段園壹所事、

右、彼田園者、本主親政相副關東建長五年十二月廿八日安堵御下文并同六年正月十四日六波羅施行以下狀、沽却

候天、番宿直勢佐世候刃志、暫毛候天過幾難久候波牟時

被、暇於申天罷出候刃志云、者、帶此狀、道智申子細之

處、爲案文之間、難被信用之由、資忠申之、於正文

者、惣領帶持之間、可被召出之旨、地頭雖稱之、如狀

者、爲請所證文之由、所見也、難稱恩顧地頭、亦帶此

狀、聊申子細之條、非指惡口之間、不及沙汰云云、彼

狀不副進本訴具書之上者、難被許容之由、覺信代教信

雖申之、引載諸三郎丸陳狀之上、引付問答之時、出帶

之處、教信不加指難破之間、承伏欵、然則、恩顧之段、

猶以非惡口之由、被載關東御下知之上者、芳志之詞、

難稱過言矣者、依仰下知如件、

正慶元年十二月五日

〔采時〕

修理亮平朝臣(花押)

〔鏡目裏判〕

(花押)

之間、清種買得之處、佐多弥七親經正中二年以來押領之旨、依訴申、度々遣召文上、仰谷山五郎左衛門入道隆信、尋問之處、如隆信今年九月三日起請文者、雖相傳親經、不及請文云々、不遁違背之咎、爰如文保二年十二月十日親政沽券者、大隅國祢寝南保佐多村內親政相傳田屋敷相副御下文以下、代錢參拾五貫文仁清種仁永代沽渡早、田園員數名字者見親綱配分狀云々、且如建長御下文者、當時私領之旨所見也、此上不及異儀、然則、於彼田者、可令清種領掌^(矣)早者、依仰下知如件、

正慶元年十二月五日

修理亮平朝臣^(英時)(花押)

「山田氏文書」

大隅式部孫五郎宗久法師^(山田)道慶^{法名}与谷山五郎資忠法師^{法名}覚信^{法名}

相論薩摩國谷山郡内山田・上別府兩村地頭所務事

右、訴陳之趣子細雖多、所詮、道慶則覺信爲當郡之司、背闕東御下知狀等、抑留地頭得分之間、訴申之刻、依致懇望、令和与所務、去正中二年十月十日兩方預下知訖、而覺信背裁許、抑留地頭得分米錢之上者、任契狀、如元可致所務之由、訴之、覺信亦彼得分物可致沙汰之由、雖

相觸道慶、爲破和与、依不請取之、經上裁、申成御教書之處、覺信抑留之由、掠申之条、奸謀之次第也、所詮、任下知狀、可致弁之旨、陳之者、如覺信正中二年六月一日和与狀者、云加徵米、云檢断以下得分物、每年十一月於當村、可致沙汰、若背此狀、十一月中可請取件得分物之由、雖相觸覺信、不及叙用之間、擬訴申之刻、覺信爲塞後訴、道慶訴訟以前雖申給御教書、不終沙汰之篇、經兩年之上、薩州与博多行程爲十余日之處、元德元年十一月以後十二月十一日覺信捧訴狀於賦方、同十六日申給御教書訖、兼日企奸訴之間、日數不幾歟、是則令抑留地頭得分、道慶及訴訟之時、先立經上裁之由、爲遁申也、就彼御教書、覺信奸訴弥令露顯之旨、道慶申之處、任契狀、可致弁之由、雖相觸道慶、爲破和与、不請取之、過約月之間、訴申之上者、無抑留儀之旨、覺信雖稱之、十二月十六日申賜御教書之後、迄于翌年四月、爲訴人、不終沙汰之篇、送兩年、道慶訴訟以後始而令出帶訖、覺信奸曲爲顯然之間、不可依彼御教書歟、隨而契約得分物十一月月中不致弁者、如元可被知行所務之由、載覺信契狀之上、被引載彼文句於下知狀訖、覺信地頭得分抑留之時、

可悔返和与之条勿論歟、然則、於彼兩村、任正中下知并覺信契狀等、道慶如元可致所務也、次相論以後地頭得分物事、同可令糺返矣者、依仰下知如件、

正慶元年十二月十日

修理亮平朝臣(英時)(花押)

〔雜目纂判〕
(花押)

1617 「山田氏文書」

大隅式部孫五郎入道々慶与谷山五郎入道覺信相論薩摩國谷山郡内山田・上別符兩村地頭所務事、被裁許訖、早澁谷新平次入道相共、守下知狀、可被沙汰付彼所務於道慶也、仍執達如件、

正慶元年十二月十日 修理亮(英時)(花押)

澁谷又次郎入道殿

〔上書之〕
〔修理亮英時卜有之〕

1618 「山田氏譜中」

〔正文在山田七郎右衛門久通〕

大隅式部孫五郎入道々慶与谷山五郎入道覺信相論薩摩國谷山郡内山田・上別符地頭所務事、被裁許訖、早澁谷又

次郎入道相共、守下知狀、可被沙汰付彼所務於道慶也、仍執達如件、

正慶元年十二月十日 修理亮(英時)(花押)

澁谷新平次入道殿(定巳)

1619 『正文池端氏家藏』

祢寢弥二郎清種申大隅國佐多村内田園事、被裁許早、守彼狀、可沙汰付也、仍執達如件、

正慶元年十二月廿日 修理亮(英時)

谷山五郎左衛門入道殿(寬信)

税所介殿